
AUGUSTUS

幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AUGUSTUS

【Nコード】

N1034BA

【作者名】

幸

【あらすじ】

魔導という超常の力を使い、発展してきたユスティア大陸。その西域は今、まさに戦乱の世であった。

各々の国々が覇権をかけて争いあう中、エルヴァ神聖帝国を名乗るその国は、ドライゼムという強力な指導者の下、各国を併合していく。その中には、ヴァンという少年が率いる傭兵団、キルヒア傭兵団の姿もあり、彼等は幾多の戦いにおいて戦功をあげていた。

着々と実績をかさねるヴァンたち。しかしその影で、不穏な動きをする者たちがいた。

彼等の謀略は、やがてヴァンたちを巻き込んでいく。
平和を望み、戦い続けるヴァン達運命は…？

一人語り

世界は残酷だ。

俺はこのことを、幼い時分に悟った。

周囲には戦乱が、略奪が、殺戮が満ち、血が流れない日はなかった。だが、そんな中にあっても、俺は生き延びることができた。俺に優しくしてくれる人がいたからだ。

その人は俺に生きる術を、仲間を与えてくれた。

嬉しかった。こんな世界でも優しさというものがあり、そしてそれはこうも人を救ってくれるのだということが。

だから、俺も誓うのだ。

例えばこの先、どんなに世界が残酷であろうとも、自分を救ってくれた優しさを忘れない限り

俺も、人に優しくあろう……

—ヴァン

第一章 戦乱

「どうした、ヴァン。そろそろお前が言っていた場所に着くぞ」

老剣士が、その傍らに歩く若い剣士、ヴァンに気遣わしげに声を掛けた。

まだ少年と呼べる年齢にあると思われる彼は、はっとしたかのように僅かに幼さが残る顔を上げ、老剣士を見遣る。どうも考え事の方に意識が向いていたらしい。

身につけている武器に触れ、今いる場所をもう一度思い起こしてから「……ああ、分かってる」と老剣士にヴァンは応え、何かを振り切るように首を振った。

それを見た老剣士は、白が混じる顎鬚をしごきつつ目を細めた。ヴァンを見つめるその顔は、厳しい。

「……まさかとは思うが、ここに至って怖気づいたわけじゃあないだろうな？」

「まさか。怖気づいたなら、初めからこんな策なんて言わないさ」「なら良いが……」

「心配しなくてもいい、レグス。どうせ、すぐに考え事をする暇もなくなる。……俺たち全員の命が掛かっているからな」

それにと続けて、同時にヴァンは辺りを見渡す。

そこは、うつそうとした森が生い茂る山の中だった。

昼であつても森の中は暗く、その上傾斜がきついため普通に立っているだけでも気をつけなければならない程である。

そんな中を彼と老剣士レグス、そしてその周りに五十人ほどの戦士が思い思いの武器を腰に下げ、ハミを噛ませた馬と共に歩みを進めていた。

ヴァンは最後に彼等を見てから、改めてレグスに向き直る。

正面からレグスを見つめ返すその目に、迷いはなかった。

「俺が、こいつらの団長だ。必ず、やってみせる」

言い切ってみせ、胸鎧に刻まれた紋章、五つの星を背景として剣と木の杖が交錯している、に手を遣った。

キルヒア傭兵団……それがヴァンが団長を勤める、彼等の名であった。

毅然としたヴァンの姿に、レグスは厳しい顔を緩めた。

「……分かった。どうやら要らん心配だったようだ、すまん」

「いいさ。それも親心みたいなもの、だろ？」

「ふん、まあそうともいえるか。しかし、わしにこうもものを言うとはな。随分と生意気になったものだ」

厳しい顔を崩し、レグスはふつと笑みをもらす。ヴァンもつられて笑みをこぼした。

「生意気にもなるさ。なにせ、俺の肩には皆の命が掛かってる。それともびくびくしてる団長でもレグスは見たいのか？」

「おつと、それは御免被る。そんなことになったらわしがお前を団長から引きずりおろさなきゃならん。面倒事は勘弁だ」

「ずいぶんあっさりと言うな……レグス、一応お前は俺の後見人だろ？ 助けるみたいな考えはないのか」

「見込みのない人間にやらせておく方が、むしろ本人にとって良くないということさ。そうなりたくないなら、ほれ、もっと頑張ることだ」

二人して言い合う。しかし二人の顔は笑っており、会話を楽しんでいる様子が見て取れた。

「おいおい、どうしたよ？」

「またっケンカっすか。だんちよー、しっかりしてくれなきゃ困りますぜ？ 俺らアンタに命掛けてんだし」

「やっぱ団長やるにはまだ早かったんじゃないか？」

すると、それに乗じて彼等の周りを囲っていた者たちが、一斉に声を掛け始めた。

話に乗ってきた団員達に、ヴァンは苦笑する。さっきまで緊張した面持ちだったというのに、気楽なものだ。

（だが……頼もしくもある）

そしてこれから始まる地獄を考えれば、彼等の明るさは救いでもあった。

口に出さず、信頼の言葉を胸の中でヴァンは言う。しかし緊張が緩みすぎてもまずいため、一応たしなめておいた。

「おいお前ら……乗ってくるのも良いが、しっかり足元を見ている。転んでも助けてやらないぞ」

「その通りですよ。皆、もう少し緊張感を持ってください」

そこで新しい声が割ってはいった。その声を発したのは、木々の間から現れた兜を被った細身の剣士だった。後ろに数名の戦士を連れ、ヴァンの元へ歩いてくる。

「イルシュ、偵察してきてくれたか。……どうだった？」

「ヴァンの読みどおりでした。この先です。レグス、今の時間は」
イルシュの言葉を受け、レグスは首を上げて僅かに漏れる光の角度を確認する。

「角度から見てそろそろ正午……といったところか。どうやら時間には間に合ったようだな」

「……ああ。しかも、一番良い時分に着いたらしい」

……風に乗り、音が聞こえる。ヴァンにとって聞きなれた、忌まわしい剣戟の音。香るのは、鉄と血の臭い。

ヴァン達は歩みを速めた。音と臭いが一歩進むごとに強くなっていく。

そして、木々が少ない辺りを見渡せる場所に出て、そこから見下ろした、その先には

——戦場が、広がっていた。

「つつこめエーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！」

「突撃、突撃！ー」

「怯むな、応戦しろ！」

「祖国のために！」「祖国のために！！」

「我が王のために！」「我が王のために！！」

「敵を、撃ち滅ぼせ！！！」

怒号、爆音、剣戟……ありとあらゆる暴力が支配する場、戦場。

血と屍が辺りに満ち、生と死の境界線が限りなく近くなる場所だ。そこにあつて、兵士達はあらん限りの声をあげ、恐怖を押し殺して戦っていた。

——ここはレマン公国、ファレナ山脈地帯。

ユスティア大陸の西域に広がり、豊かな土壌を有するこの国は今、西域各国に侵攻を続けるエルヴァ神聖帝国の猛威に晒されていた。

「ここを守りきらなければ後はない！ 全員、死力を尽くせ！ 侵略者どもを叩き出すのだ！」

レマン公国軍の一部隊の隊長が馬上から剣を振りかざし、部下達を鼓舞する。

彼のいうとおり、レマン公国には後がなかった。既に国の城砦の殆どはエルヴァに落とされ、更に国の穀倉である田園地帯も占領されてしまった。

残った城砦に残存戦力を結集させ、籠城するという手もあったが、それを行うには多くの兵糧がいる。

穀倉地帯を取られ、地力で劣るレマン公国軍は兵糧の補給の目当てもないまま、籠城するという選択をするわけにはいかなかった。

かくして、レマン公国軍は戦える戦力を結集し、ファレナ山脈の麓で決戦の幕が開けることとなったのだ。

「家族を想え、隣人を想え、恋人を想え！ 彼等への蹂躪を防ぎたいと思うならば、持てる力の全てをこの戦いに注ぐのだ！ —— 騎馬隊、前へ！！」

号令がかかり、彼の隣に控えて温存されていた騎馬隊が動き始める。

彼等のいる場所は、左翼。この後の一斉攻撃に合わせて一時戦列

から突出、左から回り込んで敵後方へと突貫する手はずとなっていた。

現在レマン公国軍は、四万対三万という数で勝っている利を活かし、絶え間ない攻撃をエルヴァ軍に加えていた。

右翼、中央、左翼が敵軍を包むように展開し、重装歩兵部隊が槍袈を築いて敵を牽制。更に後方から放たれた矢が敵の前線に降り注ぎ、完全に動きを止める。そして

「魔導士隊、操律開始！」

將軍の命令と共に、ローブに身を包んだ者たちが印を組んで念を集中させ始めた。

すると、光り輝く文字らしきものがエルヴァ軍を包むように現れ始める。

術者の意思に従い、文字の列は形を変えて術式と呼ばれる形に整えられ、彼等の望む事象を発現させようとしていた。

魔導、これこそがこの場にある力の名。自身の意思によって世界を解析、介入し、尋常では有り得ざる事象を呼び出して行使する呪法のことだ。

魔導がいつ使えるようになったのか、それは誰にも分からない。一説では世界を作り上げた神々が残した創造の法の残骸というが、定かではない。

だが起源には多くの謎が残るものの、とにかくこの力を人々が使えることは事実である。

人々の力として、魔導は様々な場所でその力を振るわれており、人々の助けとなっていた。……そしてそれは、当然戦場でも。

「術式は『暴爆』、敵を一掃しろ——放て！」

術が完成し、文字列が一層輝く。直後、その周辺に幾つもの爆発が起こった。そして立て続けに、全ての戦列においても爆発が起こる。

魔導の術式の一つ、『暴爆』が発動したためだ。魔導による攻撃は、そのまま敵の前線を崩すかと思われた。

だが、そこに敵陣からも文字列が現れ、レマン軍の文字列にまわりついていく。

エルヴァ軍による魔導の中和だ。発動しかかっている魔導に対し、その完成を阻害するべく魔力を展開。術式完成するのを阻止しているのだ。

魔導の術式が戦場に乱舞する。世界に干渉し、干渉され、混ざり合う文字列は、歩兵たちのぶつかり合いとは違う戦いの様相を呈していた。

それを見て取った隊長は一つ頷き、「予想通りか」と呟く。続けて、

「……全騎突撃！！ 矢による攻撃に注意しつつ、敵右翼に回りこんで後方に控えている部隊を叩くぞ！」

部下達に突撃の命令を下し、敵陣の中に突っ込んで行った。

——その一方、エルヴァ軍。

「フン……数の差もあるとはいえ、随分と調子付いているな……」

大柄な体を全身鎧で身に包み、馬上の人となっているエルヴァ皇帝ドライゼム・オリヴァルドは、次々に入ってくる報告からそんなことを呟く。

先の大規模な魔導による攻撃により、現在エルヴァ軍の前線の足が止まっていた。

数の差もあり、このままならばエルヴァ軍を包み込むように部隊を展開され、殲滅されるのではないか……そう考えてもおかしくない状況である。

だが、ドライゼムは悠然とした態度を崩さない。

彼は侵略者として、多くの戦いに臨んできた。その幾多の戦いの経験が、この戦いの趨勢を教えてくれる。

現在の時点で、両軍は互角。彼と共に戦場を潜り抜けてきた彼の軍は精兵揃いと言って過言ではなく、数的な有利を打ち消すに十分

な力量を持ち合わせていた。

今の段階では数の差で押し込まれているが、いずれ時間がたち、両軍の疲労が大きくなってきた際に、兵の差は如実に表れ始める……ドライゼムはそう予測を立てた。

そうなれば後はこちらのものだ。ならば、警戒すべきは

「報告いたします！」

伝令が息を切らし、駆け込んでくる。

「敵左翼から騎馬隊の一部が突出、我が軍の右翼に回りこみ、側面を突こうとしているものと思われます！」

「……やはり来たか」

戦況を変える一手を打とうとする者たち……彼等の存在だ。

両陣営の魔導士による干渉のために、魔導による攻撃が現状ではお互いに見込めない。それを見越した上で、機動力に優れる騎馬隊で側面からの攻撃を敢行したのだろう。

魔導による妨害をしようにも、こちらも相手からの干渉を受けているためにろくに発動させることも出来ない。かといって、前線の部隊を戻すにも、後方の部隊を動かすにも、レマン軍との数的不利あるため迂闊に動かすことは出来ない……

（単純ではあるが、戦況を読み、仕掛ける機を見る目が必要な策だ。敵にも目聡い人間がいるということだな……面白い）

「目標は、おそらく俺か魔導士隊だろう……今余計に部隊を動かすわけにはいかん。俺が出る」

「こ、皇帝陛下自らですか！？　しかし、後方には温存されている部隊もいくつかあります。彼等に任せればよいのでは……」

隣に控えていた参謀が異議を唱える。だが、ドライゼムはどこ吹く風だ。

「聞こえなかったか？　俺が出るといったのだ。それに」

ぐい、と参謀の襟をつかむ。野太い腕につかまれ、ひつという声を参謀は漏らした。

「確かにお前は有能だ。だからこうして側に置いている。だが、俺

が出るといったのだ。ならば、お前がしなければいけないことは分かっているな……？」

「……！ し、失礼しました！ では陛下に代わり、本陣の指揮を取らせていただきます！！！」

必死な形相で弁解する。理解している事を確認したドライゼムは手を離してやった。そして呆然とした様子の伝令に、苛立たしげに声を掛ける。

「聞いていたなら、さっさと各部隊に伝える。今の持ち場を離れる必要はない、そのまま戦線を維持しろとな……」

「りよ、了解しました！」

青い顔をして転がるように駆けていく。

その様子を鼻で笑いつつも、ドライゼムは苛立ちが晴れ、歓喜が胸に満ちていくのを感じていた。

（やはり戦場はいい……生と死の境界を感じ、それを潜り抜ける快感……何者にも代えられん）

歓喜の赴くまま馬の腹を蹴り、走り出す。彼を囲む親衛隊も、彼に従って動き始めた。

親衛隊を率いて進軍する彼の姿は、まさしく皇帝と呼ぶにふさわしい威厳を持っていた。

既に四十を超えている身ではあるが、微塵も衰えを感じさせない動きで馬を御し、武器である巨大な戦鎚を握る姿は力に満ち溢れ、見る者に威圧感を感じさせる。

戦皇ドライゼム。彼は相対する者たちから、こう呼ばれていた。

（そしてその相手が、骨のある敵なら尚更だ。他の者には譲ってやれんな……！）

戦鎚を握る手に、力がこもる。……突出してきた敵騎馬隊が見えた。

「……かれー！」

帝の咆哮が、空気を振るわせる。同時に親衛隊も抜刀、一系乱れぬ動きで挑みかかっていく。

すぐに騎馬隊同士の乱戦にもつれ込む両軍。ある者はすれ違いざまに切り伏せられ、ある者は並走して切り結ぶ。

その中で特に目を引くものは、やはり彼だ。

「どうした、その程度か!!」

大喝と共に振るわれる戦鎚は、馬上の戦士を容赦なく吹き飛ばした。鎧を着けていようと、おかまいなしにだ。

彼が駆けるたびにレマン公国の戦士が吹き飛んでいく様は、彼等からしてみれば悪夢の具現に他ならないだろう。

「ここに貴様らの憎む戦皇がいるのだぞ!? もう少し骨のある所をみせんか!!」

今度は頭上から振り下ろす。ベこりという音がなり、兜が陥没。一撃で命を刈り取られ、そのまま馬から転がり落ちていく。

「く、くそ、この悪魔め!」

「怯むな、困め!」

「例え戦皇といえど、所詮は人間。複数でかかれば!!」

レマン軍からしてみれば、この乱戦はドライゼムを討つ絶好の機会である。その機会を見逃すわけにはいかない。

戦える人間を必死に掻き集め、複数でドライゼムに挑みかかる。

前後左右からの攻撃。それに対し、ドライゼムは

「甘いわ!!」

「な!?!」

なんと、全ての攻撃を受けきって見せた。前方、右方からの攻撃は戦鎚の柄で、後方、左方から攻撃は振り向きざまに盾をかざして。レマン公国の戦士たちは、驚愕に目を見開く。彼等は全力を乗せて、決死の一撃を放ったつもりだった。それを、しかも四人全ての攻撃をして防ぎきる……なんという膂力であろうか。

「どうやら見込み違いだったようだな。貴様らでは俺の心を満たしてくれることなど、できそうもない……ぬん!!」

気合の一声と共に、槌を、盾を横に薙ぐ。それだけで戦士達は吹き飛び、馬上から落ちていった。……ただ一人を除いて。

「ま……だだ、まだやられん!!」

凄まじい暴圧に、体勢と馬を制御することで耐えた一人が、再度剣を振りかざしてドライゼムに挑みかかる。鎧の胸部につけられた紋章から、彼はこの騎馬隊の隊長と知れた。

「ほう、まだ向ってくるか！ そうこなくてはな!!」

決着が付いたと思っていたドライゼムは再度向って来る彼の姿に破顔し、馬の腹を蹴って再戦に臨む。

すれ違いざまに一閃、両者共に回避。馬首を返し、再度の一閃。また回避。

何度も打ち合いを交わす内、いつしか両者は並走して槌と剣を打ち交わしていた。

「陛下、助太刀を!!」

途中、助力を申し出る親衛隊もいたが、そのたびに「不要だ！俺の楽しみを奪ってくれるな!」と言って、並走を続けるドライゼム。

だが敵の方からしてみればこの言葉は侮辱でしかない。一層の怒りを込め、叫ぶ。

「余裕のつもりか、貴様!!」

「フン、むしろ俺を殺すチャンスを与えてやっているも同然なのだな!!」

言いつつ、槌を振るう。

直撃はしなかったものの、隊長の肩に当たる。一瞬よろけるが、執念のなせる業か、それでも彼は必死に体勢を立て直した。

「ぐ、く、そ……!!」

「どうした、その程度では俺の命には届かんぞ!! 大言を放っておきながら、このまま朽ち果てるか!!」

「……ッ……いいだろう、貴様の傲慢、ありがたく受け取ってやる! だが命を落とすのは貴様だ。冥府で自分の甘さを後悔するかい!!」

「いいぞ、その調子だ。そのまま俺に怒りを、お前の全てをぶつけ

て来い！ 粉微塵に打ち砕いてやろう！！」

「ほざけー！」

勝負を付けるべく、裂帛の気合を乗せて双方が必殺の一撃を繰り出す。

ドライゼムは盾を捨て、戦槌を両手に構えての渾身の一撃を逆袈裟に放つ。隊長は剣を水平に構え、馬の速さも乗せた突きを放った。轟音が、辺りに響く。

必殺の一撃同士の決着は……ドライゼムの勝利だった。

戦槌が隊長の胴にめり込み、鎧を陥没させている。逆に彼の剣はドライゼムに当たる瞬間、体を僅かにそらされ、宙を切っていた。隊長の口から血が吐き出される。馬から転げ落ち、ひゅーひゅーという頼りない息を吐く。……虫の息なのは、誰が見てもはっきりとしていた。

「礼を言う、なかなか楽しかったぞ。最初、見縊っていた事は詫びておこう」

彼の隣に馬を寄せたドライゼムは、満足気な表情で声を掛ける。

そのまま槌を構え

「さらばだ」

頭をめがけて、振り下ろす。一瞬の内に命を刈り取られ、隊長は身動きしなくなった。

周囲の敵も次第に数を減らしつつある。どうやら、敵騎馬隊を片付けるのは時間の問題のようだ。

ドライゼムはしばし、己の内に起こる充足感に浸る。死線を潜り抜けた快楽と、そしてそれ以外に起こる侵略者としての喜びに。

それは、蹂躞の喜びだ。

皇帝として圧倒的な力を振るい、人も、土地も、街も、全てを征服していく喜び。

己が意思一つで人の生全てを操ることのできる絶対感は、一度味を占めればとまらぬものとドライゼムは考えている。

周囲を見る。彼が倒した隊長以外にも、多くの屍が転がっていた。

それらを見つめてドライゼムは、更なる充足を覚える。

（屍を築き、何もかもを砕いて進むこと……己の意思が全てに勝利、相手を屈服させる……それらが、俺の全てだ）

だからこそ、なのだろう。西域の侵略などというものにエルヴァを、己の国を駆り立てたのは。

一地域しか元は支配していなかったエルヴァだが、彼の強権によって瞬く間に軍備を拡大し、今では西域の半分を支配するまでになっている。

このまま順調にことが進めば、いずれ西域の全てが彼の手に落ちるだろう。

（最も、それもまだ手始めに過ぎんがな……さて……）

ドライゼムは頭を切り替え、前線に目を遣る。

戦いが始まってからそれなりの時間がたち、兵の質の差が徐々に始めてきたようだ。少しづつ、レマン軍を押し返し始めている。

（……だが、まだ決定的とは言えん。レマン軍も、まだ兵力に余裕がある）

また、決死の覚悟で臨んでいるためか、士気も高いようだ。今まで相手してきたレマン軍とは違う。

下手を打てば負ける可能性もあることを、ドライゼムは理解していた。それに例え勝ったとしても、今の彼等相手では相応の兵力の消耗は覚悟しなければならぬだろう。『後のこと』も考えれば、それは出来る限り避けたかった。

蹄の音が近づいてくる。みれば、親衛隊の一人がこちらに向かい駆けてきていた。そのままドライゼムの側に止まり、馬上から一礼する。

「馬上から失礼致します。敵騎馬隊の掃討、完了いたしました。こちらの損害も軽微です」

「そうか、ご苦労」

「ハッ。それと前線の状況についてですが……」

「それはいい、もう分かっている」

「分かりました。それでは、これからどうなさいますか？ このまま前線へ？」

「……いや、今はあちらに任せておく。こちらが押し返し始めたとはいえ、まだどうなるか分からん。余力は残しておく」

「ハッ、了解いたしました。では陛下、護衛仕ります」

「ああ、分かった」

鷹揚に頷いてからドライゼムは自分の馬にまたがる。そのまま護衛と共に、本陣へと戻っていった。

その際、両軍の東側に走るファレナ山脈に数瞬視線を飛ばす。

「……そろそろ頃合だろう、ヴァン。今回もお前の力、見せてもらうぞ……」

楽しい笑みを浮かべ、ドライゼムは呟いた。

「……戦況はほぼ互角、か」

ヴァンは戦場を見下ろしつつ、そう分析する。レグスも彼に同意した。

「ああ。だが、エルヴァ軍が押し返し始めているようにも見える」

「確か、斥候の報告ではレマン公国軍は四万だったか……一万の差があってもこうまで戦える……雇い主とはいえ、つくづく恐ろしいな」

「まったくだ。だが、押し返し始めているとはいえ、戦況が決定的になったというわけでもない。むしろこれから本番だろうよ」

「そして、だからこそ私たちがここにいるのでしょうか？」

イルシュが会話に割り込んでくる。

「指示通り、皆配置についています。後は、レマン軍の背後を突くだけ……ヴァン、あなたの指示を皆が待っています」

「そうか……いいよだな」

ヴァンは戦場から目を離し、自分の馬のところへ戻っていく。

馬にまたがり、全員が準備できている事を確認したヴァンは、彼等に声をかける。

「これから俺達は、レマン公国軍左翼に対して背後からの奇襲を敢行する。やることは分かっているな？」

「もちろん。あいつらの魔導士隊を叩けばいいんだろ？」

「バカ、そんなことは分かりきってんだよ。どう動くか打ち合わせしてただろうが」

「突入するまでは護衛部隊と当たる可能性も考えて錐行陣形、突入後は打ち合わせで決めていた通り、四、五人の小隊に分散。各隊で行動する……だな」

「……へいへい、言われなくても分かてるさ、そんなこと。ともかくあいつらの目もエルヴァ軍本隊に向いてるようだし、今なら余裕で不意を打てるだろ。楽勝だぜ」

こともなげに団員の一人が応える。しかし彼の言っている事は、本来なら難しい。

魔導士たちを如何に守るかは、戦いにおいて勝敗を分かつ重要な要因だ。軍隊同士のぶつかり合いにおいて、魔導士隊の喪失は相手の魔導による一方的な攻撃を許すことに繋がるからだ。

そのため魔導士隊は基本、敵からの攻撃を受けない後方に配置される。また、魔導の行使には多くの集中を必要とするため、その周囲に護衛部隊が展開されているのが一般的であり、守りも堅いのだ。今回の背後からの奇襲は、その堅い守備の間隙を突くためのものでもあった。

「ああ、後そいつら以外は目もくれるなつてのもあったか？ まあ、もたもたしてりゃ俺たちの方が殺されちまうしな」

「ああ、そうだ。俺達は五十、対して敵は四万……暴れた後、すぐさま離脱しなければ俺たちの命はない。俺たちの役目はあくまでエルヴァ軍の右翼の援護だ。突入後、5分で何があつたとしても離脱すること。これを絶対に忘れるな」

全員を見渡し、ヴァンは念を押す。団員達は彼の言葉に頷き、「

それじゃあ、さっさと始めようぜ！」と氣勢を上げた。

「前線に残って戦ってる仲間も、早いトコ楽にしてやんなきゃならねえしな」

「三日三晩、山登りでうんざりしてたんだ。さっさとあいつらを蹴散らして凱旋といこうぜ、団長！」

「まったく。しかも自軍と敵軍の位置を逐一気にしなきゃいけないし、余計に苦労したぜ」

「おいおい、迷いかけたお前が言えることかよ！」

「うるせえ！ 何度も転びかかって助けてもらったおまえには言われたかねえぞ！」

「ぎゃいぎゃいと言いかう団員達。ヴァンはくすりと笑みをこぼし、しかしすぐに表情を引き締めて「では、行くぞ」と彼等に呼びかけた。そしてゆっくりと片手を上げていく。

言い合っていた団員達もすぐに口をつぐみ、武器を構えた。

ヴァンの片手が上がりきり、後は振り下ろすだけとなって……ふと、自分が何をしようとしているのか、思う。

自分が目指しているもの、エルヴァの侵攻、受け継いだもの……様々な想いがその一瞬の内に脳裏を駆け抜けてゆき、今の自分と理想との違いを彼に思い知らせる。

見れば、先程のレグスと同じ様に、イルシュが兜の奥から心配げな視線を送ってきていることに気付いた。

イルシュに笑いかけ、大丈夫だと伝える。

（今は、考えを巡らせている時じゃない……そんなことは、生き残ってから考えればいいことだ）

駆け抜けていったものと、自分を取り巻く状況の全てを飲み込み、ヴァンは……手を振り下ろした！

「？ 何だ？」

前線に神経を集中させ、魔導を発動させようとしていたレマン軍

の魔導士は、ふと聞きなれない音を耳にした。首を巡らせ、辺りを見回す。

「おい、集中しろ！ 何ボサつとしてるんだ！」

同僚が集中を切らした事を咎めてくる。しかし彼は逆に、同僚に聞き返した。

「なあ、何か聞こえないか？ まるで蹄の音みたい……」

「蹄？ そんなもの、聞こえるのは当然だろう。ここは戦場だぞ。大方前線に出払ってる騎馬隊のものでも聞こえたんじゃないのか」

「いや、違う。小さくだけど、確かもつと近くで……」

話している間も首を巡らせていた魔導士。

だがそこで、彼は見てしまう。とても馬が走れるものではないファレナ山の斜面を駆け下りてくる、戦士達の一団を。

「……！？」

驚きのあまりに息が詰り、声が出せなくなる。

一瞬、見間違いかと思った。だが、木々の合間から見えるそれは、確かに現実のものだ。傾斜をもとめせず、恐ろしい勢いで下りてくるあの一団は！

「何だ、急に固まって。そっちはファレナ山だろ、そんな方向に一体何があるって……！？」

視線を追い、同僚も気付いたのだろう。彼もまた、息を詰らせて凝視する。

急がなければ、急いで皆に知らせなければ。魔導士はそんなことを考えて声をあげようとするも、驚愕と恐怖のために体が動かない。じわじわと胸にせり上がって来る絶望を彼は感じつつ、ついにその一団は麓に姿を現した。

キルヒア傭兵団騎馬隊を率いるヴァンは、一直線に魔導士隊に向っていく。

だがあと少しの距離まで来て、護衛部隊の一つが彼等の前に立ち

ふさがった。その数、五百ほど。

数の差は歴然としているが、しかしヴァンたちは怯まない。ヴァンの隣を走るレグスが一瞬視線を向けてくるが、それに頷き返す。

（迂回している暇はない。敵の対応の速さは予想外だったが、まだいける……）

先程戦場を見渡した際、魔導士隊の護衛も確認していたが、歩調を合わせるためか全て歩兵で構成されていた。

しかも魔導士の護衛として前線に立たない点を考慮してか、後方支援のために弓矢を装備している軽装の兵士が多い。

当然接近戦をするとなれば、近接戦用の武器に持ち替えるのだから……

（だが、その持ち替えの時間が命取りだ！）

一気に距離をつめ、弓を構える時間も、装備を代える暇も与えない。

現に眼前の部隊は突然の襲撃に、魔導士隊の盾となる位置にまで移動したはいいものの、武器を持ち替えるべきか、そのまま弓を構えるかで右往左往している様子が見て取れた。

（今ならば……突破できる！）

「全騎、進路をこのままで維持！ 護衛部隊を突っ切るぞ……！」

団員達に命令を下し、ヴァンたちは一直線に護衛部隊に突っ込んでいった。

馬の蹄が護衛部隊を踏み潰していく。

騎兵には突破力がある。重装備で固めているならともかく、軽装備の歩兵では食い止めることなどできない。歩兵達はもはや、キルヒア傭兵団にとって吹いて倒れる木偶でしかなかった。

「邪魔だ！ どけ、どけ……！」

レグスが馬上で大剣を振り回し、まわりついてくる者達を蹴散らしていく。

「ふっ！」

イルシュは鋭い呼吸を吐き、突き出した細剣が敵兵の急所を貫く。

そして

「……はあああああああ！！！」

気合の掛け声を上げるヴァン。その剣閃が幾重にも瞬き、鮮血を宙に散らしていった。

彼等は一直線に護衛部隊を掻き分けて前進し、ついに突破する。

彼等の眼前には、レマン公国魔導士部隊の姿があった。

「ひ……ご、護衛部隊が簡単に！」

「ま、魔導を！ 早く……早く！」

「落ち着け！ 味方も吹き飛ばす気か！？」

「だったらどうするんだ、おい！？」

「逃げる、逃げるおおおおおおお！！！」

予想通り、慌てふためいている。……一瞬、ヴァンの胸に小さな痛みが走る。だがそれに構わず、彼は分散の指示を出し、魔導士隊に突入した。

魔導士たちを倒すのは、先程の護衛部隊を突破するよりも遥かに容易かった。普段は安全な場所に位置し、直接戦うことをしない者たちはヴァンたちにとってあまりに貧弱すぎたのだ。

また、魔導士同士の連携を強めるためか、密集した陣形をとっていたことも彼等に災いしている。助けに向おうとしても、魔導士たちがそこかしこにいるので騎兵では踏み潰してしまう恐れもあり、かといって歩兵では騎馬の速さに追いつけないのだ。

かくして、一方的な殺戮が展開されることとなった。

「た、助け……うわ！」

必死に命乞いをするも、騎馬の突進に踏み潰される。これと同じ光景がそこかしこで繰り返され、もしくは剣を振るわれて切り伏せられていた。

ヴァンの脳裏に、虐殺という言葉がよぎる。しかしよぎった言葉を振り払うかのように剣を振り回し、魔導士たちを屠っていった。彼等を倒さなければ、こちらが不利になるのは間違いないのだ。それに彼等も魔導を用いてエルヴァ軍の兵士を殺している。

（そして何より、この奇襲を提案したのは俺だ……何を今更、迷うことがある！！）

不要な事を考える自分に対する怒りでヴァンの顔が歪み、より激しく剣を振るって切り伏せていった。

そうしている内に、やがてはつきりと感じられるほどに魔導による干渉が弱くなっていることをヴァンたちは知覚する。多くの魔導士を殺され、また、精神的な動揺を加えられて魔導をまともに行使できなくなった影響がはつきりと出始めたのだ。

視線を遠くに飛ばせば、効果を十分に発揮できるようになった魔導を用いてエルヴァ軍右翼が猛攻を開始していた。

後はエルヴァ軍に任せても問題ない、時間的にも丁度いい頃合だろう。逃げ惑う魔導士たちを見ながら、ヴァンは判断を下す。

「ここまでだ。全騎、引き上げるぞ！」

周囲にいた仲間呼びかけて、即座に「応！」という声が帰ってくる。

仲間を先に行かせてからヴァンも馬首を返して引き上げようとした、その時だった。ヴァンの背筋にひやりとした感覚が走る。その感覚に従うまま、ためらいなく馬から飛んだ。

直後、先程までヴァンがいたところが爆発する。暴爆の術式だ。

しかもこれは

（隠式の術式を併用している。それも、かなり高度な……！）

大地に叩き付けられる際に受身をとリ、素早く体勢を立て直したヴァンは攻撃してきた魔導士の力量を相当なものと分析する。

魔導を発動させる際、魔力を世界に浸透させる必要があるのだが、それを隠蔽する術式も魔導には存在している。それが隠式の術式だ。もつともこの術式自体、行使する分にはさほど難しくはない。だが、敵に発動を気付かれないという利点の他に、本命の術式と並行して発動させていかなければならないのだ。

そのため実質二つの魔導を同時に使い集中力を分散させてしまう点にこれを使う難しさがあった。しかし、現に攻撃してきた魔導士

はそれをやつてのけている……

「ヴァン！？ 大丈夫ですか！」

ヴァン同様、後に残っていたイルシュが彼の異常に気付き、近づいてくる。

不用意だと注意を呼びかけようとするが、またあの感覚が襲ってくる。その感覚が告げる先に……！

「イルシュ、危ない！」

「え……！？」

再度の爆発。直撃ではなかったものの、爆風で馬もろともイルシュは吹き飛ばされる。

即座に駆け出したヴァンは、すんでのところでイルシュを受け止めた。

「あ、ありがとう、ございます……」

「礼はいい、立てるか？」

「あ、はい……」

どこか呆としているイルシュを立たせてから、ヴァンは感覚を研ぎ澄ませて周囲に目を走らせる。

すると隠式によって隠された術式が、辺りに張り巡らされつつあることに気付いた。式の展開の速さに驚きつつも、先程の攻撃と合わせてヴァンは相手の意図を確信する。

（味方もろとも、俺たちを殺すつもりか！）

見れば、魔導士たちも戸惑っている様子だ。だが、こちらには躊躇している暇はない。馬を失ったが、ここで立ち止まっていれば確実に殺される。

より感覚を研ぎ澄ませ、周囲に展開されている魔導を逆手にとつて魔力を供給している源を探し出す。

（爆煙で視界が確保できない……レグスたちも探しにくい現状、まづ攻撃を仕掛けている魔導士から倒す他はない……見えた！）

「そこか……！」

駆け出し、少し離れた場所にいた魔導士に剣を振り下ろす。が

「な!？」

ヴァンは驚きの声を漏らす。なんと、魔導士も剣を抜いて彼の攻撃を防いで見せたのだ。それどころか、押し返してヴァンの態勢を崩し、追い討ちを仕掛けてくる。

なんとか態勢を立て直し、防ぐ。そのまま鏖迫り合いにもつれ込んだ。

「……若いというのに、存外やるものだ」

魔導士が声を発する。幾分しわがれた声。

フードから覗く顔を見てみれば、その男は壮年と言っていい年齢であるとヴァンは思える。

しかしその身からでる気迫はレグス同様老いを感じさせないほどに強く、剣を交えていても些かも動じない不動の意思を感じさせた。普通の魔導士であれば、こういった直接的な戦いには慣れていないはずなのだが。

強敵——そう感じながら、ヴァンも口を開く。

「そちらも、な。まさか魔導士がここまで剣を遣れるとは思わなかった」

「コレでも昔は、それなりに名の通った戦士で知られていてな。歳で前線に立てなくなったが、貴様を屠るには十分だ。せめてもの一太刀、刻ませてもらうぞ」

「……成程な……だが、それは味方も巻き込んでも、か？ 随分見境がない」

「どうせエルヴァが勝てば同じことだ。お前たちのしてきたこと、知らないとは言わせん」

憎しみの籠った目を向け、魔導士は剣に一層の力をこめてくる。耳障りな金属音が鳴った。

「それにもはや、勝敗は決したも同然だ。魔導による支援がなくなつた今、エルヴァの右翼を止める手段はない。すぐに左翼を突破され、残りも元の勢いに勝るエルヴァに蹴散らされるだろうよ」

くつと魔導士が笑う。だがそこに浮かぶのは、抑えきれぬほどの

怒りだ。

「……そうだ。貴様ら如き、近づかれる前に魔導を発動させることさえ出来れば多少の犠牲だけで止められたのだ。そうすればこんなことにはならなかった。だが味方に犠牲が出るという理由で止められた。命を落とす覚悟もない、大局も分からぬ軟弱共のせいだ！」
突然激昂し、声を荒げる魔導士。味方への、エルヴァへの、様々な物へごちゃ混ぜになった怒りが、彼の発する気迫をより強くする。そしてバチリという音が鳴った。

「せめてもの慰めだ。元凶たる貴様らだけでも殺し、滅び行く祖国の手向けとしてやる。どんな犠牲を払ってでもな！」

次の瞬間魔導士は剣を跳ね上げ、がら空きになったヴァンの腹に向い、拳を突き出してくる。

拳程度なら鎧で止められると一瞬ヴァンは思ったが、先程の音を思い出して再度後方に飛び退る。その際、突き出した拳が帯電しているのが見えた。

属性付与式……武器に炎などを纏わせる、近接戦用に編み出された魔導の一つだ。術式を編む時間が比較的少なく、拳による攻撃であつても付加した属性による効果が見込める利点がある。

魔導士が使ったのはそのうちの一つ、雷撃付与の魔導である。だが、先程の剣術といい今の魔導といい……

（まさか『魔闘』が使える人間が、こんな後方にいるとは……！）
ヴァンはその戦い方、武術と魔導を同時に使用する戦闘法、を頭に浮かべる。

体を激しく動かしている戦闘の最中、魔導を使うのはとても難しい。意識の集中を体と魔導、その二つに分けてしまうからだ。どちらかが疎かになるのもよくあることで、むしろ接近戦においては魔導を使わずに体を動かすほうに集中したほうがいいと一般的には言われていた。

だが目の前の魔導士には、そんな一般論は通用しないようだ。規模が小さく、術式の展開も最低限に抑えてある暴爆を発動。ヴ

アンが怯んだ隙に接近し、今度は剣撃と属性付与式による連続攻撃を繰り返して来る。

攻撃の多彩さは目を見張るものがあり、ヴァンはそれに対応しきれず、押され始める。

「ヴァン、待っててください！　今そつちに……くっ！？」

付いてきたイルシュが助太刀しようとするも、現れた護衛部隊に阻まれてしまう。

（まずい、追いつかれ始めたか！）

ヴァンの心に焦燥が走る。混乱がまだ完全に収まったわけではな
いらしく、数はそれほどでもない。だがこのままではいずれ囲まれ
て、逃げ場がなくなってしまう。エルヴァ軍が前線を破ってくれ
ば話は違うが……

（だが、それはまだ先の話だ。今は期待できない……！）

「そうだ、焦るがいい。そして俺と同じく、絶望しながら死ね！」
ヴァンの焦りを見て取ったか、魔導士が叫ぶ。同時に後ろに跳ん
だ。

三度、あの感覚が走る。跳び退ろうとしたが、感覚が間に合わ
ないと叫んでくる。ならば――！

ヴァンは意識を集中させる。――爆発が起こった。

「ヴァン――！」

イルシュが悲鳴に似た叫びを上げる。魔導士は、勝ち誇るように
笑い声を上げた。

「ハハハハ――！　見たか、侵略者が！　さあ、次はお前……！？」

次にイルシュに狙いを定めようとするが、途中まで発した言葉は
最後までいかなかった。

煙の中から飛び出る影……ヴァンが、魔導士に襲い掛かったから
だ。

「貴様！？」

不意を打たれて魔導士の反応が遅れる。しかしなんとかヴァンの
剣を受けることが出来た……が

「があ!？」

バシン、という音。それと共に魔導士の体が跳ね、肉が焼ける臭いが立ち込める。ヴァンの剣を握っていない手が魔導士の体に伸びており、その手には雷撃が走っていた。

「き、貴様……魔闘を……!？」

そう。ヴァンもまた、戦いの最中に魔導を使いこなして見せたのだ。術が発動する基点を魔力の干渉によってずらす……それによって暴爆の威力を殺し、最低限の被害で済ませた。

「あんたほど巧くはないけどな。……終わりだ」

ヴァンは力の籠っていない剣を跳ね除け、返す刀で横に剣を払った。

鮮血が宙に舞う。魔導士の体は力を失い、倒れた。

「ヴァン！ よかった、無事で……!」

護衛部隊を切り抜けてきたイルシュが駆け寄ってくる。

そのままヴァンに縋りつくかと思えたが、今の状況を思い出したのか近くで立ち止まり、彼に背を預けるようにして身構える。ヴァンもまたイルシュに背を預けて構えをとり、イルシュだけに聞こえる小さな声で話しかけた。

「心配をかけた……すまない」

「いえ、こちらこそ場を弁えずに……申し訳ありません」

イルシュは少しだけ俯き、堪えるような仕草を見せる。声もまた震えていた。しかしその次に顔を上げたときには震えは消え、元の冷静さを取り戻していた。

「ですが、これからどうしますか。まだ集まってきている数は少ないとはいえ……」

辺りを見回して、イルシュが口ごもる。無理もない。二人を囲うようにして、敵が集まり初めていたからだ。

「魔導士を倒すことに、時間をかけすぎたせいでしょうね……これでは、突破することも……」

「馬があれば違っただろうが、それも今はなし……か」

助けもまた、この状況では望めないだろう。言いつけに従い、仲間達は既に離脱しているはずだ。

ヴァンは空を仰ぎ、瞳を閉じた。

「……イルシュ、覚悟を決めるときがきたらしい」

「はい。ですが、まだ諦めたわけではないのでしょうか？」

ギリギリと近づいてくる敵を睨み、イルシュは不敵に言う。ふつとヴァンは笑みをこぼした。彼もまた敵を睨みすえ、不敵に言う。

「ああ、当然だ。俺もまだ死ぬ気はない。……東方へ一点突破を狙う。いけるか？」

「勿論。最後までついていきます」

頷きあう。そして共に駆け出そうとしたところで、多くのひづめの音が近づいてきた。

ヴァンは敵の増援かと初めは思ったが、違う。勢いを殺さぬまま近づいてくる音に、敵も何事かと振り向き

「ヴァン、イルシュ！ 迎えに来たぞ！！」

突進してきた彼等……レグスたち、キルヒア傭兵団騎馬隊に吹き飛ばされた。

「団長、生きてるか！？」

「助けに来てやったぜ！ ついでにイルシュもな！」

次々に団員達が声を掛けてくる。だが、ヴァンは信じられないという面持ちだ。

「レグス！？ それにお前達……何故……」

「言い合つのは後だ。そら、さつさと乗れ！！」

無理やり腕をつかまれ、ヴァンは馬上に引き上げられる。イルシュも別の団員の馬に乗せられていた。

「くそ、戻ってきやがったのか！？」

「だが好都合だ！ おい、なんとしてでも止める！ こんなことになった報いを受けさせてやるんだ！！」

剣を振り回し、レグスたちを食い止めようとしてくる。中には、弓を構える者たちもいた。

「おい、弓を準備してる奴がいるぞ！」

目ざとく見つけた団員の一人が声を上げる。大剣を振り回しながらレグスは「分かった！　おい、準備しておけ！」と何人かに指示をだす。

「お前らに構ってる暇はない、さつさと道をあけてもらっぞ！」

「レグスの親父に続け！」

「おら、お前ら引っ付いてくるんじゃねえよ！」

強い団結を見せ、団みの一点突破を敢行するキルヒア傭兵団。食い止めようとすがり付いてくるレマン軍だが、数の多さにも関わらず突破を許してしまう。

彼等はそのまま駆け抜けようとするが

「！　来たぞ！！」

再度、団員が声を上げる。彼は上を指差しており、その先には、多くの矢がまさに降り注ぐようになる様があつた。

「――放て！！」

レグスの声が響き、馬上の何人かが目を閉じて集中し始める。

すると宙に術式が浮かび、『閃風』の魔導が発動。一帯に強風が吹き荒れ、矢を吹き飛ばした。

彼等の先にはもはや敵の姿は見えず、邪魔をする者はいない。

「各自、後方には注意しておけ。魔導の発動準備も忘れるな。忘れ物の回収は済んだんだ、このまま全員で帰還するぞ！！」

「応！」

しかしレグスは油断せずに指示を出し、全員の気を引き締めるのだった。

数分後、かなりの距離を走った後でようやく全員に止まるよう指示を出した。

「ふう、やれやれ。どうにか撒いたか……おい二人とも、大丈夫か？」

「すまねえ。いないってわかったらすぐに助けに行くつもりだったが、レマン軍の騎馬隊が幾らか向ってきやがってな……」

「エルヴァ軍の騎馬隊が前線を横から突こうと突出して、俺たちの近くに来てくれたからなんとかあったが、その分遅れてしまった。

……無事でよかった、団長。そしてイルシュ」

団員達がヴァンの無事を喜び、側に馬を寄せてくる。しかしどこかヴァンは釈然としない様子だ。

「不満そうだな、ヴァン」

そんなヴァンに、レグスは声を掛けてくる。

「……当たり前だ。なぜこんな真似をした、レグス」

「なぜもなにも、まだ若い団長を助けるのは後見人の務めだろう」
「誤魔化すな！」

声を荒げて、ヴァンはレグスを問い詰める。

「どんなことがあっても時間が来たら撤退しろと突入前に言っておいたはずだ！ 今回はうまくいったが、場合によっては全員敵に囲まれて身動きが取れなくなっていたかもしれないんだぞ！？」

「……」

「俺たち二人のために全員の命を張るなんて、それこそ馬鹿げてる！ だからレグス、お前に俺がいけないときの指揮を事前に任せていたのに、これでは本末転倒だろう！」

「……まあ、そうだな」

ふう、と息を一つ吐いてレグスは肩をすくめた。

「確かに、わしのした事は間違っていたんだろう。お前達二人を助けるために敵陣に戻るなど、本来ならありえんことだ」

「なら……！」

「だがなあ、ヴァン。いくら指揮を任されたとはいえ」

レグスはヴァンの周りを見る。彼の周りを囲っている団員達は皆、強い意志でもってヴァンを見つめていた。

「皆がお前を助ける事を望んでいたのなら、流石にわしでも無理を言えんよ」

「な……！？ 皆！？」

ヴァンも彼等を見回す。団員達は一様に頷き、一人は「そんなに

「気張るなつて」と、照れくさそうに声を掛けてきた。

「まあ、なんとというか……普段から世話になってるしな。こういうときは、お互い様ってことだ」

「そうそう。それにこうして皆生きてんだし、気にすんなって」

ヴァンの肩を叩き、けらけらと笑う。

「団長、あんたが皆のを考えてああ指示したのは知ってる。でも俺たちは、あんたに生きていて欲しいんだ。それも分かってくれ」
「命令違反についてはまあ……言い訳のしようもねえけどさ。ま、そういうこつた。とりあえず巧くいったから、お仕置きは勘弁な」

「お前達……」

笑いかけ、気遣ってくれる彼等に、一瞬ヴァンは声を出せなくなる。胸にこみ上げてくるものは暖かく、彼等との絆の確かさを感じさせてくれた。

ふと熱いものが目頭から零れ落ちそうになる。しかしなんとかヴァンはこらえ、わざと怒った風を取り繕った。

「……もういい、分かった。確かに全員の意思で行ったというなら、俺から言うことはない」

「お、流石団長！ 物分りがよくて「ただしだ」へ？」

「命令を無視されてお咎めなしなら、体裁がつかないからな。お前達全員、向う一週間雑用を手伝ってもらう」

えー、と団員達が不満げに声を上げた。

「ちょ、おい！？ そりゃねーよ団長！」

「せつかく助けに来てやったつてのに、ひでえ仕打ちだぜ」

「こりゃ助けんじゃなかったか？ チクシヨウめ」

「やかましい。皆が無事だったからこれくらいにしてやったんだ。それに普段の罰からすればこんなもの軽いだろう。なんなら普段どおりにでも」

「あーはいはい！ 分かりました、分かりましたよ横暴団長！ それでいいです！」

おいおい、洒落になってねーよ。雑用っていったって結構辛いよ

な、アレ。あーあ、恩知らずな団長だぜ、まったく。……等など、陰口ともとれることを平気で言う団員たち。

しかし彼等の顔には笑みがあり、イルシュは普段の生真面目な様子を崩してぐすくすと笑っている。レグスは「やれやれ、まったく面倒な」と呆れた顔をして、そのくせ「そら、おまえらしい加減にしろと。そろそろ移動するぞ」と言っ取りまとめている。

戦場とは思えぬ、和やかな雰囲気があるそこにはあった。

しかしそこは紛れもなく戦場であり、ヴァン達の体にはファレナ山脈の泥や、敵兵の返り血、または自身の流した血で汚れきっていた。

（戦場と言う狂気の場所でこうやって笑いあえることも、もしかしたら狂気の一つなのかもしれない……）

レグスと共に指示を出していたヴァンは、心の内でそんな事を考える。そう考えれば、今あるこの雰囲気は場に合わない、酷く異質なものと感じられた。

しかし、ヴァンはそれでもいいと思う。

例え異質であったとしても、凄惨な殺し合いの中で、この雰囲気の中にいられるということがどれだけありがたいことなのか、分かっているから。

自らに掛かった血、敵兵の、あの魔導士の血に視線を落としてから、ヴァンは遠くを見つめる。

エルヴァ軍は既に敵左翼を破り、中央と右翼の撃破に乗り出している。戦いは、終わりに向いつつあった。

第二章 更け行く夜

日が暮れ始め、茜色が全てを覆い始めている。

あの後レマン軍中央、右翼を共に破ったエルヴァ軍は、捕えた捕虜を連れて進軍。見晴らしの利く小高い丘に野営地を築いていた。

戦後処理に多くの兵士、将軍が駆け回り、大小様々な天幕が作られていく。

「皆、ご苦労だった。此度の大勝、まずは諸将に礼を言おう……」

その中で初めに作られ、かつ最も大きな天幕の中。簡易の玉座に深く腰掛けて、ドライゼムはねぎらいの言葉を口にした。

それに追従するかのよう、机を囲っているエルヴァ軍の主だった将軍達が頭を下げる。

「いえいえ、これも陛下の威光の賜物でございます」

「そうですとも。陛下がいなければ、このような勝利は有り得ませぬ！」

顔にはにこやかな笑みをうかべ、口々にドライゼムに阿る言葉を連ねる。

しかし全てを覆いつつある夕闇に隠されているが、彼等の顔が僅かに引きつっていた。

恐怖。ドライゼムに対する絶対的な恐怖が、その場にいる全員の中にある。背に流れる脂汗は、その何よりの証明であろう。

彼等は共通して、「何をおいてもドライゼムの機嫌を損ねてはならない」と考えていた。

ドライゼムはそれを知りつつ、むしろ満足気に目を細めて言葉を続ける。

「うむ、皆の言葉、有難く受け取っておこう。だが、我らの戦いはこれで終わったわけではない。レマン公国は平定したも同然とはいえ、我らの先には未だ多くの国々が残っている。彼等を撃ち滅ぼさぬ限り、我等に安息はないのだ」

侵略している者が言う、白々しい言葉。だがそれを知りつつも、将たちは愛想笑いか追従することしか出来ない。

「諸君も知つての通り、西域各国は愚かにも戦いを何十年と長く続けてきた。我らはそれに完全たる支配を以って終止符をうたねばならぬ。それを皆、忘れてくれるなよ」

「ハッ。我ら一同、ドライゼム皇帝陛下に粉骨碎身の覚悟で尽くし、理想の成就に全力を尽くす所存でございます」

椅子に座ったまま、再度將軍達は頭を下げた。

「よろしい。では、皆の意思を確認したところで、此度の戦の恩賞を与えることとしよう。……参れ」

「ハッ！」

壁際に控えていた参謀が一礼し、ドライゼムの傍らに立った。

彼は諸將についている検分官がまとめた報告を元に、恩賞を分け与えていく。しかし、分け与えられていくに従って、諸將の様子がおかしくなっていくた。

与えられた者はあからさまに安堵した表情になり、逆に呼ばれなかった者は顔が青くなっていくのだ。やがて恩賞が与え終わると、それらの将は自分の天幕へ戻るよう言われる。

残った者たちには訓戒が述べられ、そしてその最後に参謀は、一人の将の名をドライゼムの耳に囁いた。

「では、陛下。こちらの方となります」

「ああ。……ラムサス」

静かな声で、残った将の内の一人が呼ばれた。

「ひっ!？」

呼ばれた将は震え上がり、椅子を蹴飛ばして後ずさりする。

ドライゼムは玉座から立ち上がり、ゆっくりとした動きで彼に近づいていった。

「あ……あ……!」

「ラムサス、とうとうお前は、何の役にも立たなかったな……残念だ」

「……！ お、お許しを！！ どうか、どうかお願い致します！！」
平伏し、頭を地面にこすり付けて許しを請う。ドライゼムは、だがそれに構わず、相も変らぬゆつくりとした動きで彼に近づく。

「次の戦場では、きつとお役に立って見せます！ どうか……」
「……くどい」

鈍い音が、鳴る。平伏しているところを蹴り飛ばされ、ラムサスは天幕の柱に打ち付けられる。

「が……は……！」

「長く目をかけてやったものを、それに応えきれなんだお前が悪いのだ。寂しくはなるが……」

しゅらりと、鞘走りの音が天幕に響く。

「お願い致します！ 長年の、同族のよしみとして、後一度、後一度の機会を……」

それでもラムサスは膝立ちのまま、鼻血を流して叫び続ける……
が、ひゅん、と言う風切りがそれを切り裂いた。

しばしの静寂。その後、ラムサスの首から血が噴出す。長年ドライゼムに従ってきた將軍の、惨めな最後だった。

剣を鞘に収め、切り飛ばされた首を一瞥するドライゼムの瞳には、言葉の通り一抹の寂しさが浮かんでいる。だがそれもラムサスから目を離れたときには消えており、同族であろうと容赦なく切り捨て、冷酷さを感じさせた。

将たちはぐくりとつばを飲み込み、明日はわが身ともしれぬ不安に身を震わせた。

ドライゼムは、自分に価値ありとした人間しか認めない……それを改めて、彼等は確認する。

将という地位、貴族という生まれも、彼には何一つ関係がない。ただその人間、いや、全ての存在がその力とあり方を、ドライゼムに気に入られるか。それだけで生きられるか否かが決まる。その上で、完全な服従を強制させられるのだ。

そして、服従を拒んだならば……強くなる震えを、将たちは何と

か押さえようとする。

あくまで服従を拒んだレマン公国がどうなるか、彼等には容易に想像が付き、ほんの僅かではあるが同情の念を覚える。

しかし彼等は自身のことをまず考えなければならず、次の瞬間には同情は消え、どうにかして功を次の戦で立てなければということに、必死に考えを巡らせていた。

やがてドライゼムより自分の天幕に戻るように伝えられ、将たちは逃げるように去っていく。

彼等が去った後、再びドライゼムは参謀に話しかけた。

「見ての通り、ラムサスは処分した……こいつの後釜についてはどうだ。目星はついているのか？」

「はい。ご指示の通りに人材を探し、候補となる者が幾人か目星がついております。それについて、此度の件と合わせて検討していたきたいことがあります」

「……例の件のことか？」

「はい。此度のことで、それでもできるものと考えます。後は、陛下とで話し合われて下されば」

「そうか……分かった。で、そのことは伝えてあるのか？」

「はい。既にあちらには伝えが行っております。陛下の天幕に、一時間後に来ることでしよう」

「ふむ、ならば後は待つだけか……ああ、あとも一つ、やらなければならんことがあったな」

ドライゼムは路傍の石の如く、ラムサスの亡骸を見て

「その役立たずを片付けておいてくれ。掃除も一緒にな」

なんの感情もなく、言い放った。

……そして、一時間後。

先程までのものとは別の、ドライゼム個人のために作られた天幕に、衛視に連れられて一人の男が入っていく。

宵闇は過ぎ去り、完全な闇が辺りを包んでいる。それに隠れるようにして入っていく男は、ヴァンだ。

天幕に入って彼が目にしたのは、野営地に天幕に似合わぬ豪華な調度品の数々だった。それぞれが贅を尽くして作られており、ヴァンには別の世界に入ってしまったかのように感じられた。

「待っていたぞ、ヴァン」

その中心にある椅子に、ドライゼムは腰掛けている。彼に声を掛けられるや否や、すぐにヴァンは跪き、頭をたれた。

「卑賤な一傭兵である私を此度もお招きいただき、身に余る光栄と存じます。その上、陛下ご自身の天幕に……」

「そのような毎度の台詞はいい。さっさと近くに来い」

「……ハッ」

ヴァンはドライゼムが示した椅子に座り、彼と対面する。ドライゼムは近くのテーブルに置いてある酒を取ってグラスに注ぎ、ヴァンに差し出す。

「そら、受け取れ。此度の大勝の立役者よ」

「は……」

差し出されたグラスを恭しく受け取り、そしてドライゼムが「勝利を祝って」と言い、ヴァンも唱和して、二人は酒を喉に流し込む。…… 美味い。ヴァンは素直にそう思った。

「どうだ、いい酒だろう。もっとも、レマンにあった酒造の中から俺が選んできた酒だ。美味くないわけがないがな」

くく、と笑み、平然と略奪を口にしながら、ドライゼムはもう一度酒を喉に流し込んだ。ドライゼムの顔には満面の笑みがある、しかしそれがヴァンにとっては恐ろしい。

自分の価値を絶対とし、傲慢そのものともいえる男の言葉を聞きながら、ヴァンは追従して話を進めていった。

そして酒が空になったところで、ドライゼムはヴァンに向き直る。気安げな口調ではなく、威厳を感じさせる声に切り替えて、話し始めた。

「さて、勝利の美酒とやらを口にしたところで…… キルヒア傭兵団団長、ヴァン。先も言ったが、此度の大勝は一重にお前の働きによ

るものと言つて良い。お前の提言した策のお陰で、兵力を無駄に消耗せずに済んだ」

「……」

「また、今までの戦いにおいても多くの戦果を上げている。これはお前の能力の高さもあるのだろうが」

ドライゼムは身を乗り出し、ヴァンを直視する。

「噂になっている、お前の力……『超直感』とも言える能力、どうやら本物らしいな。最初は半信半疑だったが、今となっては認めざるを得まい」

興味を伴った視線が、ヴァンに注がれる。ヴァンはそれを受けながら、ただ「……恐縮です」と答えた。

直感による状況把握、それがヴァンの能力である。しかし、この直感は尋常ではない鋭さを備えている。

戦の中で、隠式によつて感知が出来ないはずの魔導を察知できたのも一重にこの直感の鋭さゆえだ。だが、感知できるのはこれだけに留まらない。彼の直感は、彼の知りたいと思う全てに対して働くのだ。これが、彼の力の最も最たるものである。

「あの奇襲も、お前の直感によるのが大きいのだろう。ファレナ山脈を地図があるとはいえ初見で抜け、しかもほぼ正確にレマン軍の背後に現れるなど、普通では考えられん」

自分の考えをまとめるようにドライゼムは呟く。そして「魔導によるものと捉えても、性質において食い違うしな」と付け加えた。

彼の力と似たものに、『読解』と呼ばれる魔導の一工程がある。それをドライゼムは疑っていたのだろう。

魔導を行使し、世界に干渉して自身の望む現象を引き出すためにはその状況をまず探らなければならない。そのため魔導を扱う者はまず周囲に自分の魔力を拡散して感覚を広げ、状況を知覚している。これが読解だ（ちなみにこの工程は周囲の状況探知にも応用されており、感度を高められれば隠式によつて隠された魔導を感知することも可能である）。

しかしこれはあくまで能動的な動作であり、ヴァンのように受動的に感じ取れることはない。また、魔導士の隠式を重ねられた魔導を瞬時に感知できたように、その精度も読解を上回っていた。

ドライゼムの話聞いていたヴァンは、彼の言葉に渋い顔をする。「……ですが、それは買いがぶりすぎです。確かに危険についてはそれなりに感じ取れる自信はありますが、それ以外については漠然としたことを感じ取れるくらい……何もかもを感じ取れるわけでは……」

「だが感じ取れるのだろうか？ それだけでも常人にはできんことだし、能力自体の高さも踏まえてお前を高く買うには十分だ。何度も言わせるな」

ドライゼムは言い切った。

「お前の能力、そしてエルヴァ正規軍にも劣らんキルヒア傭兵団の練度……前線に残った連中も、素晴らしい動きを見せていた。お前達はどれも、俺にとつて有益な存在だ。だからこそ話しておきたいことがある。……お前達を、正式にエルヴァ軍の正規軍として迎え入れたい。禄も与え、これまでに以上の待遇を約束しよう」

「……！」

突然切り出された話に、ヴァンは固まる。

「軍内の序列のせいで今まで禄な扱いができなかったが、それももう終わりだ。正式に任命するのはこの先にある街、エタルドを制圧して状況が落ち着いてからになるだろうがな」

「……ですが、正規軍には既に多くの将がおられます。我々を組み込むにしても空きがあるとは思えません。それとも新たに軍を設立するおつもりなのですか？」

「ああ、その心配はない。先程一つ空きができた。ラムサスの席だ。そこにお前達を組み込む」

「……」

空きができた、その言葉の意味が分からないほどヴァンは愚かではない。彼はドライゼムに切り捨てられたのだろう。冷たい何かが

ヴァンの背に流れる。

（長年付き従い、歩んできた将をこうもあっさりと……ドライゼム、あなたは……）

本当に情も何もなく、ただ己にとって価値があるかで全てを決めるつもりなのか。

口にしてドライゼムの意思を問いたかったが、己の立場と、相手の強大さに飲まれ、胸の中で言葉は虚しく響くだけだった。それに聞いたところで返ってくる答えは決まっているようなものだ。

胸に浮かぶ様々な感情を抑え、表には何も出さずにただ「身に余る光栄、ありがたき幸せ」とヴァンは言う。

「そう謙遜するな。むしろ、もっと早くにお前達は取り立てるべきだった。役立たずに固執した、俺の不明につき合わせて悪かったな」
「そのようなことはありません。むしろ、仰せられた大役に不肖の我が身が応えられるか、不安を感じていたところです。……そろそろ戻ってもよろしいでしょうか。任せられたこと、仲間達とも話したいので」

居心地の悪さを感じ、ヴァンは退出の許可を求めた。

「そうか。いいぞ、もう言うこともない。正規軍になれば今までと勝手も違ってくる、よくよく話し合ってくるといい。与える禄についでに目録も、明日には届けさせよう」

「ありがたきお言葉……では、失礼致します」

一礼して立ち上がり、天幕の出口まで歩いた、そのときだった。

「ああ、そうだった。一つ聞き忘れていたな」

と、ドライゼムがヴァンに声を掛ける。何事かと思い、振り向くヴァン。何か気に触るようなことでもしただろうか？

「そう不安げな顔をするな。少しの間で済むことだ。で、ヴァンよ、そういつてドライゼムは、気安げな口調で

「——お前はいつ、俺に跪いてくれる？」

ヴァンを見る瞳は氷の如き冷たさで、言う。瞬間、天幕の空気が凍った。

「……何を仰っているのか、私にはわかりません。そもそもそれは私の陛下への忠を疑っておられるということなのでしょうか？」

「ふふ……そうは言わん。お前は誠実な人間だ。一度剣を預けてくれれば、信義にもとる真似は絶対にしないだろうよ」

「ならば……」

「だが、俺が言っているのはそんなことではない。賢いお前のことだ、それぐらい分かっているだろう？」

ドライゼムの視線の温度が、更に下がる。彼の瞳は実質的な脅迫とも言える程の冷たさを持っていた。

お互いの視線を交わしあいながら、しばしの時間が流れる。

やがてドライゼムは、「まあいい」と言って視線の温度を元に戻した。

「ともかく、俺がいたいのはこれだけだ。忘れてくれるなよ？」

「……はい」

頷き、ヴァンは天幕から出て行った。

天幕から出て行くヴァンを見送ったドライゼムは、脅迫にさほど堪えていない様子だった彼の様子を思い出して鼻を鳴らした。

「フン……予想以上に、意思が固いか」

まあその方が面白みがあるかと一人ごちて、ドライゼムはもう一本酒を持ち、飲み始める。わずかな苛立ちと、大きな興味を織り交ぜて、彼は考えを巡らせた。

（どの道、跪かせてやる……あの強い意思を、とことん俺が砕いてやろう）

彼の脳裏に、ヴァンの顔が浮かぶ。その瞳には、他に見られない強い光があった。心をドライゼムに支配され、彼に対する恐怖と服従しか映さない者たちとは違う、意思の光だ。

ドライゼムに対する恐れもちろんヴァンにはある。だがそれを超えて、彼を彼たらしめている意思がそこにあるのだろうとドライゼムは思う。

（ヴァンにある俺に屈しない心……優しさ、というやつか？ 陳腐なことだ……）

苛立ちが少し、強くなる。彼の行いに対しても、捻り潰してやりたいという思いが湧いた。

ヴァンは、稼いだ金の一部を孤児院などに寄付していた。それどころか浮浪者、戦に巻き込まれて孤児になった子供を積極的に保護し、そして団員にも多くの俸給を与えて信頼を得ているという。

長を絶対としている普通の傭兵団では考えられない行動ではある。しかしそれをして、彼等は強固な絆と力を得、戦場で活躍していた。蹂躪と暴虐を旨とするドライゼムとは、まったく逆のあり方。しかもドライゼムに帰っていてなおそのあり方を貫こうとする。

別にドライゼムに歯向かってきているわけでも、定めた法に従っていないわけでもない。だが、そのあり方はひどくドライゼムを苛立たせる。

心で自分に屈しないヴァンを、しかし苛立ちと共に、ドライゼムは楽しんでた。

ヴァンに言った誠実であるというのは事実であり、彼の方から裏切るのはほばないといっていいだろうとドライゼムは考える。また、戦力的にも申し分のない人材だ。いくら自分に支配されていない人間だとて、それぐらいの損得は考えて判断する頭をドライゼムは持っていた。

とはいえ、このままにしておくつもりはない。結局ヴァンが自分に心からの服従をしていないのは事実なのだ。いずれはどんな手を使っても、自分に服従させてやる。

正規軍ともなれば、臣下として距離が近くなる分より一層圧力を加えてやることもできるだろう。

（強い意志を持った者ほど、心の折がいがあるというものだ……あ

あ、今からその時が楽しみだ)

歪んだ笑みを浮かべ、酒を楽しむドライゼム。脳裏には這い蹲り、屈辱に身を震わせるヴァンが浮かんでいた。

嗜虐的な妄想に耽っていると、ふとドライゼムは何かに気付いたかのように辺りを見回す。

「ああ、お前達か……来ていたのなら、さっさと声を掛ければいいものを」

そして、誰もいないはずの空間に向かって話しかけた。

「良い趣味をしている？　フン、お前達には言われたくはないな……で、要件は何だ……ほう、準備が出来たと？　仲間も集め終わったか。ならば好都合だ。今近くにいるな？」

にやりとドライゼムは笑う。心底楽しげな様子で。

「結論を出してやろう。……お前たちの力を見たい。今夜、その力を見せてみる」

誰も居ないはずの空間に向って、命じた。

ヴァンたち傭兵の野営地は、正規軍とは少し離れた場所にあった。これはドライゼムが言っていた正規軍との序列の違いや、いざと言うとき自分達を盾にするためでもあるのだろう。

とはいえ、そんなことを気にしているようでは傭兵などやっていられない。それを知った上で、ヴァンたちはこの稼業をしているのだから。

戦勝を祝う他の傭兵団の陣地の合間を通り、ヴァンは自分達の野営地に向う。そして着くや否や

「おう、団長！　戻ったか！」

「いやー心配したぜ。まったくあの王サマに会うとなると、こっちも怖くなっちゃう」

「バーカ、お前が会うわけでもねえのに何怖がってんだ。もうちっ

とシャンとしろよ。ともかくお帰り、団長」

帰ってきたことに気付いた団員たちが一斉に彼に近づいてきた。しかもそれ以外に、少女と呼べる年頃から中年と呼べる年頃まで、様々な年齢の女性たちもヴァンに近づいてきていた。

「お帰りなさい、ヴァン！ さつき、レグスが今回の褒美のお金をもらってきたわ。すごい額じゃない！」

「これで皆の武器もよくできるんじゃない？ それぐらい簡単にできそうよ」

きやあきやあと盛り上がる。彼等の周りには子供たちも現れて、ますます賑やかになっていった。

天幕の間を駆ける子供達は武器を背負い、女達はそれらを磨いたり、直したりしている。男達は鍛錬をしつつ彼等と話し合い、手当てを受けている者は様々な話題で会話に花を咲かせて、心と体を癒していた。

そこかしこに溢れる武器や血、汗の臭いを除けば、普通の傭兵団には有り得ない、まるで一つの村のような情景が広がっている。

これがキルヒア傭兵団。そこに属するものには安らぎと、明るさがあった。

「後は……ねえ、ヴァン。私たちもう少しおしゃれとかしたいんだけど……？」

「あ、それいいんじゃない？ ここ最近そついうのにご無沙汰だったし、いいかも！」

突然入ってきた収入に、女達は欲を出してくる。しかしそこに男達が茶々を入れた。

「おしゃれ、ねえ……」

「何よ？ 変な顔しちゃって」

「いや、なんつーか、豚に真珠って言葉が浮かんできてうお！？」

横に飛んで、金的を避ける。

「あつぶねえ、なにすんだおい！？」

「自分の胸に聞いてみなさいよ！ ほんつとサイテー……！」

「これだから戦いばかりしてる男は嫌なのよ、仲間内で遠慮しないっていつても限度があるわ！ あ、ヴァンは別だからね！」

「私たちがお客からなんて言われているか知らないんじゃないの？ けっこう誉められたりしてるのよ！」

「お前らが誉められてんのはその腕っぷしの方じゃって止めるいてえ！？」

「いい加減にしないとぶん殴るわよ！」

「もう殴ってるじゃねえかいててて！」

「おいヴァン、見てないで助けてくれつか俺は何も言ってねえだろ！ なんて殴る！？」

「止めなかったあんたも同罪よ、さっさと殴られなさい！」

「なんだそりゃあ！？ 理不尽だ！」

「こんなにやる、黙ってりゃいい気になりやがって！ お仕置きされてえか！」

「ふんだ、やってみなさいよ！」

「言いやがったなこのアマ！ 待ちやがれ！」

……いつのまにやら乱闘騒ぎにまでなっている。なんだなんだと野次馬も集まり始め、もつとやれと煽ったり、または加勢に殴りこんでくる者もいた。夜の闇はドライゼムと話していたときよりも濃くなっているにも関わらず、元気なことである。

（だが、今はそれがあるがたい……）

明るい賑やかさに、ドライゼムから向けられた氷のまなざしの冷たさが溶けていくようだった。もつとも、本人達は結構本気で怒っているのだろうし、下手なことはいえないが。

（とはいえ、これ以上規模が大きくなるのもまずいか）

野次馬たちもどんどん増えてきている。仕事を放り出してきた者もいるようだし、そろそろ潮時か。そう考えて止めようとしたときだった。

「お前らそれぐらいにしとけ。ヴァンも疲れてるだろうし、じゃれあうのは明日にしろ」

彼等の後ろから声が掛かる。目を向けると、そこには三十路を超えたくらいの年齢の男が立っていた。

彼の名はサイアム。キルヒア傭兵団に属する戦士として、一、二を争う腕の持ち主だ。

そのことを裏付けるように、彼の肉体は筋骨隆々といった感じで鍛え抜かれており、体には幾つもの傷が刻まれていて歴戦の戦士であることを感じさせた。

「えー、何でよサイアム！ 元はといえばこいつらが悪いんじゃない！」

「ああ！？ ちょっとしたことであち切れたお前らが言えた口か！」

「ちよつとしたって何よ！ つくづく女心がわかんないわねあんたたち！ それに別にヴァンに迷惑かけてるわけじゃないし」

「お前らが迷惑かけてるつもりがなくても、これ以上騒ぎが大きくなったら結局ヴァンが止めに入らなきゃならんだろが。それと野次馬ども、お前らも見物してないで自分の仕事に戻れ。あーうるさいうるさい、文句なんぞ聞かんから観念してとっとと帰れ」

乱闘していた当人たち、加えて野次馬達の一斉口撃などものともせず、サイアムは耳を塞いで追い散らしていく。

「うわ！ ちくしょう、てめえら覚えてろ！」

「覚えてろはそつちよ！ きゃ、ちよつとサイアム、そんなに押さないで！」

何も手を出さず、ただ押しているだけなのに誰も抵抗できずに追い散らされていく。数分後には、完全に乱闘前の光景に戻っていた。

「サイアム、ありがとう。助かった。しかし皆元気だな……」

「大勝した上に、たんまりと報酬ももらったからな。皆浮ついてるんだろ。女達や子供達も元気すぎて困るくらいだ」

こきり、と肩をならしてみせるサイアム。いかにも疲れたといった様子をみせる彼に、ヴァンは笑みをこぼした。

「それはまた、災難だったな。……そうだ、サイアム」

「ん？」

「俺の居ない間、留守を守ってくれてありがとう。伝聞だが、今回の戦いでもいい動きをしていたみたいじゃないか」

「……ま、あれぐらいは。なんと言っても、お前達には恩があるしな」

「それでもだ。それに、そろそろ恩云々というのはやめて欲しいんだがなあ」

堅苦しくてしかたない、とヴァンは続ける。もしくは、これもかつて貴族だった者としての意地なのかもしれないと思った。

イルシュ、そしてサイアムは、今はエルヴァに滅ぼされた国の貴族だった。数年前、サイアムは主であるイルシュと数人の侍従たちと共に国から脱出し、右往左往していたところを通りがかったキルヒア傭兵団に助けられたのだ。

それ以来二人とその侍従たちは、キルヒア傭兵団に仕えてくれている。だが二人とも、まあサイアムはまだマシだが、こういった義理といったことに妙に堅い。もう少し楽になつてくれればとは思っているのだが

「それは無理だ。俺が生きている限り、義理は貫かせてもらう」
今のように返されてしまう。

やれやれとヴァンは肩をすくめると、ぎろり、とした目をサイアムがいきなり向けてきた。

「……で、ヴァンよ」
「な、何だ？」

「ああいった手前だが、これだけは聞いておかなきゃならん……今日の奇襲の際、イルシュ様と敵のどまんなかで孤立したって聞いたぞ」

「……ああ、そのことか……いや、すまない。あれは俺が巻き込んだも同然だ。サイアムからしてみれば……」

「あー違う違う。そのことを責めてるわけじゃない！」

神妙な顔をして、ヴァンは謝ろうとする。しかしサイアムは慌ててそれを止めた。

「……戦場に出る以上、そういつたこともあるっていうのは分かりきった話だ。それにヴァンに付いて行くっていったのは、他ならぬイルシュ様自身だからな。俺に責める資格なんて、どこにもない」
「なら、何が言いたいんだ？」

「いや、その、ほら……何というか……男と女、二人で敵地に取り残されてどうというか……ともかくそういうことがなかったか、聞いているんだ！」

照れくさそうに、一気に言い切る。ヴァンは聞いた直後、ぼかんとしていたが、彼の言葉を理解するや否や爆笑した。

「ははははははは！ ああ、なんだそういうことか。いやいやまったく、命の瀬戸際だったって時のことで、そんなこと聞かなくても」

「俺にとつては笑い事じゃない。それに命がどうこうっていうのはこうやって帰ってきた以上どうだっていいんだよ。で、どうなんだ」
「ないな。前も言っただろう。少なくとも今は、そういうことをするつもりは俺はないよ」

「……やはりまだ、意思は変わらないのか？ そりゃあ、戦場に身を置く者として気持ちは分らんでもないが……しかしこれだと、早い内に姫様とくつつかせる俺の計画が……」

ヴァンに聞こえない声で、サイアムは後半を呟いた。

「放っておいてくれ。まああくまで今は、だ。そのうち機会があったら、考えてみるさ。……で、サイアム。突然だが、口は災いの元だつて言う言葉を知ってるか？」

「？ なんだ急に……それぐらい知ってるが」

「そうか。なら、自分が言つた事の責任は、自分で取ってくれ」

指で、サイアムの後ろを指す。つられてサイアムは振り返ってみると、

「サイアム……余計な事はしないで、言わないでつて言つたでしよう……？」

低い声で話し、怒っていることがはっきりと分かる少女が、そこ

にいた。

「イ、イルシュ様！？　いつからそこにおられたので！？」

驚きと恐ろしさに、思わずとびのくサイアム。少女、イルシュが「男と女で辺りからです……」と先程と変わらない低い声で答え、サイアムはなんてこったとばかりに頭を押さえた。

少女はずい、と足を踏み出す。短く切った金髪から覗く青い目を細め、形の良い稜線をもつ顔立ちをひくりひくりと引きつらせて「覚悟はできていますね？」と聞いた。

「い、いえその、なんというか、私なりに気になっていまして、その……」

目をあちらこちらにそらして、しどろもどろに言う。先程まで見事に団員達をまとめていた姿は、今は影も形もなかった。

「できていますね？」

「えー……そのー……あのー」

引き伸ばしに引き伸ばし、言い訳を考えて考え抜いて

「……はい」

そして、観念した。

「まったく……いつも余計なことばかりして！」

ヴァンの隣を、未だ怒ったまま歩くイルシュ。ちなみにサイアムはというと、見事にイルシュにのされて伸びていた。

「しかし、ただ聞くだけであれば少し酷いような気もするが」

「いいんです。いつも何もしないでって言ってるのにする方が悪いんですから！」

しれっとした顔で、ヴァンに言う。

「だいたい、サイアムは私のことを気にしすぎなんです。子供じゃないんですし、もう少し言うのを控えてくれればいいのに。ヴァンのことだって……」

言いかけて、何をサイアムが言っていたのかを思い出してイルシ

ユは顔を赤くする。普段の凛々しい姿を見慣れている分、彼女のこういった姿は新鮮で可愛らしかった。

もっ少し見ていたい気分ではあったが、あまりサイアムの事を悪く言うのも問題かと思ひ、ヴァンは宿めに入る。

「まあそう悪く言わないでくれ。サイアムがイルシュのことを一番考えてくれているのは、イルシュ自身が知っているだろう？」

「それは……そうですね」

「なら、悪く言うのはここまでにしておいたほうがいい。サイアムだって、イルシュを子供扱いしてるわけじゃないしな」

そう言い置いてから、イルシュが来る前に話していたことを伝える。イルシュは驚いた顔になった。

「そんなことを言っていたんですか？ サイアム……」

「戦いに臨む覚悟を決めているなら、とな。……そういえば、初めは戦場にでるのはまだ早いと言って反対していたな、サイアムは」
「ええ、そうですね。でも傭兵団に入って、しかも戦うことが出来る以上、戦場に出ない理由がないといって押し切ったんです」

二人して懐かしい思い出に浸る。自然、二人の顔には笑みが浮かんでいた。

「鎧を身につけて、女性である事を隠したうえでなら、という条件でようやく妥協してもらったけどな」

「でも、そのときからずっと身につけていますけど、鎧って重いですね。お陰で筋肉がついてしまつて……」

納得の出来ない表情をして、イルシュが唸る。今は鎧ではなく、ブラウスとスカート姿だった。

服の合間から見える彼女の肉体は、確かに同世代の少女からすれば筋肉がついている方であろうが、しかしそれはむしろ元々ある彼女の凛々しさと躍動感を高めており、その魅力を減じる結果にはなっていない。

とはいえ、それらのことを伝えても彼女は納得をしないであろうが……

「まあ、仕方ありませんね。そういう条件で戦場に出ていますし、その必要も分かっています。……でも……」

ちらりと、ヴァンを見るイルシュ。彼の目に自分の姿が映るのを恥ずかしそうにしていたが、ふと、どこか沈んだ表情になった。

今まで話していたときとは明らかに違う様子に心配になり、ヴァンは声を掛ける。

「イルシュ？ 突然どうしたんだ？」

「いえ……さっき、ヴァンがサイアムと話していたことを思い出してしまつて……」

「サイアムとの話？」

そういいながら、そこでヴァンは彼女が何を言いたいのかに見当がつく。しかし、それはヴァンとしてはできれば避けておきたいことだった。

「はい。……私からもお聞きしたいのですが……心を变えるつもりはないのですか？」

「……心を变えるって、何についてだ？」

分かっているながら、ヴァンはとぼける。

だが、イルシュはヴァンが答えるまで逃がすつもりはないらしい。顔を赤く染めながら、再度聞いてくる。

「男と女についての話、です。そういうのを、今はするつもりはない、とか……」

「……ああ、その話か」

ふう、とヴァンは息をついた。

正直、その話はヴァンにとって、自分の情けなさを曝け出す事になるためにあまり話したくない話題だった。しかし

「お願いします。私は、その……わ、分かっているはずです。丁度いい機会ですから、今まで貴方がそうしてこなかったわけを、改めて話してほしいんです」

それにどうやらサイアムには話していたようですし、不公平ですから私にも……などと、しどろもどろになっても最後まで言うイル

シュの様子を見るに、答えるまで放してくれそうに無い。

（話すしか……ないようだ）

気は進まないがと胸のうちに呟いて、話し始める。

「……さっきサイアムに言ったとおりだ。俺は、今は恋人のような関係を持つつもりはない」

サイアムに話したときと同じ口調で言う。しかし今は、そのときの口調を維持するのはとても難しかった。

不安げにヴァンを見つめているイルシュの顔を見るだけで思いはゆれ、しかしそのたびにダメだと自分に言い聞かせる。

イルシュは自分に好意を持ってくれている、それぐらい分からないほどヴァンは鈍くなかった。そしてヴァンもまた、さっきのように凛々しい姿の中の可愛らしい少女の面を見るたびに胸がざわめくを感じている。

（だが、それを自覚していてなお、新たな関係に踏み出せる勇気がない……）

ずっと彼女は、直接ではないとはいえ、好意を伝えてきてくれた。だが、自分は……

「こんな戦ばかりがはびこっている時に、そんな関係を持つ事はお互いにとって重荷にしかないさ。それはイルシュだって分かっているだろう？」

と切り捨てるように言う。……ヴァン自身、実のない空虚な言葉だと感じながら。

「……それは……」

イルシュの顔が曇る。それにヴァンは、「分かっている」と続けた。「これは一方的過ぎる考え方だって。心の支えになると考えることもできるのもわかってる」

言葉を区切り、そして、ヴァンが持つ弱さを吐き出す。

「けど、俺は傭兵として親しい人の死を見てきて……そういった深い関係になることが、怖くなってしまったらしい。より親しい人を失ったときの、喪失感が怖いんだ」

思い起こされる親しい人々の死を幻視し、そのときの喪失感を感じつつ、ヴァンは言う。

（まだ報告を受けていないが、今日の戦いだって何人かの死者は出ているはずだ……）

死者の名前を聞き、その団員との思い出が頭をよぎるたび、鈍い痛みが胸に走る。

傭兵として生きる以上、当然のこと。そう考えてしまえばいいのだろうが、どうしてもできない。

ヴァンは自嘲の笑みを浮かべる。

「……すまない。こんなのは、皆やイルシュも同じはずなのにな。だけど、どうしてもこんな考えが浮かんできてしまうんだ」

「ヴァン……」

何か慰めの言葉をかけようとしているのか、俯いて口を開いては閉じてを繰り返している。

ヴァンはそんな彼女に首を振りつつ、「気にしないでくれ」と言った。

「むしろ情けない人間と思ってくれたほうが助かる。幻滅させたかもしれないが、その方がお互いに」

「それ以上言わないで下さい」

硬い声が、イルシュの口から発せられる。

「そんなことを言われても、むしろ貴方が辛くなるだけです。それに、私も……」

「……すまない」

二人して押し黙ったまま、歩いていく。

やがてヴァンの天幕まで着いたところで、「それでは、また明日」とイルシュは言い、去って行った。

彼女を見送ったヴァンは、ふう、とまた一息を吐く。痛みを感じつつ、それでも傭兵団の団長として様々な作戦を立て、団員達を率い、やってきたというのになんて様だ。

「やれやれ……若いというか、青いな」

天幕から声がかかり、ついでのそりとレグスがでてくる。

「……なんだ、レグス。藪から棒に。事情も知らないのによくもそんなことをいえる」

「事実を言ったただけだ。それに事情なんぞ、これ見よがしにためいきをつけて、イルシュが一緒にいたというだけで十分察せられるだろう」

「……」

悔しいが、ぐうの音もでなかった。

「まあ、お前の怖がる気持ちも分からんでもないが。しかし人の気持ちなど止まるものでもなし、そう制止をかけていたところで無駄だと思うがね」

「……それでも俺は、今は無理だよ……ああ、ともかくこの話はずいぶんいい。それより」

「わかってる。被害の報告やその他、まとめて話してやる」

「ああ、そうしてくれ。……それと、こちらからも話すことがある。まずは俺から話させてくれ」

「ほう……？ いいだろう。さ、早く入れ」

レグスに連れられ、ヴァンは天幕の中に入ってしまった。

テーブルの上に置かれた燭台が、天幕の中を照らす。火は貧弱ではあったが、二人が向き合って話すには十分な明るさだ。

ヴァンとレグスは、燭台が置かれたテーブルを挟んで向き合い、話し合っていた。

「ふむ……なるほどな」

ヴァンの話を聞いたレグスは顎鬚をなでて、思案顔をする。

「ヴァンがエルヴァの正式な将になる、か……」

「ああ。ドライゼムはそう言っていた。禄や領地も与えてくれるらしい」

「……傭兵を正式な将として取り立てるなど、他の国では聞いたこ

ともないが……それができるのが、奴が」

「そういうことなんだろう。暴虐、そして無慈悲な王としての名が先行してはいるが、そういった力の有無で全てを決められるのも、奴だけにしかできない。徹底した実力主義……立身出世を望む人間にとつて、奴が信奉されているわけだ」

「多くの文人、武人が奴に取り入ろうとしている話が、そういえばあったな。まあ暴虐、無慈悲の二つがあるのも事実だが……ところで、皆にはこのことを話したのか？」

「いや、今はレグスだけだ。最初は話すつもりだったが、今のような浮かれた気分でいるときに話すと、問題がありそうだ」

本当はサイアムにも話しかかったんだけどな、と最後に付け加える。彼については話す前にイルシュにのされてしまい、機会を逃してしまっただが。

「……なるほど、一理ある。報酬が多かったというだけでもてんやわんやの騒ぎになるくらいだしなあ」

呆れ気味にレグスが言う。どうやらヴァンがドライゼムに呼ばれていたときも、苦勞していたらしい。ヴァンは皆の元氣の良さに苦笑しつつ、レグスを勞った。

「サイアムもそうだったけど、レグス、お前にも苦勞かけたな」

「なあに、ドライゼムの相手をするよりはマシだと考えておくさ。で、皆にはいつ話す？」

「明日には落ち着いてくるだろうから、それぐらいに。禄についての目録も明日には届くらしいから、分配もその時に一緒にやろうと思うてる」

「分かった。なら勘定係にも、声をかけておくぞ」

「頼む」

「なら、次はわしの番だな。まず今回の戦で死んだ仲間についてだが……」

二人の話は進み、死んだ仲間や武器、馬の数、怪我人の状態など、様々な事案を確認する。時には遺体の確認にも出向き、全てが片付

いて天幕に戻ってきた頃には、既に深夜の時間帯にまで差し掛かっていた。

戻ってきてすぐにレグスは椅子に深くよりかかり、息を吐く。

「ようやく終わったか……大きな戦の後は、これだから困る。精神的も肉体的にも、疲れてかなわん」

死んだ仲間の関係者に会ってきたのが堪えているのだろう。いつもより疲れた表情で、ぐったりとしている。

「そういうな、これも必要なことだ。……特に、犠牲になった仲間達を忘れないためにも」

言いつつ、ヴァンは天幕に置かれていた棚から、酒瓶とグラスを持ち出した。

「おい、どこへ行く……って、いつものか。まったく、戦のたびに律儀なことだ」

「仕方ないだろう。自己満足とはいえ、しないと落ち着かないんだ」

「やれやれ……傭兵になってから、何年経つんだか……まあいい、早々にすませて戻ってこいよ」

「ああ」

短く答え、ヴァンは天幕を出て行った。

第三章 “闇” よりの影

ヴァンは一人、小高くなっている丘に上っていた。やがて丘の天辺に着き、そこからは野营地全体を見渡すことができた。

夜も更け、つい先程まで多く灯っていた火も、今は最低限の篝火しかついていない。人々の声も小さくなっていた。

大きめの石に座り、ヴァンは以って来た酒をグラスに入れる。そして酒瓶をおき、グラスを掲げて黙祷。死んだ仲間達の名を脳裏に浮かべ、彼等と過ごした日々を思い返していた。

これは戦神エルドスに仕える者が行うという、死んだ戦士を送る儀式だ。

ヴァンは別段エルドスの信者と言うわけではないが、戦が終わった際、仲間との絆を確認するために行っていた。

（ラグ、あいつは気のいい奴だった。けど少し気がよすぎて、安請け合いをするのが多かったな。ワッツは神経質な男で、自分が集中しているときに声を掛けられるのを一番嫌っていたっけ。それから……）

接点が少なかった仲間でも頭の中を洗いざらい探し出し、思い返していく。思い返せば思い返すほど 胸に走る痛みは大きくなったが、ヴァンはそれを受け入れていった。

そして全員分終わると、より高くグラスを捧げてから酒を飲み干した。

（お前達全員、忘れない。……忘れるものか）

最後の別れを胸の内言い、もう一度黙祷する。彼等の残していたもの、彼等が守ろうとしていたもの全て、守っていくと決意して。

失う痛みを恐れているのに、こんなことをしているからいつまで経っても痛み慣れることが出来無いのかもしれない。そう考えれば、イルシュに対して申し訳ないという想いもでてくる。だが、そ

れでも変えられない、変えたくない想いがヴァンにはある。

仲間を大事にしる、そうすれば仲間もお前を大事にしてくれる――

――義父の言葉が、不意に蘇った。

いい時に聞こえてくるものだ。とヴァンは思い、勿論だと返しておく。同時に小さいときから今まで大事にされてきた恩も絶対に忘れない、この傭兵団を守ってみせる、とも。

義父から受けついだ傭兵団を誇らしげに、優しげに、そして若干の寂しさをこめて見つめる。いつしかヴァンは、過去に思いを馳せていた。

彼は孤児だった。親も誰だか知らず、戦の合間をぬって町から町へと流れ、生きるためにひたすら盗みや暴力を繰り返す。人を信用せず、常に疑いの眼差しで人間を見ているその様は、まるで孤狼のようでもあった。

彼はその時既に、世界は残酷なものであると理解してしまったのだ。

彼の周りには戦いが溢れ、愛情を与えてくれる人もなく、果ては力ない我が身を他者にいいように食い物にされる。

こんな残酷な世界で、どうして優しさなど信じられるだろうか。

ヴァンは当時、そう考えていた。

だがある日、その考えに転機が訪れた。

「おお、元気がいいな！」

――いつものように盗みを働いていたとき、突然首根っこを掴まれ、言われた。

一瞬、状況が理解できなかった。偉そうにして、それでいて自分勝手にしているノロマの大人達に、超直感もある自分が捕まるわけがないと思っていたから。

離せと叫んで暴れても、万力のように掴まれていてまるで抜け出

せない。首を掴まれたまま、視線が同じ高さまで引つ張り上げられる。

ヴァンの前に現れたのは、陽気な顔。戦いが蔓延する中で、このような顔に会うのは珍しいことだった。もっともその時のヴァンからしてみれば、彼の陽気さがむしろ胡散臭く見えていたが。

「ふーん、随分と強い目で睨んでくるな……中々見ないぞ、ここまでは」

「……っ……だったら何だっていうんだ！ 離せクソオヤジ！」

「おいおい、クソオヤジはないだろう。俺はまだ三十路入ったばかりだぞ」

「だったら十分オヤジだ、とにかく離せ！」

「おっと、暴れるな。ダメに決まってるだろう。泥棒しちゃいけないんだぞって親に教えられなかったかー？」

ふざけた口調で言う目の前の男に、ヴァンの怒りに火がつく。

「……いねえよ」

「ん？」

「いねえよ、そんなの！ 教えてくれる奴もいないのに、どうやってそんなの分かっていうんだ！」

「……」

「誰も俺を助けてくれねえ。だから俺は、こうやって生きてんだ！ それを何も分かっていないでめえに……！」

「……やはり、そんなとこだったか。近頃こういうのが多いもんだなあ」

男は辛そうな顔になり、目を伏せる。

男の変化に、ヴァンは面食らった。なぜ、他人のためにこんな顔をするのだろうか？

「な、なんでお前がそんな顔してるんだ！」

「……なに、気にすんな。単なる感傷ってやつだからよ。……なあ、ガキんちよ」

「ガキんちよじゃねえ、ヴァンだ！」

両親を知らないヴァンが、唯一覚えていた自身の名を叫ぶ。

「そうか、ヴァンか。なあヴァン。確かに俺の言い方も悪かったとは思うが、それならお前は自分の行いをどう思ってるんだ？ 人を悪く言うのはお前さんの勝手だが、じゃあ自分は何も悪くないとでも言うのかい？」

「！？ そ、それは……」

口ごもる。仕方ないと思って封じ込めてきた罪悪感が、盗んだときの映像と共に蘇ってくる。老婆、老人、病人、子供……どれも自分が何をされたのか分からない、または怒りの表情で、自分を見ていた。

子供の体力では盗む相手も限られる。だから、より弱い人間ほど盗みやすかった。だがそれは、自分がされた忌むべきことを相手にしているようで……

「……なるほど、そうそう腐ってるってワケでもないみてえだな。

なら、好都合だ」

「好都合……？」

「おう。なあに、そんなに身構えんな。お前にとっても悪い話じゃねえからよ」

顔をヴァンに近づけて、男が言う。

「お前、俺のところに来い。そんな風に思ってるんだったら、盗み以外にできることってやつを色々教えてやるからよ。……そっぴや、名前言ってなかったっけな。俺の名前はキルヒア。傭兵団の団長をやってる男だ」

そうして、二カッとキルヒアは笑った。

無理やりも同然に、ヴァンはキルヒア傭兵団に入れられた。

初め、ヴァンはキルヒアを疑っていた。過去に奴隷として売り飛ばされそうになったこともあったからだ。

機会があれば逃げ出し、また元の生活に戻ろうとしていた。――

だがそう思っている一方で、認める気は無かったが、予感があった。ここが、ヴァンにとつての居場所になるのだらうと。

傭兵団の中で過ごしていく内に、疑いの感情はなくなっていく。盗みを働いていたときには得られなかった暖かさが、そこにはあったのだ。

鍛錬や雑用、食卓を囲む際、いくら拒んでも声をかけてくる気のいい大人たち。キルヒアが拾ってきた、自分と似たような境遇にある子供達はヴァンの持つ痛みを共有してくれ、心を癒してくれた。

また、彼は子供は本人が望む以外は戦場に立たせなかった。武器の扱いを学んでも本人が言わない限り、雑用やその他のことを任せただけ。勿論それらもきつかったが、そのお陰で肉体も鍛えられていった。

そうやって働いていく中で様々な知識と技術、魔導も教えられ、盗みを働いていた頃とは違う、心の余裕もヴァンの中に生まれてきていた。

そうになると、自然に見えていた世界の様子が変わってくるから不思議なものだ。

「人間、色々と使える頭があるんだからよ。盗みばかりに使ってたら損ってモンだぜ。色々と考えて、モノを見てみな」

キルヒアはそう言いつつ、人差し指で頭を小突いてきたことがあった。本当に、その通りだとヴァンは思う。

決して戦がなくなつたわけではなく、むしろ傭兵団というそれに近い場所にいるために深く関わるようになってしまっている。だが、それでも世界は残酷なだけではないと、分かるようになったのだ。

しかしそこで、ヴァンには疑問に思うことが出て来た。なぜあの男、キルヒアは、彼とは何の関係もない人間をこうして拾い、様々な事を教えてくれるのだらう。

「あん？ お前を拾った理由だって？ 今更そんなの聞いてきてどうしようっていうんだ」

一緒に食事を取る機会があり、その際に聞いてみる。ヴァンが傭

兵団に入ってから、数年の歳月が過ぎた春の出来事だった。

「どうもしない。ただ、気になったから聞いているだけだ。なんだったら、俺に似た境遇の子供や、行くあてのない浮浪者を入れていることについてでもいい」

「……ふーん……なるほどな。こんな戦いばっかってときに、なんでも人助けなんかやってんだと言いたいわけか」

「まあ……そうだ」

自分も助けられた人間の一人だと考えると、聞くのはどこか照れくさかったが。

「じゃあ簡単だ。そりゃあな……俺がやりてえからだよ」

「ごく、単純な答え。それだけに、ヴァンは驚いた。」

「それだけ？」

「ああ、それだけだ。だが、こんな単純な理由でも付き合ってくれる奴は結構いるもんでな」

なあ、レグス！ と隣の部屋で事務仕事をしているはずの副団長に言う。応えは返ってこなかったが、茶目っ気のある笑みを浮かべてキルヒアは「恥ずかしがってんだぜ、いつも面倒ごとは嫌だとか言ってるのにな」と小声でヴァンに話してきた。

しかし次に口を開くときには、真面目な顔になっていた。

「俺が勝手にやろうとしていることを、皆は容認してくれる。多分だが、皆も今の世の中ってやつに疑問があって、その疑問を少しでも解けるなら俺のしていることを認めてくれるんだと思う」

仲間達を語るキルヒアの目は、優しい。同時に誇らしげでもある。彼の目を見ているヴァンは、こういった目も人間はできるのだと思っ

った。

「それに……そうだな。何で俺が傭兵やってるか、分かるか？」

「？ い、いや……分からない」

突然話題が切り替わったように思えたヴァンは、困惑しつつも首を横に振る。

「そつか……まあまだガキだし、分からなくても仕方ねえか」

そついい置いた上で、キルヒアはお前らを守る上で都合がいいからと言った。

ヴァンは何故と聞く。命の奪い合いが生業の傭兵が、どうして自分達を守るのに都合がいいのだろうか。

「そりゃあ普通はそう思うだろうな。だがな、俺はフリーだったころに色々なところを回ってたんだが……」

キルヒアは渋い表情を作って、話し出す。

彼が言うには、西域はその全土が戦争をしている状態と云っている状態だという。そのため各国は戦費を賄うため、民に重税を課しているのだといった。

「だが、この税つてのが問題でな……農民だったら、作物の大概を持ってかれちまうのが普通って始末だ。残ってる分は生活できるギリギリの線。碌な生活なんぞ、できるわけがねえ。しかもこれはどの国もほぼ同じときた」

「……」

「こんな状況だからか、子供を口減らしに殺すつても今時じゃ普通にやられてる。次男坊、三男坊は成長しても継ぐ土地がねえから最後には追い出されちまう。……暮らしにくい世の中だぜ、まったくな」

キルヒアの言葉は、何処か苦い。もしかしたら、と思うが、そこで思考を止めておいた。聞くことでもなければ、聞いてどうなるものでもないからだ。

「その上戦争に負けた連中の残党が山賊同然に村や町を襲いやがる。自衛しようにも農民達に反乱なんか起こされちゃたまらんから武器を持つのを制限されちまって、満足に戦えもしねえ。まさしく悪循環だ」

そして、その点傭兵つてのはいいもんだと続ける。

兵力が必要なのはどの国でも変わらないため、傭兵に対しては課税が低く抑えられているらしい。

また、優秀な兵を囲い込もうとしている国となつては手厚く扱っ

てくれる場合もあるという。自衛も職業的な戦士が常駐してるため、下手な相手なら容易く返り討ちにできるとも彼は言った。

「普通に暮らしてるだけじゃ、ジワジワと奪いつくされるのを待つだけ。ガキや女ども、友人だっていいだろう、自分にとって大切な人間も碌に守れやしねえ。いつかそいつらも、奪い去られるだろう」

「……」
「生きるか死ぬかをいつも意識してなきゃならねえ分辛いが、そいつらを守るには傭兵はうってつけの仕事なのさ。……まあ、だからといって自分達が正しいなんて思ってるわけじゃねえが。ヴァンよ、お前もそう言いたいんだろ？」

「……それは……」

心の内を見透かされ、思わず口ごもる。キルヒアの言うとおりだった。

確かに今まで話されたことで、自分達や傭兵達を取り巻く事情はなんとなくわかった。だが、そうだからといって殺しを生業とする傭兵をやっているのかという思いがヴァンには浮かんできた。

お笑い種だとヴァンは思う。自分だって仕方ないと考えて、盗みや暴力を繰り返してきた。ならば、キルヒアのしていることをどうこう言う資格などないだろうに。

「……そこで口ごもるあたり、まだまだガキだって証拠だな」

だが、今度もヴァンの心を見透かしたキルヒアは、遠慮なく言い放つ。

「ッ……どういう意味だよ」

「そのまんまだ。どうせお前、自分がやってきたことをうたうだと考えて資格がないだの思ったたる。潔いといえば潔いんだろうが、そんな潔さは逃げているだけにしか俺には見えねえよ」

「な！？ 誰が逃げてるって……！」

キルヒアの言に思わず声を荒げる。だが、彼は動じずに続けた。
「逃げてるだろうが。自分がやったことに怯えて責任も取ろうとしねえんだからよ。いや、この際責任もどうでもいい、自分がどうし

たいかが問題になるだけだ。お前が自分だけよければいいと思ってるなら別にいいが……」

「ふざけるな！ 俺だって以前までの俺じゃないんだ、そんなこと考えてない！」

「だろ？ だったらいいじゃねえか。俺はお前の考えてる通り、人を殺して金を稼いでる身だが、だから人を助けちゃいけないって法もねえ。言うのは二回目だが、単に俺がやりたいからやってるだけだ」

迷いのない、真っ直ぐな目がヴァンを射抜く。ヴァンはその目に気圧された。

「人を殺した報いを受けるのは別にいい。俺も殺してるんだからな、受け入れるさ。だが、だからといって自分のしたことを言い訳にして、なにもしねえ方が俺には言い訳に思える。……お前の考え方も一本気で悪かねえが、そればかりに拘ってたらもっと大切なもんを見失うぜ？」

「……」

キルヒアの言葉に、ヴァンは押し黙る。

自分の弱さを覗かれ、そしてキルヒアの強さ、矛盾を知りつつも強い意志を持って前に進んでいける心、を見せ付けられた思いだった。

しかし、そこまで聞いても何かがヴァンの中でひっかかる。キルヒアの言も、ある意味では正しいと思うのだが……

「でも、俺はそこまで割り切って考えるのは……あんたの言ってることは分かるけど……」

「……強情なやつだ。だが」

キルヒアはいきなり立ち上がり、ヴァンの側に来る。何事かと思っただが、隣に来たキルヒアは、その大きな手をヴァンの頭の上に乗せ、髪をくしゃくしゃにかき回した。

「ちよ、何するんだよ……」

くすぐったくて、しかし彼の手から伝わる温かさに振り払うこと

も出来ず、唇を尖らせて抗議する。

「なに、その強情なところ可愛いと思ったからさ。……そんなに疑問を捨てられねえっていうんだったら、いつそその強情さをとことん貫いてみてもいいんだぜ？」

「え？」

言っている意味が分からず、聞き返す。キルヒアは、それに優しく笑みをたたえたまま、応えた。

「そう難しい話でもねえよ。つまり、その疑問の根幹自体を消しちまうってことさ。……なあ、ヴァンよ」

一つ呼吸をおき、キルヒアは言った。

「なんだったら、戦い自体をなくしてみるか？」

（初めに聞いたときは、俺も何を言ってるんだと思ったな……）

馳せていた思いを現在に戻し、ヴァンは苦笑する。

だが、彼に言われたとき、はまらなかったピースが埋まるような感覚があつたのも事実だった。

（もっとも、一傭兵団の長が考えることじゃないけどな……）

そして、どれだけ馬鹿らしいことなのかも。

だが、それを認めてくれて、後押ししてくれたのは他ならぬキルヒアだった。彼もまた、ヴァンと同じものを目指していたのだという。

傭兵団を率いて自分達の力を高め、その力を以って真に戦争を無くすことのできる主に仕えたいと考えていたのだ。

あんまり人には言うんじゃないぞ？ と少し恥ずかしそうに言うキルヒアを今でもヴァンは覚えている。できれば自分でやりてえがそうするには力が足りねえからなあと、悔しそうに言う姿も。

ヴァンにとって傭兵団は、いつしか家族のような存在になっていた。血のつながりを持たないヴァンにとって、それは絆を感じさ

せてくれる唯一の存在だったのだ。その中でも、キルヒアは特別だった。

傭兵として生きる以上、汚い仕事を請け負うのは避けられない。そういった仕事をこなしつつ、力のなさを自覚し、悩んでも、キルヒアはいつも心に志を秘め、どんな形であつても実現させようとしていた。

（絶対に志を捨てようとしないうちに、俺は憧れた……だから俺は無理を言つて、父と呼ばせてくれと、頼み込んだ……）

いや、憧れを持っていたのは、初めて会ったときからずっとだったな。ヴァンは思い直し、訂正した。

親を知らない自分にとって、彼はまさに父であつたのだ。だから彼との絆をはつきりさせておきたくて、あんなことを頼み込んでしまった。そして同時に少しでも彼の力になりたくて、剣でも魔導でも、果ては軍学でも、とにかく力になれそうなものを学んでいった。義父は強かった。優しく、そして賢かった。皆に慕われて……だから、あんなにあっけなく逝ってしまったのが信じられなかった。流れ矢だった。戦いの後で傷を負っていたのが災いし、血を失いすぎてしまったのだ。

処置をするにもどうしようもなく、ただ呆然と、血の気を失っていく義父を見ているしかできなかった。だが、その時でさえ義父は明るい笑顔を浮かべていて……

——お前が、次の団長だ。俺の志、受け継いでくれよ……？

そう言い残して、彼は逝った。

……あれから数年。義父が残した様々なものを学び、初めはヴァンが団を継ぐことに反対していた者も納得する成果を上げて、どうにかやってきた。

そして今、西域は一つの節目を迎えようとしている。

以前から戦争が続けていた西域において、ドライゼムの各地の平

定と言う話は全てが間違いというわけではない。むしろ強大な武力を以って速やかに各国を制圧し、平定していく方が情勢の安定への近道とも考えられる。

現にエルヴアによる各国の平定は順調に進み、このままいけば全ての国がドライゼムの元で統治されるだろう。そうすれば戦もなくなるはずだ。

……しかし、だというのにヴァンの心は晴れない。

ヴァンの脳裏に、陣中で見た捕虜達の姿が浮かぶ。彼等は皆、一様に絶望した表情を浮かべ、労働を強制されていた。限界まで酷使された彼等の姿は目も当てられないほど酷く、誰かが倒れていようと気にも留めずに働かせ続けていた。

ドライゼムは、彼に服従しなかった者に容赦しない。国であれなんであれ、一度でも逆らえば、そこにいる民は奴隷に身を落とされるのだ。

かつて、ドライゼムが言っていた。「殺すのも手間だし、なんだったら『有効』に活用しなくてはな」と。彼の言うとおり、彼等は『有効』に活用され、その身が朽ちるまで使い潰されている。

（彼等にはより重い税が課せられ、暴行、略奪も日常茶飯事のように行われている……）

逃げ出そうとしても、嚴重に張り巡らされた監視がそれを許さず、見せしめとして殺される。そうだった日々が、エルヴアに平定された国々で行われていた。そして、反乱分子の徹底的な殲滅も……

（今のままいけば、戦争はなくなるだろう……だが、それでいいのだろうか……）

迷いが生じてしまう。ドライゼムが導くのは平和ではなく、もしかしたら破滅なのではないだろうかという考えがよぎってしまうのだ。

義父は戦いを無くす事を、自分に託した。幼い頃に感じた矛盾を抱えつつも、自分は何とか折り合いをつけ、継いだ志のために邁進してきた。このままそれが叶うはずなのに、……

ふう、と息をつく。取り巻く状況に疲れを感じた。志を諦めるつもりなど毛頭ないが、時折自分との食い違いを感じてどうしようもなくなる時がある。

御伽噺のようにはいかないものだ、ヴァンはつくづく思う。そう。お話のように、あんな人がそうそう現れるわけがない……

——戦乱が続く中で、人々の中に息づく御伽噺。英雄が舞い降りて、世界を救ってくれる御伽噺のようには。

だが、人々は語り続けている。辛い時代に生きる人間ほど、彼の者の物語は語られるのだ。いつか自分達も、彼のような英雄に救われるのではないかという淡い望みを託して。

気付けば、ヴァンは歌い出していた。キルヒアがいつだったか、こうなりたいと語っていた英雄の物語を。キルヒア傭兵団の紋章に描かれた紋章、そのモチーフとなった王の物語を。

「私は語ろう……」

夜の闇に、ヴァンの声が静かに流れていく。

私は語ろう。この地に起こりし大いなる繁栄を、その栄華を

私は語ろう。この地に起こりし大いなる戦乱を、その悲劇を

私は語ろう。この地に生まれし大いなる英雄を、その物語を

——“尊厳なる者”の物語を

最初に混沌の闇があった

闇は全、しかし無であった。そこには生あるものは無く、また土、水、風、火もまた無かった

あるとき、その静寂を嘆いた神々は混沌の闇に一つの波紋をおこした。それは闇を震わせ、その内にあつた全が分かたれて光が生じた

光は闇を裂き、分かたれた混沌を更に裂いていく
裂かれた混沌は世界を生み、世界はその内に様々なものを生んだ
豊穡の源となる大地。恵みと潤いを運ぶ水。風は気ままに二つを
世界に巡らせ、火はその三つを温もりで満たす

そしてついに、四つの恩寵によつて生きとし生けるものたちが生まれ
まれた

生まれ出でた彼等は栄えた

四足のものは大地を思うがままに駆け抜け、羽を持つものは空を
自由に飛び回り、ひれと輝く鱗を持ったものは水の中を支配し、火
を扱えるものは極寒の大地にまで足を踏み入れるに至つた

そんなあるとき、彼等の中からただ自然に身を任せるだけではな
く、自らの意思で操る法を見つけ出したものたちが現れた

彼等は見つけ出した法で、自らの繁栄をより確固たるものとした
土を操つて大地を自らに住みやすい場所に变え、水を操つて渇き
をなくし、風を操つて遙か遠くに意思を伝え、火を操つて暖をとつた
いつしかその法は広く伝わり、この世に在らざる魔を導くもの、
『魔導』と彼等はそれを呼ぶようになっていく。そしてそれは彼等
に、以前からの繁栄を超える栄華をもたらしていた

おお見よ。その輝かんばかりの栄華を

壮麗に立ち並ぶ、その巨大な塔と宮殿を

自らを魔導で变え、その力強さに溢れた姿を

飢えの苦しみより解放された、心穏やかなるその笑顔を

“光輝の時代”とすら呼ばれた繁栄はいつまでも続かのように思
われた

繁栄が続く中、少しずつ、滅びの影は忍び寄る

いつしか魔導を巧く使える者と、使えない者との間に溝ができ始

めていたのだ

魔導を扱うものは扱えぬものを蔑んで自らの奴隷とし、己が欲望を満たすために魔導を使うようになっていく

また、魔導を使い続けたことで世界にも異変がおき始めていた。

土を、水を、風を、炎を永きに渡って操り続けた、その報いを人々は受ける

土は本来の力をなくし、水は流れを変えてそこに生きる命を狂わせ、風は熱と寒さを在りえざる場所にもたらし、炎はその勢いを止めることなく燃え続けた

心あるもの達は異変を止めようとし、欲に身を任せる魔導士たちに警告を発する

だが栄華の内に蓄えられた知識と力は彼等を、己が欲に任せて魔導を扱うものたちを、更なる欲望の実現に向けて動かしていた

心あるもの達の警告も無視して、彼等は暴走を始める

そして、ついにその時が訪れた

崩壊の時。栄華と光に溢れていた、“光輝の時代”の終焉――

“光”は失われた。そして“闇”が世界を覆っていく

己の欲にとらわれた魔導士たちはその恐るべき探究心により、“

光輝の時代”の遺産を用いて強大な力を手に入れた

彼等は秩序を壊し、己が欲をかなえるに都合のいい世界、秩序なき“混沌”を作り出す

地獄が始まった。目を瞑るとも、耳を閉じるとも、“闇”は人々を飲み込んでゆく

魔導士たちによって秩序が壊され、人心は荒む。そして荒んだその心は更なる争いを生み、その裏で魔導士たちは自らの欲をかなえるために力なき人々を使い尽くした

日々を過ごすもの達の耳に届くのは地を這うものたちの蹄と駆け足、目に映るのは天まで届こうかという業火であり、戦火が絶えることはなかった

父を、母を、子を、友を失った嘆きは途切れること無く続き、流れ出た血は川すら作る。屍は大地を覆いつくさんばかりに積まれていく
同じ時を生きる者は思う

何故私達は苦しまなければならないのか
何故私達には光が与えられなかったのか

何故私達は——この時に生を受けてしまったのか……
終わり無き戦い、終わり無き絶望が、世に満ちていった

生きるもの達は願った

この苦しみを終わらせる事を

世界を覆う“闇”が吹き払われることを

再び世界に“光”がもたらされる事を、その日を
ただひたすらに願っていた

そして——彼が現れたのだ

彼の者の名はゼノン。世界と繋がりし者

その身に燃え盛るが如き黄金の髪、美神をも惑わすが如き美貌を
宿し、尽きることを知らぬ泉の如き英知、天地を揺り動かすが如き
武勇を合わせ持つ

世界と話し、世界と遊ぶ彼の馬手には神々より授かりし聖剣、弓手
には偉大なる長の杖を携え、白銀の鎧をその身に纏っていた

ゼノンは世界を覆う“闇”に戦いを挑んだ

それは永く、そして激しい戦いだった

幾度となく魔導士たちより差し向けられる刺客、暴虐を尽くす領
主、更には彼が守る人々さえも時に刃を向けた。長き年月において
世界を覆っていた“闇”は、余りに長い年月において人々を苦しめ、
人心を蝕んでいたのだ

幾多の裏切り、数多の戦いがゼノンを襲い、果てしない憎しみが
彼を傷つけていく

しかしいかなる困難がゼノンに立ちかはだかるうとも、彼を止める

ことはできなかった

果敢に闇の時代に立ち向かうゼノンの姿は、次第に人々を惹きつけていった

“闇”からの解放を願う者、彼等の姿を見て戦いを決意した者、中には自らの業罪を悔やんだ魔導士もいる。ゼノンの下へはせ参じる人の流れは絶えることが無く、それは人がつくる川とも見えた人々の意思と力を得て、ついに彼等は魔導士たちの長と対峙するに至った

魔導を極めたと称する長は強大だった。操る業火はゼノンの行く手を阻み、烈風はその体を切り刻んだ。呼び出した激流は自由を奪い、大地の震えは彼を押しつぶす

万の軍勢すらも滅ぼしたといわれるその力は、ゼノンを圧倒する。しかし彼の戦意は衰えぬ

力無き者達の声、“闇”からの解放を願う人々がゼノンを支えていたその支えを以って、ゼノンは長へとひた走る

長は魔導をもって阻もうとするも、人々の支えでそれは退けられ、歩みは止まらぬ

そしてゼノンは、長に聖剣を突き立てた

長の断末魔が世界に轟く。強大なる魔導を操った魔力は散り、長きに渡って世界を支配した“闇”が払われたのだ

喜びは嘆きに代わり、空を満たす。曇天が裂け、まばゆき光が地上に降り注ぐ。“闇”の終わりを告げる歌声が、世界に響く

英雄となりしゼノンは生ける者達の願い、そして世界を作った神々の願いを受けて王となる

世界を冠する“天”の称号を戴き、神々より不老の体を得たノン王は世界を安定へ導く

皆はゼノン王を讃えた。そして畏敬と感謝を以って、いつしか王をこう呼ぶようになっていった

——“尊厳なる者”と

英雄の詩を歌い終えたヴァンは、しばし物思いにふける。

（ゼノン王が今もいてくれれば、こんな争いは起こっていなかったんだろうか……）

詮の無い考えではあるが、せずにはいらなかった。

ヴァン自身はゼノンを知らないが、彼本人が実際に存在し、統治を行っていたという証拠が各地に残されている。彼の伝説は紛れも無い事実であり、“闇”による世界の荒廃もまた、事実であった。

ゼノン王は二百年ほど前まで統治を行っていたが、そこで同じ人間統治による世界の停滞を憂いて王位を退き、後進の者たちに政を譲ったのだという。

だが、当時彼の治める王国は大陸の殆どを占めるほどの大きさであり、並みの人物では統治するのは無理があった。

彼の後を継いだ二、三代の期間は安定した治世を築くことができたという。しかしそれで降徐々に力を失って東、中央、西と三つの地域に分裂。果てはそれぞれの地域内においても国々が独自に台頭して、今の戦乱の世を迎えることになってしまった。

ゼノン王が治めていたのは三百年もの間だ。それだけの期間で安定した統治を、しかも大陸の殆どにおいて行うのは誰が見ても容易ならざることだ。その偉業をなしただけでも、十分彼を讃えるに足る。

だが、もし彼が王位を退かず、今も統治を続けていれば？ そう考えてしまうときがある。彼の言ももつともだろうが、人々が望んでいたのは安定した治世ではなかったのか……

（今となつては本当に意味のない、詮の無い考えた。……ゼノン王に頼りすぎていることも含めて）

後進を信じ、治世を任せたのであれば、受け継いだ者自身が奮起して安定した世を維持していかなければならない。それは後世の者たち達に課せられた責任でもあるだろう。それを無視してゼノン王のみを追及するのは、お門違いも甚だしい。

（そうだ、分かりきっていることだ。……だが……）

手に持っている酒瓶とグラスに目を落とす。

——戦いさえなければ、彼等も死なずにすんだのではないか……？
意味がないと思っているのに、こんなことを考えてしまう自分も、否定しきれないのも事実だった。

様々な感情が、ヴァンの胸中で暴れまわる。どうにかして落ち着かせようと、深呼吸を繰り返す。しかし一度荒立ってしまった感情の波は、中々収まってはくれなかった。

酒瓶を空にしてしまおうかという考えが浮かぶ。普段なら戦いの後であってもそこまでは飲まないのだが、大きな戦いの後ということもあって気が緩んでいたのだろう。

誘惑に負け、やりきれない思いと共に飲み干そうとした。しかし
「——ッ!?」

突然、頭痛が走る。今までに感じたことのない、激しい痛みだ。思わず額に手をつけたが、痛み自体はすぐに消える。だが、それとは別の気味の悪さがヴァンの中に残った。

（何だ、この感覚……危険を察知したときとは違う？）

初めての感覚に、ヴァンは戸惑う。しかし、考えている時間は多くは与えられなかった。

背筋に悪寒。そしてそれを感じると同時に酒瓶とグラスを捨て、護身用に持ってきた剣を抜刀。背後に振りぬく。

切り伏せる手ごたえ。音もなく近づいてきた黒尽くめの人影は、その一太刀によって倒された。

だが、倒した人影の背後には、同様の格好をした者達が幾つもいる。彼等は皆、一様に小剣を持ち、ゆっくりと間合いを計りながら近づいてきていた。

（こいつら一体……！？ いや、詮索は後だ！）

剣を振って威嚇、近づかせないようにしてから一旦後ろに跳んで距離をとり、一気に駆け出した。

丘を勢いをつけて下り、陣地に突っ込む。陣内は未だ、静かなままだった。

読解を使って周囲の警戒をしているはずの魔導士も傭兵団にいるのだが……

（彼等も気付いていない、のか？ 何なんだ奴らは……いや、詮索は後で良い。それよりも）

「あれ、ヴァン兄さんじゃないですか。こんな夜中にどうしたんです？」

入ってすぐにヴァンを兄と呼ぶ、細身の少年と鉢合わせた。愛嬌のある顔立ちをしており、子犬のような人懐こさをヴァンに向けている。

彼の名はフォル。ヴァンと同じ時期にキルヒアに拾われ、彼を兄と慕ってくれている少年だ。

下りてきて初めて会ったのが彼とは、僥倖だ。ヴァンは自らの幸運に感謝しつつ、彼に呼びかける。

「フォルか！ 悪いが、今すぐ戦えるものを叩き起こしてくれ！」

「え？」

「敵襲だ……！」

「え！？ まさか、そんな……」

驚きを隠せぬまま、聞き返すフォル。魔導士からは何も言われていないことが、彼の頭の中にはあるのだろう。

しかし彼も傭兵団の一員であり、また、ヴァンのことをよく知る人物の一人でもある。

ヴァンの超直感を知る彼は、「わかりました！」とヴァンの指示に従い、手近な天幕に入っては団員を起こしていく。

「女や子供達も起こせ！ 敵はどこから来るか分からん。彼等を囲って守りつつ、戦うんだ！ 魔導士の保護も忘れるなよ！」

指示を飛ばし、ヴァン自身も篝火に火をつけて視界の確保に努める。そして伝令を呼びつけ、他の傭兵団やエルヴァ軍にも襲撃を伝えるようお願い渡した。

やがて陣地に多くの篝火が灯り始め、団員達が各々の武器を持ち出し始めた。だが、態勢が整うあと僅かな時間に彼等は来た。

陣地のあちらこちらで剣撃の音が鳴りはじめた。団員達の怒号がそれに続く。

「チ、もう来たのか…… フォル、いけるか!？」

ヴァンは付き従っているフォルに呼びかける。

「はい、大丈夫です!」

対して、フォルは自分の武器である戦斧を握り、頷いた。

続いて彼は意識を集中し始める。すると彼の体に術式が浮かび上がり、一つ大きな鼓動を立てた。そして次の瞬間には――

「――うりゃあ!」

盛大に気炎を上げ、戦斧を振り回して侵入者達を倒していた。彼の振るう斧の速度は尋常ではなく、反応する暇さえ与えない。

これは彼が初めに使った、肉体強化の魔導によるものだ。

元々彼は外見に見合わず、鍛えられた肉体を持っているのだが、魔導の併用によってそれをより強化できる。だが、弱点もあった。

この魔導は肉体の限界を超えて力を引き出すため、長時間使用すれば自分の体を壊してしまう危険があるのだ。

だが今はそのことを考えている暇はなかった。早く手を打たなければ、被害が拡大する恐れがある。

「フォル、きついかもしれないが……」

「分かってます。効果が持っている間に、陣地回ってきます! 無理はしませんから!」

「頼む!」

ヴァンの考えを察してくれたフォルは、これまた尋常でない速度で走り去って行った。

肉体強化によって敏瞬さも高められている。陣地を見て周って声

をかけ、態勢をまだ整えられていない仲間を救うには彼は打ってつけだった。

フォルを見送ったヴァンは何人かの団員達と合流し、天幕を見て回って以上がないかを確かめていく。途中、イルシュやサイアム、レグスらとも連絡を取り合い、互いに団員達を率いて敵に当たることを確認して別れた。

「おい団長、あれを！」

陣中を駆け回っている最中に団員の一人が声を上げ、一方を指し示した。

首をそちらに向けてみれば、他の傭兵団の陣地でも多くの篝火が灯されていた。風に流れ、僅かに聞こえてくる声も慌しい。

「まさか、俺たち以外の陣にもこいつらの仲間が……！？」

「……どうやらそれだけじゃねえみたいだぞ……エルヴァ軍もだ！」
別の一人がエルヴァ軍陣地の異変も察知する。

「くそ、俺たちだけが標的じゃなかったってことかよ！」

「しかしまずいぞ。俺達は団長のお陰で早めに態勢を整えられたけど、他は……」

団員達に焦りが生じ始める。

キルヒア傭兵団が無事だったとしても、全体で見ればほんの僅かな戦力でしかない。他の陣地を各個撃破されれば、残る道は全滅か降伏しかない。

ヴァンはどう動くか、考え始める。体勢は整ってきたとはいえ、まだ敵がどれほどいるか分からない現状、他の陣に救援を向わせるほど余裕があるわけでもない。

（伝令は既に向わせている以上、自分達にできることはないだろう……今は、彼等の強さに賭けるしかない……）

できるなら、襲撃前についてくれよと願いつつ、口では焦る団員達をたしなめた。

「落ち着け、皆！ 今俺たちが彼等にできることはない、それより敵を早く片付けるほうに集中しろ……！」

「だ、団長……！」

「彼等の救援にむかいたいのは俺も同じだ。だが、ここで戦力を分散させれば俺たちも危ないんだ。他の団員にもこれは厳守させる、いいな……！」

「お、おう！」

厳しい口調で言い切り、命令を承服させた。そして彼等を率い、団員や女子供の無事を確認するために陣中を見て回る。

その際、幾度か黒尽くめたちに出くわした。彼等は動きが遅く、単体ではそれほど強いわけではないようだった。だが、逆に彼等が連携を取ると思わぬ強さを発揮した。

隙がないのだ。一人が一人の動きを完璧に把握、補佐し、死角が出来れば即座に対応。死角を埋めるように動き、致命となる一撃を撃たせない。

まるでこいつら自体が一つの生き物のようだ……ヴァンはそう感じた。訓練した者ならではの連携ではなく、もっと根本的な、元からある機能としてこの動きがある。

（しかもこいつら、声の一つも上げない……）

それが不気味だった。人間ならば痛みへの呻きや怒りを言葉にして吐き出すのが自然だろうに、する気配もしない。

「くそ、不気味な連中だぜ……！」

剣を打ち合う中で、団員の一人が呟く。ヴァンはその隙に敵の横へと回りこみ、剣を横に払った。

補佐に回ろうとした他の黒尽くめは、団員達によって防がれている。連携が得意だというのなら、させないように動いてやれば良い。分断して一対一の戦いに持ち込めば確実にしとめられた。

やがて陣中全てに篝火が灯され、団員達も殆どが態勢を整える。

陣中を隙間なく見張れるよう部隊を幾つか編成、配置。他の傭兵団とエルヴァ軍の救援部隊も編んで向わせ、そこまでしてようやく、ヴァンは少し肩の力を抜いた。

（よかった、これなら損害は僅かで済みそうだ……陣中で火を使わ

れたらまずいと思っていたが、どうやらその心配もなさそうだし……だが……)

今までは対応に追われていたため、考えを巡らせる暇もなかったが、ある体勢を整えて落ち着いてきた。そこで改めて、黒尽くめたちのことが気になってくる。

そうだ、なぜ彼等は火を使わなかったのだろう。

考えてみれば敵の装備は黒尽くめの衣装と小剣のみで、他に防具らしきものは持っていなかった。

夜襲を目的として、本当にヴァンたちを倒したいのであれば、夜襲と同時に火を使い、混乱を助長するという手を使っても良いはずなのだ。

(それとも、俺たちの対応が早くて実行に移せなかった？……いや、違う。俺は確かに気付いていたが、それでも団の皆に夜襲の知らせが届くのはずつと後だ。魔導士たちも気付いていないし、付け入る隙はいくらでもあっただろう……)

今更になって襲撃者たちの不自然さ、不気味さが薄ら寒く感じる。(奴らの正体も気になる……レマン軍が用意した奇襲部隊と考えれば、一応の納得は出来るが……)

何故か、ヴァンはそうは思えなかった。

読解に引っかけからなかったのは隠式の魔導を使用していたのだろうが、ヴァンたちだけならまだしも、他の傭兵団、引いてはエルヴァ軍の魔導士たち全員が探知できないほど高度なものなど、先に戦ったあの魔導士でさえ無理だろう。

魔導の腕を考えてみても、何かレマン軍の仕業と言うには無理があるような気がする。

何か……何か、別の存在がこの襲撃の背後に居ると思えてならなかった。

(……まあいい。それはこれから、奴等の内の一人を尋問すれば分かることだ)

傷がそれほど深くない者を選んで、自分の前に引っ張ってくるよ

うにとの指示もだしてある。陣中の様子も落ち着いてきているようだし……

（今の状況なら、それも……！？）

十分できる、そう続けようとした思考は、新たにヴァンを突き抜けた感覚に遮断された。

なんだ、この感覚は。危険を感知するものとも違う。先程感じた頭痛に近いが、しかしこれは、何かを感じ取っている？ もしくは（感じ取らされている……のか？）

自分の感覚はとある方向を指し示している。その方向へ行けと何かが語りかけているように、ヴァンには感じられた。

知らず、ヴァンは足を踏み出していた。

普段は魔導を使うのは得意でないにもかかわらず、極々自然に隠式の術式を使う。そして導かれるようにして、彼の足は早足から疾走へと変わっていった。

「……ん？ おい、ヴァン！？」

「あれ、兄さん？ どうしたんだろう、あんなに急いで……」

彼を目ざとく見つけたサイアムとフォルは、驚きに目を丸くする。陣中を回っている時に合流した彼等は、黒尽くめの一人をヴァンに引き渡す途中だった。

「なにやってるんだ、あいつは！ これから尋問するって時に、連れて来いって言った本人がいなくちゃどうしようもないだろう！」

「……でも、なんだか兄さんの様子、変じゃなかった？ なんだか怖い顔していたような気がするし……」

不安げな表情になるフォル。そして「すみません、サイアムさん。ちょっと……俺、行ってきます」と言って、戦斧を担ぎなおした。

サイアムは一瞬思案顔になるが、ヴァンが一人にいるほうがこの状況ではまずいと思ったのだろう。同行を許可した。

「……分かった、行ってきた。どこに敵がいるか、分かん状況だしな。むしろ無理やり引っ張ってくるぐらいでもいいぞ」

「あはは……分かりました。それじゃ、行ってきます！」

駆け出すフォル。魔導を使わずとも十分な速さで、闇の中を走っていた。

残ったサイアムは、連れている黒尽くめに目をやる。

「さて、俺はどうしていいようか……ん？」

これからどうするかと考えた矢先、黒尽くめに魔導の文字列が浮かび始めた。

「な、お前！？」

肉体強化の魔導かと思い、縛り上げているにも関わらず距離をとって武器を構えた。

だが、数瞬の時間が過ぎても何も仕掛けてくる気配がなかった。どういふことかといぶかしみ、展開されている術式を見る。

「……これは……まさか！？」

何の魔導を発動させるのかを看破したサイアムは顔を青くする。

そして周囲の仲間に「おい、逃げる！ こいつがしようとしてるのは……！」と呼びかけて……

爆炎が、彼の視界を埋め尽くした。

その男は、キルヒア傭兵団の陣地から少し離れた草むらに身を隠していた。

夜の暗さと身につけている黒尽くめのローブ、自身にかけた隠式の術式と、姿から気配まで消し去った彼は、予想外の展開に舌打ちをしていた。

彼が担当する傭兵団の反応が、予想を遥かに超えて早かったのだ。そのせいで多くの兵を無為に失うことになってしまった。

それもこれもあの男を逃したせいだと、男は思う。

陣地を襲う前に一人にいる剣士を見かけたのだ。酒も入っているようだし、不意を打てると思い戦いを挑んだのだが、どういうわけか不意打ちを察知され、逃げられてしまった。一人逃げたところで

とその時は思っていたのだが、まさかそれがこんな結果に繋がるうとは。

（彼女にも、この力の素晴らしさを分からせてやらなければならないのに……）

苛立ちが増す。一応最後に残しておいた仕掛けで、最低限のノルマ達成できた。しかし腹の虫が収まる気配はない。もうじき撤収の指示も来るだろうが、どうにかこのむしゃくしゃを発散させる方法はないものか……

「……ん!?」

隠式と並行して周囲に巡らしていた読解が、近づいてくる何かを知覚する。まさか、バレたのかと焦りが胸中に生まれる。思わず彼は立ち上がり――

「――そこか!」

鬼気迫る声と、己に迫る白刃を捉えた。

感覚に導かれるまま走る、走る、走り続ける。走り抜けた先に、この襲撃の元凶がいると、分かっているように。

事実、このときヴァンは、何も迷いがなかった。ただ確信のみがあったのだ。

やがて一つの草むらを前にして、そこにいると感覚が告げる。音もなく近づき、不意に立ち上がった魔導士らしき男に向かい、剣を振りかざした。

「くそ!」

悪態をつき、転がってよける男。ローブを纏っているというのに、随分と機敏な動きだった。

だが男を逆襲する襲撃者、ヴァンは逃すつもりなど更々なかった。一歩踏み込み、剣を振り下ろそうとする。しかしそれは適わなかった。

転がったときと同様の機敏な動きですぐに立ち上がり、逆に踏み

込まれて蹴りを放ってきたのだ。

「ぐー!？」

とつさに腹に力を入れ、なんとか衝撃を和らげる。だが、その衝撃は生半可なものではなかった。後ろに吹き飛ばされ、鈍痛に呻きを漏らす。

追撃されるかと思い、剣を構えなおすが、目の前の男は動かなかった。代わりに、呪詛のように低い声が発せられる。

「貴様……見覚えがあるぞ……そうか、あの時逃げた剣士か」

「逃げた……?」

一瞬言葉の意味が分からなかったが、まさかと思い直す。初めに皆に知らせるために、襲撃者たちから逃げたことがあったが、そのことを言っているのか？　だがなぜそのことを知っている？

ヴァンの考えをよそに、男は獰猛な笑みを浮かべてみせる。

「丁度いい……どうやってここを知ったのかは分からんが、貴様に夜襲を邪魔されてむしゃくしゃしていたんだ。力試しもこみで、徹底的にいたぶってやる」

「……あいつらと繋がっているのは確かなようだ。なら、こちらとしても向ってきてくれるのは好都合だ」

言質を得て、剣を握る手に力をこめる。

正直、未だ敵の正体が判然としない不気味さはあった。だが、それを差し引いたとしてもこの襲撃を許せないと思う自分がいることも確かだった。その主犯が目の前にいる男なのだとしたら、見逃すなど持っての他だ。

じりじりと間合いをつめ、踏み込みの機会を計る。

先に仕掛けた際、男は魔導士とは思えないほどの力を見せたため、近づくのも慎重にならざるを得ない。だが

「来ないつもりか？　なら……こちらからいくぞ!」

不意に男が叫び、同時に悪寒が背筋を走る。考える間もない。すぐに駆け出した。

雷撃が先程までヴァンがいた場所を焼く。草が焼け、焦げ臭い匂い

があたりに充満する。

しかし、それに構っている暇はなかった。ともかく動き回って、照準を固定させないようにしなければならぬ。

（ツ……魔導の展開が速い……！）

先のレマン軍の魔導士もかなりの腕だったが、目の前の男はそれ以上だ。しかも隠式も絡めての展開もあり、超直感によってなんとか感知できるものの、それがなければ隠された術式に飛び込み、骸になっていることだろう。

（それにしても、ここまでの速さとは……）

実戦慣れして精神の動揺を抑えられれば、このような近接戦に置いても魔導を発動させることは出来る。あのレマン軍の魔導士もやっていたことだ。だが、そうであったとしても速い。展開している魔導の数、範囲も平均的な魔導士を遥かに超えており、近寄れない。「どうしたどうした！ 近寄れもしいか！」

挑発をかけてくる魔導士。それを黙殺し、何とか隙を探る。幾ら魔導の展開、範囲速度が高くとも、何かしらの隙は生まれるものだ。それに賭ける！

動き回って、機会を待つ。男が得意とするのは電撃魔導らしく、張り巡らされた雷がかすって皮膚を浅く焼いた。

だが、電撃を避けている中でようやく隙、魔導が張り巡らされた空間の中での男に通じる一本の道を見つける。躊躇わずその道を通り、男に向うヴァン。

「何！？」

自らの魔導を潜り抜けられるとは思ってなかったのか、驚きの声を上げる。それに構わず、ヴァンは男に切りかかる。だが

「な……！？」

今度は、ヴァンが驚きの声を上げる番だった。なんと男は切りかかってきた剣をわしづかみにして見せたのだ。

血が男の手から噴出し、地面に落ちていく。明らかに肉に深く食い込んでいる感触があるのに、力はまったく衰えず、むしろ凄まじ

い力で押さえられてまったく動かせない。

魔導士とは思えないほど肉体が鍛えられていると思っていたが、しかしこれは……

（どう考えても、異常だぞ……！？）

動かせない剣と、流れ落ちる血の量を見て驚愕するヴァン。男が嘲った。

「惜しかったな。今の一撃なら、普通の人間は戦えなくなってるだろうよ。……普通の人間ならな！！」

ヴァンにとっては意味の分からない言葉を吐いて、男は更に力を込める。強引に剣をヴァンの手から引き抜き、放り捨ててから殴りかかってきた。

「く……！！」

どうにか避ける。しかしその後も、容赦なく男の追撃は続いた。避けているうちにヴァンは気づくが、男の格闘は型も何もなく、ただ反射神経と肉体の強度を使っただけの、技術的には粗末なものだ。しかし、そのどれもが恐ろしい速度と威力を秘めている。

技量で勝っているのが幸いしてどうにか避けられるが、それでも防戦一方になった。

（どうにか剣を取らないと……！）

放られた方向に目をやるも、夜の闇が災いして視界が利かない。どこに剣が落ちているのか分からなかった。これでは探している間にやられてしまう。

だが、注意をそちらに向けたのが命取りだった。拳の一撃が、肩に入ってしまう。

激痛に思わず肩を押さえる。だが、それは押さえた腕のほうの守りが薄くなることでもあった。すかさず蹴りが跳び、守りの無くなった胴に入る。

鎧も身につけてこなかったことも災いして、ヴァンは意識が飛びかけるほどの衝撃を喰らう羽目になった。

したたかに地面に打ち据えられる。激痛をこらえて何とか立とう

とするが、眼前には既に間合いを詰めて拳を振りかぶる男の姿が……

「兄さん!!」

声が彼等に割って入った。細い人影がヴァンの前に立ち、男の拳を受け止める。

「フォル!？」

「兄さんに……何してるんだ、お前ええええ!!」

普段はおとなしいといっていい性格の彼が怒声を発し、肉体強化の魔導さえ使って、拳を受け止めた手を突き出した。男の方は突然の乱入者に驚いたのか、明らかに力を入れ損なっている。

押し切り、突き飛ばして距離を離れたフォルは、背に担いでいた斧を構えて男に踊りかかった。

「な、めるなあ!!」

男の叫び、それと共に腕に紫電が巻かれる。属性付与魔導!

「まずい! フォル、踏み込みすぎるな!!」

注意を呼びかけるも、怒りに我を忘れたフォルはそのまま切りかかる。

だが強化されたフォルの動きはヴァンの予測を超え、雷を纏う腕を動かす暇を与えない。振り下ろされる一撃は、もしやもすれば男を切り捨てるかとも思えた。

鈍い、なんともいえぬ音が鳴る。斧は完全に男に入り、とっさに跳ね上げた男の片腕を切り落として、肩にまで食い込んでいた。

「がああああああああ!! お、まえらああああああ!!」
激痛に咆哮を上げながら、男はそれでも怯まない。肩に斧を食い込ませたまま、もう一方の腕を伸ばしてフォルをつかんでいた。聞き慣れてしまったバシンという音が、その動作に続く。

ぐらりとフォルが傾き、地面に崩れ落ちる。

「死ね! 死んでしまえ、このクズが!!」

無防備になったフォルを、怒りに任せて男は何度も何度も蹴りつける。

しかし突然目の前に現れた影に、男ははっと顔を上げる。慌てて

下がろうとするも、もう遅い。

「——おおおおおおおおお！！」

立ち直ったヴァンが剣を拾い、男は突進してくるのをみているしかなかった。

男の胸に剣が突き立つ。開いた傷は背中まで貫通し、夥しい量の血を噴出させた。

これedyouやく終わる。ヴァンがそう思っのは無理もない傷だった。

「離れ、ろおお！！」

「！？」

だが、男は倒れなかった。それどころか残った腕を滅茶苦茶に振り回し、ヴァンを突き飛ばしてくる。

ヴァンとしては冗談ではなかった。腕や肩、そして胸に開いた傷そこから流れる血は、どう見ても致死量を超えている。それなのに何故、こいつは倒れない！？

男は突き立てられた剣を勢いよく抜き、深く被ったフードの中から、怒りと殺意に満ちた視線をヴァンたちに向けてくる。

「くそ、くそ！！ 貴様ら、このオルクスに向ってふざけた真似を！！」

男、オルクスというらしい、が喚きたて、魔力を噴出し始める。その量は尋常ではなく、魔導士一小隊（四、五人）分にすら相当していた。

（まだ力を隠していたのか！？ くそ……！！）

倒れているフォルに一瞬目をやり、すぐさまオルクスに戻る。

フォルを連れて逃げようにも、担いだりすればその分動きを遅くしてしまう。そうなればただの的になるだけだ。生き残るには、ここでオルクスを倒すしかない。

魔力を術式に転換し、文字列を浮かび上がらせ始めたオルクスをヴァンは睨んで剣を構え、倒れたフォルを守るために魔導への干渉を始めた。

「もう許さん、言い付けなど知ったことか！　ここでお前らを――！？」

途中でオルクスの言葉が、突然止まった。怒りに満ちていた顔に、明らかな動揺が滲む。

「――撤収！？　いえ、秘匿しなければならないのは無論ですが、しかしそれでは俺の……ヒツ！？　わ、分かりました！　申し訳ありません！！」

宙に向って誰かと話している様子だったオルクスが、恐怖に上ずった声を出した。

放出していた魔力を消し、一瞬射殺さんばかりにヴァンたちを睨みつけてから、きびすを返して走り出す。

追おうかと思っただが、フォルのこととオルクスの身体能力の高さを思い出し、断念する。自分では到底追いつけまい。

取り逃がした悔しさと、生き残れたことに対する安堵が半々になつて、ヴァンの心に起こった。

（……しかし、奴は一体何者だ……？）

どう考えても致死量と思えるほどの血を流しながら、なお生きているオルクスという男。

異常な魔力、肉体を持ち、まるで人間という枠から外れてしまっているかのような……そして、あの不気味な襲撃者たちも……

そこまで考えて、後ろからおーいという声がすることに気付く。

見れば、焦りを浮かべてこちらに走ってくる団員の姿があった。

その表情に嫌な予感を覚えつつ、ヴァンは得体の知れない襲撃者達に漠然とした不安を抱いていた。

「……随分と好きにやられたものだ」

夜襲があった時間から幾分か時間が過ぎ、ドライゼムは自らの天幕の中で、各部隊からまとめられた被害報告を読んでいた。

どの部隊、傭兵も含めてだが、それなりの被害を受けている。そしてどの部隊も口を揃えて読解で接近が感知できなかったと言う。また、襲撃者の何人かを捕らえたものの、彼等はあらかじめ仕込んであったと思われる魔導を用いて全員自殺したという。

自らを燃やす、暴爆を自らの周りに展開して周囲を吹き飛ばすなど、姿かたちも残さぬほどの徹底振りという話だった。

（報告の際、どの顔も青くなっていたのは、見ていて面白くもあつたがな……）

くつくつと愉快そうに笑う。お咎めなしとして彼等を解放した際の間抜けな表情も、十分笑いが取れるだろう。まあ、そんな温情をかけるのも今回限りだが。

椅子に座っていたドライゼムが立ち上がり、振り返る。そこには黒尽くめ、キルヒア傭兵団らを襲撃したのとまるで同じ、が立っていた。

自らの軍を襲った敵に、ドライゼムは歩み寄っていく。その途中、愛用の戦槌を手にして――横に、払った。

吹き飛ばされる黒尽くめ。天幕の床に打ち据えられて四肢がぐにやりと折れ曲がり、血があたりに散乱する。鉄くさい匂いが、当たりに充満した。

「フン、どちらが悪趣味だというのだ。凝るにも程があるだろうが」しかしそれらを見てもドライゼムは平然としており、むしろ呆れたように言う。

黒尽くめは相変わらず血を流している――いや、違う。赤い液体で匂いもそっくりだが、流れているのはまったく別のものだった。

折れ曲がった四肢もそうだ。皮膚の触感など、その殆どが人間らしく作っているが、よく見ればつぎはぎがあちこちにあり、服と闇にそれが隠されていた。

そう、この黒尽くめは作り物……人間に限りなく似せて作られた、人形だった。

「しかし、こちらとしてはそう表立っては動けぬ身……表で動く身

代わりもまた、必要であつたのです」

天幕にドライゼム以外の、別の人間の声が響く。いつの間にか天幕の壁際に、数人のロープを纏つた人影が立っていた。

「その点、これらは便利です。表立って動く身代わりとして最適なのですから。ああ、ご安心ください。今回の件に限り、これらの人形兵を使いましたので。いずれは戦闘用に特化した、新しいものもご覧に入れますよう」

黒尽くめを人形兵と呼んで、彼等の一人が恭しく頭を垂れる。

ドライゼムはそれを見ながら、人形兵についてなされた説明を思い出していた。

曰く、人とはほぼ同じ動作ができ、魔導によつて自在に操ることが出来る。また、これらが持つ視界を術者は共有でき、隊を組ませた際に真価は発揮され、複合視界と呼べる全方位への目を持つことができる……

黒尽くめの動作が遅かつたのは、主に表で動く際の偽装に使う型であつたためらしい。事実、報告に來た誰もが、これを人間だと思つていたことから、完成度の高さが伺えた。

「操る際の隠式の展開も完璧、人形兵の有用性も十分。そして我が軍、傭兵団のどの魔導士にも、術者の位置を知られなかつた……もっとも、例外が一つあつたようだが」

皮肉げに言う。彼等は揃つて「申し訳ありません」と言い、頭を下げて謝罪した。

「まあ、それはいいだろう。もとよりアイツに関しては、何かあるのではないかと俺も思つていた」

「……無礼を承知で申し上げますが……その男、我等に任せてはいただけませぬでしょうか」

フードの奥にある目をギリリと光らせ、人影の一人が言う。

「我らの面目が立ちませぬ。それに何故に我らを、見つかつたのは新米とはいえ、察知されたのかを知らねば気が済まぬのです」

「……何だ。まだ協力するとも言つておらぬのに、厚かましく物を

言うではないか」

口には不機嫌そうに、しかし顔は楽しげに言うドライゼム。人影も「これはこれは……度重なる失礼、お許しください」と、笑みを滲ませて言葉を返した。

つまり、そういうことだった。

ドライゼム達の間には、既に関係が出来上がっていたのだ。今回の夜襲でどれだけ魔導の、それに関連する技術を彼等は有するのかという、ドライゼムが与えた試験を通ったことで。

与えた被害も計算されつくされている。隠式によるほぼ完璧な奇襲であるにもかかわらず、全ての軍が一割程度の損害で済まされていた。案外被害は少なかったと参謀はいぶかしんでいたが、当然だ。これはドライゼムの自作自演のようなものだから。

ドライゼムは見事に期待に応えて見せた彼等に満足気な表情を、しかしヴァンのことについては苦笑を浮かべる。「俺としてもあいつには期待をかけているんでな」と言つて。

「それを実行するのは、もう少し後にしてもらう。……ではまず、ついさつき失った兵の分の働きはしてもらおうか」

「お任せください。この先の街、エタルドには我らの拠点もあります。陛下が我等に協力してくだされば、その程度の損失などすぐに埋めてご覧に入れましょう」

「ああ、頼んだぞ。——“破戒者”たちよ」

人影らは、再度頭を垂れた。

断章 光へ

「ハア……ハア……くっ……！」

息が上がるのを堪え、少女が駆ける。石造りの床を蹴って、微かな明かりの灯る闇をひた走る。

彼女の後ろから、二つの足音が聞こえてくる。追手！？

（気付かれたっていうの……！？）

念入りに準備し、その上で逃げ出したつもりだったが、見通しが甘かったらしい。疲れで崩れそうになる我が身に鞭を打ち、必死に足を上げる。

連れ戻されれば、その時点で終わりだ。奴らの好きにさせるわけにはいかない、その思いが、少女を突き動かしていた。

彼女はレマン公国の魔導士だった。エタルドという街のギルドに勤めていた彼女は、エルヴァ軍が攻めてきたという報が街中に広められ、間近に迫りつつある戦いの匂いを感じつつも、普段どおりの生活を送っていた。……だが……

（忘れはしない……あいつらがやってきた、あの時を……）

突然だった。ギルドに数人の男が乗り込んでくるや否や意識を失われ、意識を取り戻してみれば暗い洞窟の中。状況が分からず混乱する自分に対し、自分達をさらったという魔導士が現れ、そいつに連れられて見せられた光景は……凄惨極まりないものだった。

寝台に縛り付けられた多くの人間が苦しげなうめきを上げ、ときには絶叫が響き渡る。魔導士によって体を弄くり回され、自意識が壊されていく人々が、そこにいた。

助けて、もういやだ、やめろ、俺を、私を、壊さないでくれ。

苦痛に塗れた人々の声は、途切れることがない。だがそんな非道を行う外道どもは、顔に喜悦の表情を浮かべて言うのだ。全ては魔導の発展のためなのだ。本当は、自分達の欲を満たすことしか考えていないくせに。

嘘にもなっていない、空虚なだけの言葉を吐く彼等を、しかし彼女は睨むしかできなかった。

破戒者。自分達をさらった魔導士たちは、自らをそう呼んだ。圧倒的な魔力と強靱な肉体を持つ彼等は少女達に、自分達の仲間になれといってきた。自分達には才能がある。世界の戒律を解き明かす、これに全てを捧げて邁進する気質があると言って。

冗談ではなかった。体を弄繰り回す、意識を壊してしまう魔導も、全ては禁忌として封印された術式だ。確かに少女は魔導の研究に自らを捧げていたが、外道に堕ちるつもりは更々なかった。だが……「俺は、なるぞ……破戒者になってやる！」

目を疑った。幼い頃から一緒にいて、良き仲間と思ってきた少年オルクスの突然の変節……共に連れ去られ、囚われた中でも自分を励ましてくれていたのに……

何故と問うても、彼は黙っているだけ。何も返してくれない。ただ、その目から滲み出る、自分に対しての憎しみとも、羨望ともつかない交じり合った感情の色だけが変節の原因は自分である事を物語っていた。

かくしてオルクスは破戒者になった。破戒者となってからも時折自分に会いにきてはくれるものの、そこにいるのはかつてのオルクスではない。元々優秀であるが故の尊大さはあったが、それをより拡大したかのような印象を受けた。話すことも一方的で、自分がどれだけ強くなったのかとか、自分のことばかりだった。

「いずれ俺は奴らの頂点に立ってやる。見ていろ、お前の陰に隠れてばかりいた俺じゃもうないんだ！」

言い捨ててから、高笑いを上げて去っていくのもいつも通り。様々な感情をその傲慢な態度に滲ませつつも、オルクスなりに自分を氣遣い、誘っているのではないかという気はしていた。だが、それに乗るつもりは彼女にはない。

このままでいればいずれ見限られ、実験台にされるだけなのも分かっただけだが、屈するわけにはいかない。

逃げるチャンスは来る。そう信じるこそが、彼女が今できる戦いだった。何としても、奴等の存在を外にしらせなければ……！ 幾らかの時間が過ぎた。日の光の差さない暗い一室でただひたすらに術式を編み、扉に刻み付けられている術式の解除に没頭する。見回りに来る者達にも気付かれないように少しずつ、細工も施しながら解除していった。

やがて変化が起きた。人の気配がある時期から突然増えたのだ。それに比例して、増え続ける呻きと叫び。

何が起きているのか、牢に閉じ込められているこの身には分からない。しかし、この変化はチャンスでもあった。人手を見回りに回す余裕がないのか、頻度が明らかに減った。刻まれた術式の確認も疎かになる。

少女は決断した。

一息に解除の作業を進め、次いで扉の鍵も外す。ゆっくりと開いた扉に音を立てないように注意して近寄り、見回りが来ていないのを確かめてから、彼女は駆け出した。

そして、現在。

悲惨な実験を見せられる傍ら、ここの構図を頭に叩き込んできた甲斐があった。人が集まっていそうな部屋や、見張りの位置。それらをあらかじめ知れたのは僥倖と言っている。人の流れを見て、出口に繋がっていきそうな場所への見当もついている。

閉じ込められていた間、魔導の解除と並行して頭の中で作り上げた脱出ルートを辿っていた。

通路の先に薄い光が見える。もう少しで出口だということまで、少女は辿り着いていた。だがそこで、この後ろからの足音だ。

息が上がり、足が疲労でもつれる。それでも彼女は必死に光に手を伸ばす。

闇を切り裂く光は、すぐそこにあった。

第四章 蠕動する“闇”

「おい団長、この辛気臭い空気なんかならんか」

「何を言ってるんだよ、後見人。というか、そんなこと言ってる暇があつたら手を動かせ」

訳のわからない愚痴を言うレグスを、ヴァンがいつものようにたしなめる。その間もヴァンはテーブルに所狭しと置かれている書類に目を通し、手を動かしていた。一方レグスは、肘をテーブルにつけて頬杖をかいてぼやいている。

あの戦から既に一ヶ月が過ぎており、現在ヴァンたちはレマン公国にある街の一つ、エタルドに駐留していた。

街外れにある貴族用と思われる広い敷地を持った家を徴収し、中にある一つの部屋の中でヴァンとレグスはテーブルを挟んで書類仕事をしていた。時折外から団員達の掛け声や、女子供の騒ぐ声も聞こえてきて、暗い一室に籠っているわが身と比べて少し恨めしく思ってしまうのだが。

ヴァンは様々な事案が書かれた書類に目を通し、かつサインが必要なものはペンを走らせて署名していく。かなりの速さで片付けているのだが、しかしなかなか書類の数は減らない。新任直後で連絡を新たに取らなければならないところも多いとはいえ、ここまで仕事が増えるとは思っても見なかった。

忙しなく動いているヴァンを尻目に、レグスはその内の一枚をとってしげしげと眺める。

「あ、勝手に取るな！ 次それを片付けようとしてたのに」
「すぐに返すから心配するな。それより」

レグスはとった紙に目を通し、一つ頷く。彼がもっているのは入団希望者についての申請書だ。かつて自分が助けられたように、行き場を失った様々な人間を雇うことがそこに記されていた。

「かなり多く採るじゃないか。これからラムサス將軍の部隊の人員

も加わるというのに」

「……今更な事をいうなよ。義父さんがいつもやっていたじゃないか」

というより、承知の上で聞いてきているだろう。そう続ける。言外に、キルヒアの遺志に反していないかという監視もあるんだろ？ というニュアンスを滲ませて。

レグスはにやりと笑った。

「まあな。これも後見人の務めと言うわけだ。……まあ、そうでなくとも多少あの襲撃で減っちゃったからな」

一変、沈鬱な顔になる。だがレグスの気持ちは、ヴァンは痛いほど分かる。いや、むしろヴァンの方がその気持ちは強いかもしれない。

あの夜、黒尽くめの襲撃と、その後の自爆で幾人かの死者がでてしまっていた。

事前に様々な事態に対応できるように部隊を編成、配置しておいたことと、サイアムも巻き込まれたがどうか軽傷で済み、有能な指揮官である彼が怪我を押して事態の鎮静に奔走してくれたおかげもあって、自爆の被害は最小限ですんだ。

だが、それでも被害を食い止められなかったという事実は重い。それに死んではいなくとも腕や脚を欠損してしまい、戦えなくなってしまう者もいる。彼等の代わりとなる者を探さなくてはならない事情もあった。

あのオルクスという男が黒尽くめたちと何かしらの関わりを持っていた事は、事実だろう。しかし深追いせず、陣地に留まっていれば、団長として被害を拡大させないために動けたのではないか……そう思うときがある。

（……で、またグダグダと考えるのか？ 何回目だ、これを繰り返しているのは……）

相変わらず過去を振り返りすぎる自分に呆れ、反省はしても引きずるのはよくないというのにと自戒する。……だが、この場合……

じろりとレグスを見る。視線に気付いたのか、レグスは首をかしげた。

「どうした？　なんでそんな目でわたしを見る」

「……別に。誰かさんが余計なことしてくれたせいで、余計なことを考えたなんて思ってたないさ」

皮肉の一言でも言ってる。

「大体なんだ。手伝おうとか言っておいて、さっきから口ばかりしか動かしていないだろう。何がしたいんだ、アンタ」

「だから、街が辛気臭いったらないんだよ。一応気がまぎれるかと思ってる書類仕事なんて手伝ってみたんだが、それでも何にも変わらん」

「だからって俺に話を振るなよ。あんたが勝手に手伝うって言うてきて、勝手に落胆してるんじゃないか。それに俺よりこういった書類仕事、慣れてるはずだろ。何でそんなに手が動いてないんだ」

「そりゃあ俺ばっかりやったらお前が経験積みめんだろ。若いもんが頑張らんでどうする」

「しれつと言うなこの面倒くさがり屋め。結局のところ俺の邪魔をしてるだけじゃないか」

「おお、そうとも言えるな。いやあ気づかなかった。悪かったな」

白々しいにも程がある。はあ、とヴァンはため息をついて、この際だから盛大に文句を言ってるのかと思っただけだった。

急におちやらけていたレグスの様子が変わり、瞳に鋭い光が宿る。

「ま、お前さんをからかうのはこれくらいでいいだろう。……なあ、

今までわしが言っていたこと、まさかとは思うが冗談だけと思っておらんよな？」

「……空気が辛気臭い、ってことか？　まあそう感じないこともないが……」

しかし、それはある意味で当然のようにも思える。自分達は侵略者だ。ドライゼムの悪名も考慮すれば、必然とすらもいえるだろう。そして現に、ドライゼムは彼等に対して非道な行いをしている……

「それも確かにあるがな。だがヴァン、わしが言いたいのはそのうことだけじゃない。優れた直感を持つお前なら、分かるはずだぞ」

「……」

問い詰められ、押し黙るヴァン。

……そうだ。確かにレグスの言うとおり、辛気臭いという空気の外に何か別の、違和感のようなものを感じるのは事実だった。

しかもこの違和感は、あの夜の襲撃の際に感じたのと同じ……（そこから考えられるのは、一つだ。……あいつらが、この街にいる）

そうとしか思えない。その思いは、確信としてヴァンの胸にあった。

だが、いるとしたら何故仕掛けてこない？ 奴らが何者であれ、エルヴァ軍の敵であるならば仕掛けてきてもおかしくないというのに。エルヴァ軍上層部に話すという手もあったが、それはそれで説明するのに自分の直感について話さなければならぬ問題がある。ドライゼムもこの街に逗留していることだし、言えばどうにかなるのかもしれないが、できることなら彼には近づきたくないというのがヴァンの本音だった。あの暴虐の化身であるかのような男……心の服従を迫る彼の圧力は、正直身に堪える。

（それにしても……）

「まさかレグス。あんたも、もしかしてあいつらがここにいて……」

「ああ、そう思う」

「なんでそう思うんだ？」

「長年戦場に出ていた人間の、勘というもんだろう。何か妙な雰囲気や空気を感じちまうのさ。ま、あの時は戦いの後ということで油断していて、お前に迷惑をかけちゃったがな」

それと、とレグスは続ける。

「ヴァン、お前この街についてから妙な顔しているときがあるだろう。わしが入ってくる前もそうだ」

「見られてたのか……」

しまったと、渋面になるヴァン。常時違和感を感じ続けると言うのは、頭に異物を埋め込まれているような感覚がして中々に辛い。時折食いしばるような顔になることもある。

団員達の前では余計な不安を抱かせないよう、出さないようにしていたはずなのだが、レグスがこの部屋に入ってくるときに見られたいらしい。

「長年の付き合い、か？ 俺の様子がおかしいって感じたのは……」

「そういうことだ」

「そう、か……心配させて、すまない」

頭をさげて謝り、そして心の中で感謝する。普段めんどくさがり屋だというのに、こういう不安になったときはいち早く察知してくれて、助けてくれる。それがレグスという男だった。

もしかしたら冒頭の言い合いも、気を紛らわせるためのものなのかもしれない。ああいう言い合いは、既に癖のようになっていて気を使わずに言葉を出せるのだから。……多少イラついたときもあったが。

（飄々としすぎてるんだよ、まったく。後、めんどくさがり屋なものな…… 普段の仕事はあまり助けたくないのはどうかと思うし）
まあ長所と短所で半々だと考えておくか、とヴァンは思うのだった。

「後、お前の直感と照らし合わせてわしの勘が正しいのかどうかも確かめたかったからな。それで思い切って、ここに来てみたんだが

……案の定だ」

「……」

「正規軍に編入されて忙しかったというのもあるが、この件を放り出すわけにもいかん。隠れている相手に後ろから切られるなど、願い下げだ。そこで提案があるんだが……」

「……聞かせてくれ」

ヴァンは一旦書類から手を離し、レグスと相対した。そして、レ

グスが言ったのは……

「お前、今から外に遊びに行つて来い」

「は？」

気の抜けた声が、ヴァンの口から漏れた。

既に昼下がりの時間となっており、太陽は空から地平に降りつつあった。

そんな気だるい午後の中、石畳の上をヴァンは歩いていた。レグスに言われた通り、遊びに歩いているのである。もっとも腰には剣を挿しており、征服者の一員として狙われる危険についての備えは最低限であつたが。

書類仕事ばかりこの一ヶ月しており、ろくに街並みを見る機会もなかったため、目新しい煉瓦作りの家々は眺めているだけでも楽しくはあつた。しかし

「……」

黙つてヴァンの後を付いてくるイルシュがどうにも気になり、楽しさも半減してしまう。

「あはは……ね、ねえ兄さん。次はどこに行こうか！」

横に歩くフォルもどうすればいいのかといった様子で額に汗を流している。

彼はあの夜襲の後、すぐに回復していた。

今はこうしてヴァンを近くで守る役目を与えられ、こんな空気の中でも無理にはしゃいでみせるあたり、気が利くと評される通りの人間だと改めて納得するが……

「イルシュさんも、何か希望があつたら言つてよ！ この一ヶ月で、大抵の場所は分かつたからさ、案内できると思つんだ」

「……ええ、ありがとう」

固まつた表情のまま、無感情に頷き

「でも私はいい。フォルやヴァンの好きにして。私は、それについていだけだから」

関心なしと言うも同然の言葉を言って、また黙ってしまった。そして依然、目はヴァンに向ったままである。

フォルの努力はまるで報われず、むしろイルシュの不気味さが色濃く感じられてしまい、かえって空気が淀んだような気がした。

頭の違和感に加え、この空気。レグスに恨み言の一つでも言いたい気分になってくる。

（……そりゃあ、いつまでもこのままがいいなんて思っていないが、それにしたって……）

言い訳がましい言葉が、頭の中で連ねられる。しかし、彼の提案に同意したのは自分であり、また、必要でもあると感じているため連ねれば連ねるほど、自分が負けたような気がしてきた。

レグスに遊びにいつてこいといわれたとき、流石にふざけてるのかと怒鳴ったが、彼が言うにはヴァンの直感を使って、奴らの潜んでいる場所を探らせようという話らしい。また、書類仕事は自分がやっておくなどと殊勝なことまでそのとき言っており、ヴァンを大いに驚かせた。

（だが、逆に言えばレグスが現状を重く見ていると言う証拠だ……）
ちらりと、ヴァンは後ろを振り返る。まばらに街路を行く人々にまぎれて、騎士団の人間が何人か、つかず離れずの距離を保って彼等の後を護衛兼連絡役として付いてきている。

ただ、時折見える彼等の表情から、近くにいる必要が無くてよかったと思っているのは丸分かりだったが。

「ああ、それとだ。ついでにイルシュとのイザコザもとっとと解決してこい」

そう言って、レグスは話のついでにイルシュとの関係を持ち出してきたのである。そこで、ヴァンは言葉に詰っていた。

あの夜以降、どうもイルシュとは折り合いが悪くなっていた。そう険悪な雰囲気になるわけでもないのだが、どうにも話しづらいの

だ。しかもイルシュの方は時折じつとヴァンを見て、なにやら考え込んでいるときがあるという。

サイアムからも黙ってみている彼女が不気味だから、早くなんとかしろと言われている。

関係を元に戻す絶好の機会と考えれば、今の状態は絶好の機会ではあるのだが……

（俺は、まだ……）

特別な関係になることに、抵抗があった。どうしても義父のことが思い出されてしまうのだ。憧れて、形だけでも父子になって、より絆を深めて……そして、喪失した。あのときに感じた痛みは、未だにどうにもならない。

ちらと、ヴァンはイルシュを見る。彼女はまだヴァンを見ていたのだが、彼の視線に気付くと目をそらした。さっきからずっとこの調子である。

ともかく、何か話をしなければまずいか。そう思ったヴァンは、彼女に声を掛けようとする。しかし運が悪いのか、それとも察知したのか、その直前で「ヴァン」と彼女から声を掛けてきた。思わず、体を硬直させる。

「！？ あ、ああ。なんだ？」

「単純に大通りだけを進んでいるわけにもいきません。次の十字路で曲がりましょう。街を回る範囲が広がります」

「え？ あ……わ、分かった。じゃあ」

「それと、あまり気を散らさないで下さい。私には奴らの感知はできませんし、あなたが頼りなんです。どうか集中を切らさないで下さい」

静かに、しかし有無を言わさぬ力強さを持って言い、少し先を歩くようにしてしまう。

なんというか、戦場に出た際の凜々しさが、より伶俐になったような印象だ。

何かしら進展があるかと思ったフォルはがっくりと肩を落とし、

眉を曲げて勘弁してくれといわんばかりに情けない顔になる。ヴァンはというと、自業自得とは言え何でこんなことと思うのだった。まったく、情けない。

(……まあ、よくもないが、いい。今はイルシュの言うとおり、奴らを感じることに意識を集中しよう)

今は話しかけられる状態ではなさそうだとヴァンは考え、彼女の言うとおり集中する。

ヴァンを苦しめている違和感が、より強くなるのを感じた。集中していなくても勝手に感じてしまうのだが、集中するとこの通りだ。(ツ……一体何なんだ、この感覚……それに違和感っていうのは分かるが、何にそう感じているのかが自分でも分からない……)

洪面を作りつつも、以前オルクスを見つけたような、確信とすらいえるほどの感覚がないか自分の中に問いかけてみる。しかし、今のところそんな気配はまるでない。

一体なんなのかと、思い通りにいかない自分の感覚に腹を立てつつ、ならその違和感が強い場所を見つけてみようとする。しかし集中していればいるほど、気分が悪くなっていく。

一旦集中をとき、息をつく。フォルが心配そうな顔をしていたが、それに無理に笑って大丈夫だといってやった。

(自由に動き回れるときに、やっておかないとまずいだろうしな……)

これから正規軍として動く以上、傭兵時代のような、契約さえすませばいいどうしてもいいというわけにはいなくなる。後の憂いを断つ意味でも、奴らは見つけておきたかった。

「……止まってください」

ふと、先を歩いていたイルシュが横に腕を伸ばしてヴァンとフォルを止める。何事かとイルシュの先を見ると

「やめろ！ 俺は何もやってないのに、なんでこんな……!!」

「うるさい、さっさと歩け」

「うお！ く、くそお……!!」

エルヴァ兵に連れていかれる、エタルドの住民の姿があった。しただかに殴られたのか、顔には青あざが出来ている。それを遠まわしに見ている群衆は、一様に敵意と憎しみをエルヴァ兵にむけていた。

嫌な場面を見た、ヴァンは顔をしかめた。そしてイルシュに感謝する。今エルヴァの人間である自分達が出て行けば、騒ぎが大きくなっていたかもしれない。

「いつも通りといえばいつも通りなんですけど、慣れないですね……」

フォルも顔をしかめて呟く。イルシュは鉄面皮を維持していたが、しかし雰囲気が一程よりも硬くなっている。

エルヴァに服従しなかった国の末路、それがこれだ。

エルヴァが必要と思えば、本人の意思など関係なしに連れ去り、労働力としていた。一応住居等、生活に関する権利はある。しかしエルヴァが望めば、即座に徴収されてしまったため、ほぼ奴隷と同義だ。

「……ですが、ここ最近は何にひどいですね。エタルドだけでも、人が根こそぎ連れ去られたという地域があると聞きました」

暗い声でイルシュが言う。その話はヴァンも聞いたことがあった。（だが、何か人手を必要とすることなど、今のエルヴァはやっていたか……？）

それが疑問である。人手が必要と言われてすぐに思いつくのは、何かしらの工事だろう。代表的なのは、要塞や街道の建設などだ。だが、そういった話は最近聞いた事がない。

また、あまり人を減らしすぎれば地域に混乱が起こる。奴隷として扱うのを認めてはいるものの、その事態を予想できないほどドライゼムは無能ではないはずだ。では、何を目的にしているのかと言われると見当が付かないのだが……

ヴァンはエタルドを治める者が住むという領主館を見遣る。小高い丘の上に建てられたあの館に、ドライゼムはいる。軍の進軍もこ

の街を占拠してから止めており、これもヴァンにとって予想外だった。

先の戦いから、すぐさまレマン全土を平定しようと動き出すのではないかと思っていたのだが、それを彼はしていない。これではレマン軍に回復してしまう隙を与えることになるのだが、それでもあの夜襲の襲撃者が気になるために、慎重になっているのではな
いかという予想はできる。事実、あの時エルヴァ軍が被った被害はかなりのものだった。慎重になるのも分らないではない。だが
(……いや、違う。あの男が、あの程度で怯むはずがない)

ドライゼムの性質を思い返して、否と心で唱える。何を前にしたとしても、その全てを粉碎して進むあの男。傲慢という気質そのま
まに生きる男が、あの程度で止まるとは思えなかった。ならば、な
ぜドライゼムはここに留まり続けている？

(分らないことが多すぎる……)

最近のドライゼムの行動全てに疑問符がつく。が、その疑問符に
答えられる解がない。まるで深い霧の中を歩いているような錯覚を
ヴァンは覚えた。

エタルドの街を一回りし、今日のところはこれぐらいにしておく
かと、来た道をヴァンたちは戻り始めようとして、

「離しなさい、離しなさいよ!!」

という声を聞いた。

「悲鳴!? 一体どこから……」

「こつちです、ヴァン! フォルモ!」

「ああ、分かつてる!」

悲鳴を聞くや否や、ヴァン達は武器を構えて声の方向に移動する。
人通りがない裏通り。そこにはローブを纏った銀髪の少女と、二人
の男がもみあっていた。

(!? こいつら……!)

ヴァンは驚きに身を固めた。その二人に、あの夜襲ってきた黒尽
くめたちと同じ感覚を覚えたのだ。

「何をしてるんだ、お前ら！」

「誘拐とは随分と物騒ですね……ともあれ、私たちに見られたのが運の尽きです。お覚悟を」

固まってしまったヴァンをよそに、二人が彼等呼びかける。

しかし男達はヴァンたちに気付くと、一人は少女を押さえ、もう一人は邪魔されたことへの怒りか、恐ろしい形相でヴァンたちに向ってきた。

すぐさま迎撃態勢をとるイルシュとフォル。だが、素手で立ち向かってきたその男にヴァンは危険を感じた。この男……まさか！？二人を追い抜き、ヴァンは前に出る。

「え！？」

「ヴァン！？」

前に出られ、驚きの声を上げる二人。しかしヴァンは彼等に構うことなく剣を抜き放ち、正確に首をはねていた。そして同時に少女を捕らえている男にも肉薄し、抵抗する間も無く切り伏せる。

「ちょ、ちよつと兄さん！？　いくら誘拐犯でも問答無用で殺しちやうのはまずいんじゃない……」

「そんな事はいい！　とにかくこいつらから離れる！！」

フォルの言葉を遮って大声で指示を出し、ヴァンは少女を担いで下がり始める。

え？　といった困惑の表情を浮かべつつ、フォルも指示に従って離れる。イルシュは感づいたのか、特に何も言わずに下がった。

彼等が下がり終わったそのとき、爆発が起きる。二人の誘拐犯を中心として。

「！？　これって、俺たちを襲ってきたあいつらと同じ……！？」

「ああ、そういうことらしい。……これはひよつとすると、ひよつとするかもしれない」

驚くフォルに答えつつ、感覚だけではない、確とした証拠にヴァンは口端を吊り上げる。そしてヴァンの予想通り、聞こえてきた足音に彼は振り返った。

「団長、どうしたんだ！」

「爆発が起こるなんて、何事だよ!？」

そこには慌てた顔でかけてくる団員二人。彼等にヴァンは、感じたことと、腕の中にいる少女が誘拐されかかっていた事を伝える。これには二人も顔色を変えた。

「な…… だったら、本当に団長や親父の言つとおり、この街に……!？」

「疑っていたわけじゃないが…… しかしどうするんだ? これじゃあ街も安心して歩けないぞ」

不安げに辺りを見回す二人。当然だろう。どこから敵が来るかも分からないというのに、不安にならない人間はいない。

「…… ねえ……」

「つと、すまない。抱えたままだったな」

呆然とした声を漏らし、僅かに身じろぎした少女をヴァンは下ろす。

「…… ねえ、あんたたち! あいつらのこと、知ってるの!？」

しかし少女は、下ろされたたんヴァンに掴みかかってきた。

「な、いきなりどうし! いいから答えて! あいつらのこと知ってるの!？」

突然のことに驚き、問い返そうとするもあまりに必死な様子に言葉が途切れた。そして彼女に押されて、正直に「ああ」と答えてしまふ。

「だが、知っているといつても一度戦った程度だ。それがどうかしたのか？」

「その中に…… その中に、桁外れの力を持った、魔導士はいなかった!？」

彼女が発した言葉に、ヴァンとフォルの顔色が変わる。

「ど、どうして君がそれを!？」

「…… その様子だと、その二人は会ったみたいね。なら都合がいいわ。実物を見ていないと分からないだろうしね」

そう呟き、同時にこの幸運に感謝しますと印を切ってから、少女は話す。

「そいつは、人間じゃない。……“破戒者”よ」

——その名が出た途端、少女以外の、全員が固まった。

その言葉は、世界において禁句中の禁句であつたからだ。

「は……破戒者、だつて……？」

「お、おいおい。冗談だろ？ 誘拐されかけて、気が動転してるんじゃないか？」

「生憎ね。頭もちゃんと働いているわ。これでもれっきとした魔導士なのよ？」

ローブを掴んで、さらりと返してみせる。だが、それどころではないのがヴァンとフォルだ。

「ちょ、ちよつと待って！ 確かに俺たちが遭遇した魔導士はとんでもない力を持つてたけど、だからって」

「どれだけ攻撃しても、倒れない。人間とは思えない力と魔力。……そしてこいつら、人形兵を率いているっていうんなら、もう間違いないわ」

特徴をずばりと言い当ててフォルを黙らせた彼女は、断固とした口調で言った。

「そいつは間違はなく、破戒者よ。……私は、あいつらから逃げてきたんだから」

「そういえば忙しくてまだ名乗ってなかったわね。私の名前はレベツカ。見ての通り、レマン公国の魔導士……だつた者よ」

レマン公国の現状を思つてか、目を伏せて言う。ヴァンは彼女にかける言葉を持ち合わせてはいなかった。自然、顔を俯けてしまう。「気にしないでとは言わないわ。ただ、今はあんたたちエルヴァよ、あいつらを何とかするほうが先なんだから気にしすぎる必要もない。私もそうするから」

「……助かる」

レベツカと並んで走りつつ、彼女に頭を下げる。エルヴァの正規軍になった我が身に、その言葉は尚更ありがたかった。

現在ヴァンたちは装備を整え、レベツカの案内で破戒者の拠点、街の下に広がる地下墓地に向っていた。二人の横にはイルシュとフォル、サイアムが並走。そして彼等の後ろに、騎士団の人間が彼等を追って走っている。

レベツカから話を聞いたヴァンは一旦館まで戻り、武具の装備と各所への指示と伝令、連絡の取り合いを館に留まって行うようレグスに指示した。彼も襲撃者が破戒者とは思わなかったのか、話を聞いた時には珍しく驚きを露にしていた。

しかし立ち直ってからの行動は迅速で、すぐさまヴァンたちの装備を整え、また、ヴァンが指示したとおりエタルドに駐留する他の騎士団にも動くように働きかけてくれた。

彼等には街の各所にある地下墓地入り口の包囲を求め、ドライゼムにも——正直ドライゼムに助けを求めるのは気が進まなかったが、事の大きさを考えれば伝えないわけにもいかない。

なにより自分達は、既にエルヴァ軍の一員なのだから——連絡を取って増援の要請を行った。

「……ねえ、レベツカさん。聞きたいことがあるのですが。人形兵……でしたか。彼等は術者、つまり破戒者と視界が繋がっていると……いうのは本当ですか？」

鎧を身につけたイルシュが、疑問をレベツカに投げかける。

「ええ、そうよ。あなたたちが私を連れ去ろうとした奴らを倒した時点で、連中に貴方達のことは伝わってるわね」

「ここまで迅速に準備しても、奇襲を狙えないですか……厄介ですね」

「まあね。多分、地下墓地に着く前に迎撃を出してくると思うわ」
レベツカはイルシュに対し、自分の予測を伝える。それを横で聞いていたヴァンは口を開いた。

「以前、オルクスが俺と面識がないのに知っているようだったのは、そういうことか。しかし、この襲撃で破戒者たちも出てきてくれればいいんだが……」

気が乗らない様子でヴァンは言う。

「他の騎士団に伝えたのは人形兵、あの奇襲を行った連中が街中にいるということだけだ。実際俺たち自身が攻撃を受けたわけだし、敵対勢力がいるとなれば動くに十分な理由になると思う。……破戒者がいると伝えても、多分鼻で笑われるだけだと思うから……」
「でしょうね。私も信じられなかったから無理もないわ。でも、それは事実よ。あいつらに連れ去られて研究、いいえ、研究ということさえおこがましい外道の所業を見せられなければ、嫌でも分かるわ。あいつらはまだ世界にいるんだって、ね」

勝気そうな瞳が恐怖に揺れていた。それほどの経験をしてきた彼女にヴァンは同情を覚えつつ、向う先にいる者達に戦慄を覚える。

破戒者。それは“闇”の時代をもたらし、魔導士達の総称だ。

世界を構成する戒律を破壊し、自らを新しき戒律として新なる世界を作る……それが彼等の名の由来らしい。

だが自らを戒律とすると豪語するだけあって、彼等の魔導の技術は他の追隨を許さないものがあつたという。魔導全盛時代であつた“光輝の世紀”にあつて、頂点を極めた彼等は、ついに生物として外れることのできない理を捻じ曲げる法を作り上げてしまう。

生き物にかけられた、ありとあらゆる制限。それを取り払う魔導だ。世間では“乖理法”と呼ばれている。

（今となってみれば、オルクスのあの様子……あれで気づくべきだったかもしれないな）

命を落とすに十分な量の血を流しておきながら、オルクスは死ななかつた。その様子を思い出し、ヴァンは自分の迂闊さを自嘲する。制限を取り払われた者は限界を超えた肉体、再生能力、魔力を備え、それらを意思によって完全に操ることができると言う。これは、使った人間によっては不老不死となれる可能性を有していた。

世の戒律を解き明さんとする魔導士たちにとって、自らの思考を閉ざす寿命という忌まわしき鎖を排除できる法は何よりも望まれていた。そんな彼等にとって、その魔導はまさに待ち焦がれたものだった。

かくして破戒者は生まれた。

自身の知識欲を満たすことを最優先とし、そのためにはどんな犠牲も厭わない。

乖理法によって得た永遠の命を使い、己が戒律による世界の支配を夢見る狂った魔導士たち……その欲によって、世界は“闇”に包まれた……

「……なんとまあ……御伽噺か、もしくは昔話に出てくる連中と違っていた奴らと戦う日が来るとはねえ……」

サイアムが弱い口調で言う。

「あなたはまだ、信じられないという顔ね」

「まあ、俺はフォルやヴァンみたいに実物を見たわけじゃないからな……」

イルシュが絡まなければいつも自信満々にしているサイアムにしては珍しく、自信がなさげだ。だが、それも仕方が無い。

ゼノンは破戒者を倒して闇の時代を終えたとき、彼等が生み出した魔導の技術とそれに類するものの完全な封印、破棄を断行したのだ。当然、破戒者を生み出した乖理法も外法中の外法として封印されている。

そういった彼の功績や“闇”の時代を引き起こした憎しみ、“光”をもたらしたゼノンに対する民衆の信仰など、様々な要因が重なり、今では破戒者は存在すら許されないほどに忌み嫌われている。名前が出ただけで嫌悪感を抱く人間も珍しくない。

そういった中で存在し続けるのは、例えどれだけ魔導の技術を持つていても難しいものがある。ゼノンが去り、彼の王国がなくなつた今でも破戒者許すまじという意識は大陸の人間全てに生き続けているのだから、尚更だ。

これからから、破戒者は既に存在しない過去のものとなんが考えるのも無理はないといえた。

「そう。でも、今からはそんな考え捨てたほうがいいわ。間違いない、私達はその昔話に出て来た連中と戦うことになるんだからね。」

「……ほら、きたわよ！」

読解を使っていたレベツカが感知し、叫んだ途端、裏路地からぞろぞろと人影が出てくる。

「この数……レベツカさんの言うとおり、まずは人形兵とやらが来ましたか……え!？」

細剣を抜いてイルシュは構えるが、現れた人形兵を見て驚きに目を見開いた。

彼等はどう見ても、人間であつたのだ。レベツカから人間に限りなく近づけているものもあるとは聞かされていたが、これは一体どういうことなのか。

「レベツカさん、これは一体……!？」

イルシュがレベツカを向く。だが、向いた先にあつたのは怒りに震えるレベツカの顔だった。

「そう……もう完成させてたつてわけね……あの、外道どもが!!」
激しい怒りのままに、レベツカは叫ぶ。

「お、おい。どうなってるんだ、これ? こいつら一体なんなんだ!？」

「……こいつらも人形兵よ。一応ね。ただ、こいつらと貴方達が戦ってきたもので、違う点がある……こいつらは、元は生身の人間よ」

「!？」

ヴァンたちも含めた、騎士団全員が驚愕に顔を染める。

「でも、ただそれだけ。他は人形兵と変わりはないわ。……乖理法をかけた上で、筋力を極限まで強化。その上で催眠と暗示、そして意識を侵食する魔導を繰り返しかけ続けて、自意識が残らなくなるまで洗脳して……操る対象が作り物から、肉の塊になっただけよ」

淡々と言うレベルカ。しかしそこには計り知れない怒りが宿っている。そして何も出来ずにいた自分への怒りも、そこに含まれているようにヴァンは感じられた。

「そ、そんなのってないよ!? この人たちが可哀想すぎる! 何か、何か元に戻す方法とか……」

「あつたら使っているわ! 甘い考えは捨てなさい、あんた達が戦った人形兵よりも数段上の強さを持つてる。そんな考えで戦ったが最後、何もできずに殺されるわよ!」

フォルの言葉を否定するレベルカ。そして、それが開戦の合図となった。

乱戦が始まった。人形兵の数は50程度。対してキルヒア騎士団は200。数の上では圧倒的に有利なはずである。しかし、彼等の強さは想像以上だった。

一体一体が以前ヴァンが遭遇したオルクスに匹敵する筋力を持ち、その上

「なあ!?!」

団員が驚きと恐怖、その二つを含んだ叫びを上げた。腕を切り落としたはずが、切り落とされた部分から肉が盛り上がり、あつという間に再生してしまうのだ。

「下手に傷を負わせても再生されて終わりよ! 少なくとも、急所を狙うぐらいはしないと!」

レベルカの指示が飛び、団員達に注意を促す。

「くそ、これはえぐいな……イルシュ様、大丈夫ですか!?!」

「一々確認しないで大丈夫です! サイアムも、自分のことに集中しなさい!」

軽やかなステップで敵の攻撃を誘発し、その隙を狙って突きを繰り出すイルシュ。

サイアムは大剣を使い、人形兵をなぎ倒そうとする。しかし、そのどれもがさしたる効果を持たず、すぐに回復されてしまう。

レベルカの言うとおり急所を狙おうとしても相手の動き自体が早

く、また、守りを急所に絞って固めているため、余計に攻めづらくしていた。

「なら、魔導で！」

随伴している魔導士たちが意識を集中し始める。多くの金属音が近くで鳴る中、キルヒア騎士団の彼等は冷静だった。焦ることなく術式を組み上げ、放つ！

魔導によって呼び起こされた雷が空間を切り裂いて走り、人形兵の肉を焦がす。痙攣して片膝をつく人形兵。すかさず剣を振り、首を飛ばした。

これedyouやく一体。集団戦に適した能力を相手は持っている上、破戒者の魔力による魔導の干渉もある。先程の攻撃は成功したとはいえ、予想以上の苦戦を強いられていた。

サイアムは舌打ちし、このままではジリ貧にしかならないと歯噛みする。

「くそ、このままじゃどうにもならないぞ！ ヴァン、どうする！？」

「……あまりやりたくなかったんだが、仕方ないか」

複数の団員と共に人形兵の一体と戦っていたヴァンは、そいつを突き飛ばしてからフォル、イルシュ、サイアムに声をかける。

「レベツカが言うには、こいつらの近くには操っている術者がいるらしい。少数精鋭でそいつを叩きに行く！」

「なるほど、術者狙いか！ しかしそう簡単に見つかるかどうか……」

……

それが問題ではあった。だが、現状巧い手がそれ以外に見つからないもの事実である。

サイアムたちは一瞬の躊躇の後、腹を決めてヴァンと共に戦列を離れようとした。

「その必要はない」

新たな声がヴァン達の耳朵を叩き、そして裏路地から一人の男が現れる。ローブに身を包み、ヴァンにとって聞き覚えのあるその声

の持ち主は……

「オルクス!!」

「久しぶりだなあ、ヴァン。あと」

目をフォルにむける。

「お前もな、フォル。会いたかったぞ、お前らにはな」

「……」

殺気の籠った視線で睨み返すフォル。言葉だけとれば親しげだが、その実、滲み出るほどの憎しみと殺意が裏にはあった。

「街に来た事は知ってたんだが、こちらは表に出るのも一苦労と言う身の上だ。殺したい奴がいるつてのに、我慢してなきゃならんつてのは随分苦労した」

だが、と続ける。

「お前らが俺たちの方に来るつていうなら、話は別だ。……あのときの失態と傷の恨み、一遍に晴らさせてもらおうか！」

言い終わるや、魔力が噴出し始める。それにヴァンたち五人も臨戦態勢を取る。

「……オルクス」

だが、そこでレベツカがずいと前に出る。「ちよつと、君!？」とフォルが止めようとするが、レベツカの視線に込められた力に押され、下がってしまう。

前に出たレベツカを認めて、オルクスが「レベツカか」と言う。

「とうとうお前は、俺たちの仲間にならなかったな……優秀な魔導士なだけに、残念だ」

「残念なのはあんたの方よ、オルクス。あんな狂った連中の仲間になるだなんて、どうかしてるわ。昔のあんたは……」

「黙れ!!」

怒声を上げ、レベツカの言葉を遮るオルクス。

「昔の事を持ち出すな、レベツカ! いつまでもお前の陰にいる俺じゃない、そういつただろう! 偉そうな態度をとれるのも、今日限りだ!」

「そんな態度をとってるつもりなんてないわ！ 私はただ、あんと……」

「黙れと言っただろう！！」

術式が展開される。狙われているのは、レベッカ！

「させません！！」

軽やかな足取りで一氣に間合いをつめ、イルシュが肉薄する。

「イルシュ様、先走りすぎです！」

そして文句を言いつつ、サイアムが後に続いて大剣を振るう。

レベルカに対する注意がそれで逸れたのか、魔導に集中でなくなつて術式が霧散。忌々しげな顔になりつつも、二人の攻撃を反射神経と筋力でかわし、防ぐ。

「——せえい！！」

だがそこに三人目、ヴァンが来る。振るわれた剣はオルクスの皮膚を浅く裂き、血を噴出させた。

「ッ、貴様あ！」

叫んだオルクスは、見慣れない術式を展開する。すると三人の後ろから、二体の人形兵が団員達との戦いから離脱。彼等の背後に迫ろうとする。だが

「ふっ！！」

鋭い呼吸を吐き、足に力を入れてフォルが立ち塞がる。当然肉体強化の魔導がかけられており、筋力が強化されたもの同士の斧と剣のぶつかり合いは、凄まじい轟音を辺りに響かせた。

「すみません……俺はあなたたちを殺したくない……でも仲間も、兄さんも殺されたくないんだ！！」

武器が弾きあい、打ち合いが始まった。彼と人形兵は激しく動きながら、しかしフォルが道を塞ぐようにしているため、二体とも先に進めない。

一度破戒者との戦いを経験しているため、傷を負わせても油断せず、慎重に攻めと守りを繰り返していた。

「く、この役立たず共め！ さっさとそのクズを片付けて、俺の助

けに来いというのに！！……う！？」

そこでオルクスは、ようやく気付く。三人の攻撃に氣をとられていたのか、逆にオルクスの周りに術式が展開されていた。しかも精密に、彼と戦っているイルシュとサイアムを巻き込まない限定した範囲で展開している。それを展開しているのは

「レ、ベツカアアアア！！」

「……人形兵を50体も操作してるのに、前に出てくるからよ。何にかまけて周りが見えなくなる質は、変わっていないのね」

寂しげに言つて、魔導を発動させる。術式は“炎壁”。オルクスの周りを、炎が包む。

「ぎゃああああああああ！！ 熱い、熱い！！」

体を包む炎にのたうちまわるオルクス。近くで戦っていたサイアムは、目の前の展開された術式に抗議の声をあげた。

「あ、あぶねえ……下手をすれば、俺たちも巻き込んでるだろう、これ！」

「下手なんて打たないわよ。それよりも、早く！」

魔導を持続的にレベツカは発動させ続けて、絶えず炎で彼の体を包む。

サイアムが目の前に揺れる炎に注意しつつも、油断なく大剣を構え

「……あんな人形兵や、コイツの再生能力を見せられたら嫌でも信じるしかないか……のた打ち回つてるところを悪いが……」

オルクスの腹に、突き立てる。

「報いを受けなさい、破戒者！」

鋭く突き出されたイルシュの細剣はオルクスの心臓を

「仲間と、そしてお前たちの犠牲になった人たち……その無念を受けろ！」

そしてヴァンの剣が、再度彼の胸を貫いた。

「ああああああああ！！！」

炎と剣による激痛が、オルクスに絶叫を上げさせる。

「ああ、いやだ、こんなのはいやだ！ 速く、速く再生しろお！」

炎に炙られ、ただれた皮膚が再生しようとする。しかし、それを炎は再度包み、また、剣によって出来た傷は体の中にも炎を届かせた。想像を絶する痛みに、オルクスは再度絶叫を上げる。

「俺は破戒者になったんだぞ！　なんでこいつらに、こんな目にあわされるんだ！？　俺は強いんだ、レベルカなんて目じゃないくらいに強くなったんだ！　なのはどうして……ああ！？　まて、やめろ、崩れるな俺の体よ！」

と、そこで変化が起きる。

炎に焼かれても再生していた体が、突如として崩れ始めたのだ。人間ではありえない事態に、ヴァン達は目をむく。

「こ、これは……！？」

「ある意味じゃ副作用よ。乖理法のね」
レベルカがヴァンの隣に立ち、説明する。

「肉体の限界を取り払う……言葉だけを聞くなら、素晴らしいわ。でも、ならばなぜ限界が人間にはあるのか……それは、肉体にとつて必要だからよ。意思によって肉体の制御を行えるようになるもの、もしその制御ができなくなればどうなるか」

その結果が、これ。レベルカはそう言い捨てる。

その間にも肉が崩れ落ち、骨もまた形を失いつつあった。ぐちゃぐちゃの肉塊になっていく様は、人の死を見慣れているヴァンたちにも吐き気をもたらすに十分な凄惨さを持っていた。

「制御を失った肉体は暴走して、こんなふうに体が崩れてしまう。設けられた限界は、人の意志にもよらずに体を守ってくれていたのにね……」

騎士団の全員が呆然と見つめる中、悲しげなレベルカの声が流れた。

「ああアアアア……！！」

既に言葉も出せないのか、ただ言葉にならないうめき声を上げるだけとなるオルクス。

「……さよなら、オルクス」

最後の餞に一言、レベツカが決別の言葉を送り……完全に、オルクスは崩れ去った。

沈黙が落ちた。人形兵たちも指揮する者がなくなったためか、動きを止めている。

そんな中でふと、ヴァンは何故彼等に、破戒者に違和感を感じるのか、それがなんとなく分かった。

その名の通り、彼等は外れているからだ。世界の理から。

自然の摂理としてある理から外れているがゆえに、世界に存在すること自体に不自然な感触を受ける……そこまでヴァンは考えて、はっとした。

（なぜ、俺はこんなことが分かった？）

そうだ。なぜ今まで分からなかったこの違和感の正体を、突然俺は理解したのだろう。あまりに自然に頭に浮かんできたため見落とすところだったが、これは一体……

自分自身に戸惑うヴァン。そういえば、最初にオルクスを見つけたときもあれは感じたと言うより、何かに教えられたような感覚だったことを思い出す。

そして、魔導が使うのが得意ではないはずなのに、あの時は自然に、というより導かれるようにして隠式の魔導を使っていた。あれも自分の感覚がさせたというのだろうか？

（俺の感覚……一体何なんだ……？）

改めて、疑問が湧く。そもそもこの感覚に超直感という名前をつけたこと自体、なんとなくでつけられたいい加減なものだ。本当はこの感覚、いや、感覚かどうかともそもそも分かっていない、がどんなものなのか自分を含めて誰もわかっていない。

自分に対する戸惑いを感じつつ、状況を思い返してまとまらない思考を打ち消した。

やめておこう、わからない事を延々と考えている場合じゃない。それよりも、今は破戒者だ。

人形兵との戦いで皆も消耗している。敵の拠点の位置は割れてい

るとはいえ、このまま突撃するのはリスクが高い。空には薄く茜色が混じりつつあるし、このまま夜を迎えて攻め込めば、感覚を強化されたあちらに有利な状況に足をつまむことになりかねない。

（他の騎士団はどうしたんだ。幾ら俺達が先行していたとはいえ、そろそろ追いついてもいいはずだが……）

味方の到着が遅いこと、もヴァンの胸中に不安の種を植え付けている。いくらなんでも、他の部隊と合流しても良さそうな頃合なのだが。

「……ともかく、まずはこいつらを縛り上げてから、か」

不安を抱きつつも今出来る事をしなければと思い直し、視線を人形兵に移すヴァン。今は静止しているとはいえ、また動かれでもすればたまったものではない。

別の破戒者が指揮者として来るのを警戒しつつ、拘束していく。

時間が経つほどにじわじわと這い上がってくる、感じたことのない寒さを背筋に感じながら……

遠くから、金具の擦れあう音が聞こえてきた。音のする方に目を向ければエルヴァ軍の一団がこちらに近づきつつあるのが見える。

ようやく到着か。遅い到着に不満が胸に滲む。そしてその不満の影で、冷たい感覚が背筋を流れたが、それらを押し殺して彼等を迎えようとして――目を見開いた。

増援として現れたはずの騎士団。だが彼等は、あるうことか武器をヴァンたちに向けたのだ。

どういふことかわからず動揺するキルヒア騎士団。なぜ、自分達は仲間から武器を向けられている？ これは一体、どういふことなのだ！？

「……ヴァン殿。無駄な抵抗は、なさらないでください。既にエタルドにいる全部隊に、動員令が出ています。あなた方を捕縛、それがかねなければ……殲滅するようにと」

そこに率いてきた騎士団の隊長が前に出て、ヴァンに呼びかける。この一ヶ月の間にそれなりに親しくなり、酒も飲み交わすように

なつた男。傭兵上がりだと侮らず、実力を素直に認めてくれた。だがそんな気のいい彼が、今は顔に苦渋の表情を張り付かせている。言葉が、彼の口から紡ぎだされる。決定的となる破綻を告げるために。

「投降するのが貴方にとつても、そして貴方の仲間達にとつても最善の道です。その上で申し開きをなさればいい」

——あなた方には、エルヴァ神聖帝国への反逆の嫌疑がかけられている。

……目の前の事態から、読み取れないではない事実ではある。

しかし、仲間であつた人間から伝えられたそれは、より重みを増してヴァンに、その仲間達にのしかかってきた。更なる動揺が騎士団全体に広がっていく。

「おい……それは何の冗談だ！ よりにもよつて俺たちを反逆者、だと！？」

サイアムが身を乗り出し、反論する。

「傭兵の頃から一度だつて、俺達はエルヴァに齒向かつた事はないはずだ！ それなのに何故、そんな言いがかりをつける！」

「そうです、幾らなんでも不当すぎます！ 一体誰がそのようなことを言い始めたのですか！」

イルシュでさえ声を荒げて詰問する。しかし隊長は苦渋の表情を崩さないまま、どうしようもないというように首を振り「ドライゼム陛下のお言葉です」と、エルヴァの人間にとって絶対の回答をよこした。

「あなた方から報告があつた直後に、陛下より下知が下りました。キルヒア騎士団が交戦した者達は」

複雑な感情を乗せつつも、それを必死に抑えた視線を彼は人形兵に注いだ。

「エルヴァが新たに徴用した者たちである。彼等に害を与えたキル

ヒア騎士団は、これ以降の戦いにおいて重要な戦力となりうる者たちを無為に傷つけた」

彼は淡々とドライゼムの言葉を繰り返す。

「以前までの戦功を省みたとしても、この事態は看過できない。現時点を以って、キルヒア騎士団の軍籍を剥奪。反逆者として、捕縛せよ。……以上です」

口調だけは終始変わらぬ様子で言い終える。

誰もが言葉を出せなかった。何だこれは……一体何なのだ!?

あまりに無茶苦茶な論理だった。確かに、今ヴァンたちが戦った相手が以前奇襲をかけた連中と同じである確証はない。

しかしそれ以前に街中で暴爆の魔導を使い、一方的に仕掛けてきたのは連中の方だ。しかも破戒者が関わっている疑いまであるというのに、よりによってこいつらがエルヴァ軍の兵士だと? それと戦った自分達は、反逆者……!?

「なん……だそりゃあ!？」

「ふざけるな! そんな理屈ありえねえだろう!？」

「そもそもこいつらが仲間だっていうんなら、なんでそうと識別できる紋章もなにも持ってねえんだよ!」

「しかもこつちは一方的に攻撃されてんだぞ!? 馬鹿馬鹿しいにも程がある!」

口々に仲間達が怒鳴り始める。だがその一方、ヴァンは胸中が冷えていく感触を味わっていた。気付いたのだ、最悪の可能性に。

領主館を思わず振り仰ぐ。今まで常識に縛られて考え付かなかった可能性。ドライゼムは、破戒者と繋がっている――

(そう考えれば、全てに辻褃があう……)

人が大勢エタルドから消えたのも、その混乱を容認しているのも奇襲の件だって今なら説明できる。恐らく試したかったのだ。破戒者の実力を。今までのあの男の行動から考えてみれば、何の不思議もない。何よりも力を、支配を追い求める傲慢そのものといえる氣質……破戒者であろうと、

そして何よりの証拠は、この命令の早さ。

ドライゼムにも破戒者の件は伝えるように伝令に言い渡したが、届くのは恐らく時間的に考えて今頃のはず。それを差し置いてこんな命を下させたのは、ドライゼムが既にヴァンたちと破戒者の接触を知っていたからに違いない。

人形兵と視界を繋げられる彼等の能力を鑑みれば、離れた場所においても情報を伝達、共有できると考えてもおかしくないだろう。自然、手に力が入る。唇に歯が突き立ち、血がにじむ。

これが貴方の、いや、お前のやり方なのか。外道にまで身を落としてでも、力を、覇道を望むというのか。味方さえ欺き、殺してまで。禁忌の中の禁忌とまでいわれた、破戒者と繋がってまで――

(ドライゼム――！！)

激情がヴァンの心を支配する。今まではどうにかドライゼムの暴虐にも、西域の統一には必要なこととして折り合いをつけてきた。だが、ここまで道を外れるとなればもう容認などできようはずもない。いずれ自分も、仲間達もこの人形兵と同じ様にされる可能性だつてある。

別離の時だった。しかし今のままでは破戒者に、ドライゼムに何も、一矢報いることすらもできない自分を省みて、惨めさが溢れる。それを押し殺し、今すべきことをヴァンは見すえる。

そんなヴァンの胸中を知らず、隊長は懇願の感情を瞳に乗せた。

「館にも既に手は回っています。無意味な抵抗などせず、どうか穏便に……」

「逃げるぞ――！」

隊長の言葉を遮り、ヴァンの叫びが団員達の耳朵を打つ。

不満を口々に言い募っていた彼等のはつとした面持ちになり、次いで視線を周りの仲間たちに合わせて頷きあい、散らばり始める。

「落ち合う場所は『炎の森』だ！ 小隊に分かれた後、各自散開。絶対に逃げ切れ――！」

一息に言って自身も周りにいる団員たちに目配せし、その場でフ

オルやその他二人の団員、最後に直接声をかけてレベツカを加え、即席の小隊を結成する。視線を交わした団員達の中にはイルシュもあり、同行する意思を伝えてきたが、それには首を振った。胸中では謝罪の言葉を連ねて。

彼女には指揮官としての能力がある。自分を案じてくれるのは嬉しいが、この状況でそういった能力は貴重だ。より多くの仲間を導き、生き残らせなければならぬ以上、彼女とは別行動を取った方がいい。

否定の意思を伝えた瞬間、今日の間ずっと続いていた鉄面皮に、僅かな亀裂が走った。ぐつと詰るそぶりを見せ、レベツカには嫉妬の眼差しを一瞬向ける。それでも状況は分かっているのだらう。次の瞬間には表情を戻して「ご無事で……！」とだけ言い、他の仲間達と同様に散らばり始めた。

前触れもなく起こしたヴァン達の逃亡にエルヴァ軍もとっさには動けずにいたが、彼等が散らばり始めたのを見てようやく「ま、待て！」「逃がすな！」といった声が重なり、追い始める。

瞬時に鋼を打ち合わせる音が響き始め、放出された魔力がそこかしこに溢れ出す。

エタルドを舞台として、狂乱の宴が幕を開けた。

第五章 懊悩

逃げる。逃げる。逃げる。

石畳を蹴り、煉瓦で造られた家々の合間を縫って、ヴァン達は走る。

茜色は拭い去られつつあり、空には星が瞬き始めている。闇の間は、すぐそこまで迫っていた。

しかしエタルドにおいては、闇の時間など何一つ関係ないかのごとく狂騒の宴が続いている。街中に散らばるキルヒア騎士団を探し出して捕縛、もしくは殲滅するべく、駐留している他の部隊全てが駆り出されているからだ。

そんな中をヴァンたちは裏通りを通り、彼等の目を避けて走っていた。

「……本当に良かったの？ あの子、あなたと一緒に行きたくがっていただけ……」

途中でレベツカが聞いてきた。自分に向けられた嫉妬のまなざしを思い出しているのか、彼女の横顔には影がある。

「それにどうして私を……その……私のせいで、貴方達が」

いや、その影はイルシュのこのみならず、ヴァンたちにいらぬ災難を呼び寄せてしまったことに対する責任もあるようだ。

「過程はどうあれ、貴方達に迷惑をかけてしまったし、いっそのまま置いていっても文句は……」

「馬鹿を言うな」

しかしそれにヴァンは、強い口調で否定の意思を表した。

「君を助けたのは俺の意思だ。そのことに何の後悔もない」

後悔があるとしたら、それはドライゼムと破戒者の関係を見抜けた無かった俺の不明だ。それさえ分かれば、もう少し巧い立ち回りも出来たはずなのに……

心の中に、後悔が大きなしこりとなって残るのを感じる。エルヴ

ア軍での地位もなにもかもを自分の判断で失い、反逆者という烙印を押された仲間達にどう償えばいいのか……

暗い感情が心を支配しかけるのを感じるも、皆の手前、現状で弱い姿を見せるわけには行かなかった。

（今はそれよりも……！）

首を上げる。周囲を漂い始めた魔力を感知したヴァンは、「レベツカ、頼む！」と呼びかけた。

応えて、レベツカが魔導を展開し始める。宙に描かれつつあった読解術式が探るように辺りをめぐる中、レベツカの展開した隠式の術式がヴァンたちを覆い、彼等の位置を分からなくさせる。その腕をみてヴァンは「いい腕だ」と漏らす。

「……今の場合、こっちは君の力を利用させてもらっているようなもんだ。この状況で魔導士が一人でも増えるのは、ありがたい。もし嫌であるのなら別れても良い。けどお互いのために、今は一緒に行動した方がいいとは思わないか？」

「ヴァン……そう、ね……分かったわ。ごめんなさい、こんなときに」

自分が原因の一つであるという落ち目を未だ感じつつ、しかし弱気を封じ込めたようだ。声に張りに戻る。それに「いいさ」と返したヴァンは、気配を察知して剣を構える。「来る！」というレベツカの声も重なって、仲間達もヴァンに倣った。

読み通り街路から兵士たちが飛び出し、

「いたぞ！」

「取り囲め！」

という声と共に切りかかってくる。すぐさまヴァンたちは応戦するが、彼等の後方では周囲の仲間を呼ぶための呼子を鳴らしている者もあり、ぐずぐずしている状況ではないのは明白だった。

「責任を考えるのも悪くない。だがそれは全て生き残ってからだ。今は逃げ切ることをだけ考えろ！」

自分にも言い聞かせるために叫ぶ。レベツカは「ええ！！！」と応

えて、引き続き敵魔導への干渉を続けた。

裏通りに、鋼の耳障りな音が響く。数合剣を打ち合わせ、ヴァンは相手の技量、そして連携の錬度を量る。

エルヴァの正規軍だけあって、個々の実力は悪くない。しかし如何せん、普段多数との連携に慣れてしまっているせいか小隊単位での動きに明らかな鈍さが見て取れた。その弱点をつけば十分勝機はある。

「——フォル！」

「任せて！」

掛け声一つ、それだけで意図するところが伝わる。前衛としてヴァンと二人の団員、計三人で敵の動きを抑えているところを、後方でレベルカの護衛に当たっていたフォルが強化の魔導を発動、駆け始め——跳んだ。

三人が通れる程度の広さしかない通路だが、上を通れば話は別で、強化によって高められた脚力は戦っているヴァン達の頭上を飛び越えるだけの力を秘めていた。そのまま敵の後方に着地したフォルは、すぐさま反転。背後からエルヴァ軍に襲い掛かる。

思いもよらない手に焦った兵士達は、互いの援護に回ろうと背中合わせの陣形をとろうとする。しかし経験の無さが響き、各々の動きに一拍の遅れが生じてしまう。それが彼等の命取りになった。

一人をまずヴァンが切り伏せ、残り二人の内の片方は団員二人が同時に掛かって無力化。残った一人は突っ込んできたフォルが残りを薙ぎ払った。

敵小隊の全滅を確認したヴァンはフォルに消耗の激しい強化を解くように指示し、レベルカの護衛も兼ねて再度後方へ回す。そして自分もまた、前衛に立って脇道から出てくる敵を押さえに掛かり、適当に相手をしたところで後退。先行した仲間達と合流する。

現状、どうにかエルヴァ軍の追撃をかわす事ができていた。細い路地という地の利を活かせるし、体力的にもまだ余裕がある。

しかし悠長にはしていられない。今は良くてもいずれ疲労はたま

つてくるだろうし、何より元々自分達は破戒者たちと交戦して消耗しているのだ。無理はあまり出来ないとヴァンは感じていた。

また、数の不利も歴然としている。幾ら騎士たちを倒しても、呼子を聞きつけてすぐさま増援がくるため中々思うように動けない。騎士団を分散させたのも固まって動けば自分達が動きにくいことと、相手に戦力を分散させるためであつたが、そうであつたとしてもこの数はきつかった。

（エタルドに駐留しているエルヴァ軍の総数はおよそ一万……まともにも相手できる数じゃない）

脳裏に情報呼び出し、ヴァンは歯噛みする。全軍が動員されているのかは現状分らないが、そうされても不思議ではないとヴァンは考えていた。破戒者との繋がりがもし表に出たとしたら、ドライゼムに待っているのは破滅しかないのだから。

天王が定めてから五百年、大陸において今や絶対的禁忌と成っている破戒者。そしてそれと繋がったという事實は、そこまで重いのだ。社会的な破滅は確実に起こる。

表に出たら最後。民衆はおろか、国としての威信も失い、ドライゼムは全てから見捨てられるだろう。

例えいつものように力を背景としてねじ伏せたとしても不信は消えずに残るだろうし、家臣たちからも見捨てられるに違いない。それゆえに、なんとしてでもヴァン達の逃亡を阻止しようとするはずだ。そう、例えどんな手を使っても……

（——来た——！）

警戒していたことが、現実になったと背筋に走った悪寒が告げる。

「！これは……！！」

レベツカも魔導士だけあつて気付いたらしい。だが戦い慣れていない彼女は、目の前の事態の把握に気をとられ、動きが止まってしまう。すかさず、ヴァンは叫んだ。

「レベツカ！ 干渉を——！」

「あ、え、ええ——！」

我に帰ったレベツカは魔力を展開し始め、ヴァン自身もそれに加わる。その次の瞬間、轟音が響いた。

読解ではない、爆爆の術式だ。交戦した兵士が鳴らした呼子でこちらの位置が大体判明している。それをいいことに使ってきたか。だが、この近辺には彼等の兵士だっている。それにもかかわらず、こんな魔導を使ってくるとは。

見境なし、そんな言葉が頭をよぎる。レベツカとヴァンによって爆発の起点となる場所の位相をずらされたため、そして威力自体はそれほどでもなかったためにヴァンたちに被害が出る事はなかったが……

「兄さんの考えていた通り、か……こんな街中で躊躇なく使ってくるなんて」

顔を腕で爆風の余波から守っていたフォルが、憤りをあらわにして吐き捨てる。

「噂で聞いてたけど、本当にとんでもないわね。ドライゼムという男は……！」

レベツカも怒りを全面に出しつつも、ヴァンと共に干渉を行っている辺り、自分の役割を弁えているようだ。もっともそうでなければ困るのだが。

横目で爆爆による被害を見る。爆発をともに受けた家屋は一部が倒壊し、粉塵を当たりに撒き散らしている。威力が落ちていたとしても、この威力だ。

ヴァン達の相手をしていた兵士たちもこれは見過ごせないのか、怯えた顔をしていた。

「ど、どうということだ!？」

「ここには我々だっているんだぞ! まさか、巻き込むつもりで!？」

どうやらそうらしい。ヴァンは心の内で答えて、巻き添えを食わないよう全力で走り出す。

兵士たちも目の前の危険に怯えてはいたが、それでもドライゼム

の命を達成できない方が怖いのか、逃走するヴァンたちを見て震える声を無理に張り上げる。

「く……怯むな！ キルヒア騎士団の団長……奴さえ捕らえればどうともなる！」

「敵は少数だ！ 困えさえすればどうともなる！ 他の地区からも人手を回せ！」

必死に態勢を整える。呼びかける声は殺気立っており、その一方、少し離れた表通りからも同様の声が響いてきた。

「行け、行け！」

「通りの出口にも非常線を張り、警戒しろ！ ネズミ一匹通すな！」

「ただ奴らの団長だけは殺さずに捕らえろとお達しだ、絶対にそれだけは忘れるなよ！」

爆発が続く中、兵士たちの叫びと金具の擦れあう音が辺りに満ちていく。ふとその中に、気になる言葉をヴァンは見つけた。

（俺を捕らえるだと……？）

そういえば、今も続いている暴爆にしたところで威力そのものは弱い。騎士を相手にしたときも、どこか動きにためらいが感じられたが、あれはその指示を守ろうとして……？

そこまで考えて、一つの案が浮かぶ。ドライゼムの自分に対する態度を思い返し、状況に対する最低限の確認を済ませてからやれるのかと自問。後悔と言っしこりが蠢き、自分に償えといってくる。そして彼は、やってみせると返した。

一旦団員達を立ち止まらせ、物陰に隠れる。なぜここで足を止めるのかと訝しがる団員達を宥めつつ、隠式の魔導を使って気配を消した後、仲間たちだけに聞こえる声でヴァンは話し始めた。

「——ここからは、別行動を取る。俺を除いたお前たち四人で、エタルドを脱出しろ」

「え……兄さん！？ 何を言ってるのさ！？」

「落ち着け、フォル。他の皆も。……何も考えなしに言ってるわけじゃない。さつき皆も聞いただろう、連中の会話を」

「そりゃ聞いてたが、それとこれと何か関係が……おい、まさか！？」

感づいたのか、団員の一人が驚きの表情を浮かべる。それに苦笑をして、ヴァンは続けた。

「ああ、そうだ。あの会話だけが根拠だと少々不安が残るかもしれないが、あの必死な様子からして恐らく間違いないだろう。……俺が囷になる」

「そ、そんなの危険すぎます！　こんな状況で単独行動なんて、無茶を通り越して無謀もいいところじゃないですか！！」

いつもはヴァンに従っているフォルが珍しく強硬に反対してくる。それだけ心配してくれているのは有難かったが、今は状況が状況だし、しかも、大勢の人間が集まりつつあるこの気配……

「ダメだ。今だって気配が集まりつつある……俺がここにいると知って、増援を呼んだんだろう。このまま一つに固まっていれば、一網打尽にあうのがオチだ」

「だからって、いくら何でも一人は……！」

「ともかく、ダメなものはダメだ。お前達はお前たちで逃げろ」

有無を言わさない口調で言い切り、物陰からヴァンが出る。「おい、ヴァン！」という声を背にして、「こんな事態になったのには、俺にも責任がある」と返した。

「それに俺に敵が集まってくれた方が、お前たちにとっては動きやすいだろう。……大丈夫だ。俺だって死ぬ気も無ければ捕まる気だって無い。せいぜい動き回って、引つ掻き回してやるさ」

にやりと笑ってやる。誰も何も言えないのをヴァンの言に対する肯定と解釈し、「必ず戻る」と言い残しヴァンはその場を後にした。裏通りから出るとすぐに「いたぞ！」という声がかかる。それを聞き流しつつ、表通りを横断。別の裏路地に入り、複雑に入り組んでいる道を通って逃げる。

「一人か？　他に四人ほど護衛がいたはずだが……」

「構わん、団長だけはなんとしても捕らえろと陛下のご命令だ！」

「他の連中に回す人員は最低限にして、奴を捕らえるのを優先させる！」

兵士達の叫びがあたりにこだまする。同時にヴァンを追いかけるように暴爆の術式が乱舞し、立て続けに爆発を起こす。しかも爆発音は近辺からだけではなく、遠くのほうからも聞こえてきている。どうやら仲間達に対しても魔導による攻撃を開始したようだ。

煙も上がっており、火が街の各所で起こり始めている。辺りに満ちる暴爆の魔導から逃げるために住民達も街路に溢れ始め、今やエタルドの街は混乱と恐怖に満ちた狂騒の場と化していた。

この事態を予測できなかったわけではないが、実際の場面を目の当たりにするというのは、辛い。しかもヴァンは、その原因を担つてもいるのだから尚更だった。

責任と言う言葉がしこりの上に負ぶさり、更に重みを増してヴァンの心にのしかかってくる。

(……それでも俺は……俺は、役割を果たさなきゃならない……！)
折れそうになる心をどうにか奮い立たせて、足を上げる。

敵を引き付けなければならぬし、それに館に残してきたレグスたちの安否も確認しなければならぬ。仲間達同様逃げていてくれればいいが、そうでないのなら何かしらの対応策も考えなければならぬだろう。

それらの責務も果たせず、ここで折れてしまえばそれこそキルヒア騎士団の名折れとなってしまう。自分に後を託した義父にも、面目が立たない！

(いざとなれば、俺が……)

一つの考えを秘め、ヴァンは街を駆けてゆく。超直感を存分に駆使し、一体どの方向へ向えばいいのか、感覚が示してくれる漠然した指標を辿っていく。危険察知の能力も使い、危険と告げてきた際にはすぐさま移動するか、身を隠して兵士達をやりすごした。

幾許かの時間が過ぎた。

多くの曲がり角を辿り、追手も撒けたのか。今の時点では兵士の

姿は周りには見当たらない。隠式の術式も巧く機能し、今のところ居場所を察知された様子はなかった。

発見されないまま館近くに着き、耳をすませる。何の音も聞こえない。館に籠城しているのではないかという考えもあったのだが、どうやら違うらしい。

ならば逃げてくれたのかと考えて……街の外からの爆発音を聞いた。

がたがたと車輪が音を立てる。馬の二倍はあるであろう大きさの魔獣、騎竜が竜車を曳き、その周囲を団員達に固められて戦域を離脱していった。

「親父、ガキや女共の非難は済んだぜ！」

伝令がレグスに伝える。それに彼は頷いた後、「残るはわしらのみか」と呟いた。非戦闘員の離脱を伝え終わった伝令も、「俺も加勢してくる！」と言って馬に蹴りをくれ、剣を振り回して仲間達の援護に向っていった。

「とはいえ、どうしたものか……」

そしてこう続ける。レグスの体には返り血がべっとりとつき、手に持つ大剣には体以上にどす黒い血が塗りとくられていた。周りにいる仲間達も大体似たような外見であり、街道に散らばる血痕や屍らと同様、戦いの激しさを伺わせた。

館に残っていたレグスたちもエルヴァ軍からの襲撃を受けたのだが、ヴァンたちに加勢するために戦いの準備をしていたのが幸いした。

もっとも突きつけられた反逆者という烙印の衝撃はやはり大きく、団員たちは初めはどう動けばいいのか分からず混乱していたが、ドライゼムと破戒者の関係を察したレグスが団員達を叱咤してどうにか回復させた。

そしてそのまま交戦。元々非戦闘員である女子供を運ぶために飼っていた騎竜を再度使って非難させ、今に至る。

現在、千もの兵士達が彼等を追撃してきている。波状攻撃を仕掛けてきており、それに対して包囲、突破されないよう彼等は立ち回っていた。

引き連れている魔導士の数は少ないのか、それほど魔導による攻撃は激しくない。彼等の相手をしている兵士達の技量も不足していたこともあり、今の時点ではどうにか食い止められていた。

「たった三百程度の相手に、随分と気前良く差し向けてくれるものだ」

レグスの脇を固めていた中年の団員、名をブレイスという、がぼやく。彼の得物である槍も血まみれだ。よほどの人数を一人で相手して、倒してきたのだろう。

レグスの腹心でもある彼は息の合った動きで辺りを牽制し、敵を寄せ付けない。

「それだけわしらを逃がしたくないんだろう。もっとも、駐留している戦力の大半は街中の方に回されているようだが」

ヴァンは、わしらの団長は無事なのか。声には出さず、心の中で言う。

旧友キルヒアから託された、新しい世代の団長。甘さともとれる優しさを持ちながら、それでいて冷徹な判断も下せる強さも持ち合わせた、キルヒアに良く似た気質を持つ男……もし脱出できない事態に陥っているとしたら、その時は……

「心配するな、レグス。あいつなら心配いらんだろうよ。今までだって幾度も困難を切り抜けてきたんだ」

内心を見透かしたかのごとく、ブレイスが言う。表情には出していないかったはずだがトレグスは思い、また、今朝方のヴァンとのやりとりを思い出す。

わしもまだまだかと苦笑して、口からは憎まれ口を叩いておく。

「……だといいが。あいつのことだ、また余計なことを考えている

ではないかと不安になる。まったく、何年戦場に身を置いてるんだか……」

「ハハ、だからいいんだろう。そもそもその余計なことを考えてる奴の元祖に、面倒面倒言いつつ長年付き合ってたお前が言えた口か？」

「……」

「徹頭徹尾冷徹、合理的な奴が団長なんぞまっぴらだ。あれぐらい割り切れない方が寧ろ好感が持てるし、そういう奴だからこそそのキルヒア傭兵……おっと、名ばかりになったとはいえ、騎士団の団長というもんだ。特に……」

ひゅんと槍を回転させて飛来する矢を叩き落とし、続けて遠巻きにしていた敵兵が痺れを切らして襲い掛かってくるタイミングを合わせて槍を突き出す。カウンターの要領で繰り出された一撃は鎧を貫き、一瞬で敵兵を絶命せしめた。

「こんなご時勢、状況なら尚更な！」

すぐさま槍を引き抜き、続けて近づいてくる兵士を今度は横に払って牽制。その上で今度はブレイスの方から接近し、反撃に転じる。その後姿からは、ここからは一步も進ませまいとする意思が読み取れた。

ブレイスだけではない。今も戦い続けている団員たち全員から、彼と同じ意思が感じられる。数の差があっても誰一人として逃げようとせず、ひたすら踏みとどまって非戦闘員たちの殿を務めようとしているのだ。

思えば、館からここまで逃げるまで戦列から離れる機会など幾らでもあっただろう。そして、逃れたいと考えて当然と思える状況もある。突然反逆者などという烙印を押され、追われる立場に追い落とされてしまったのだから。

だが、彼等は現にここにいます。強い意志を瞳にたたえ、なんとか耐え続けている。

そこには普通の傭兵団では見られない強固な絆があり、ドライゼム

や破戒者の恐怖を上回る心の強さを、理不尽に抗う力を彼等に与えていた。

その状況を齒がゆく思っているのは、当然エルヴァ軍である。

「なぜだ、なぜ突き崩せない！？ 相手は我々の三分の一程度の数しかないのだぞ！？」

エルヴァ軍の部隊長が声を荒げていた。

「しかも場所によっては反撃を許しているというではないか！ ええい、不甲斐無い！ 傭兵上がりの雑兵どもなど一息に蹴散らしてしまえ！」

「し、しかし奴らの強さは本物です！ こちらの被害も鑑みるに、一度退いて後続の部隊と合流したほうがいいのでは……」

「そんなことなどできるものか！ もしその失態がドライゼム陛下に知られてみる、私だけではない、貴様らも全員無能と評されるであろつよ！」

「……！」

部隊長の言葉に副官は絶句する。ドライゼムから無能と評されれば、その後どうなるか……考えるまでも無かった。

「お前たちも私も、既に逃げられんのだ。命が惜しいのなら死力を尽くせと厳命させる！ 及び腰になりかけていた連中も、それです少は奮い立つ！」

「りよ、了解しました！！ おい、伝令……！」

冷や汗を流し、恐怖に染まった顔で副官が伝令を呼びにいく。やがて命令が行き届くにしたがって張り詰めていた空気がより引き締められ、鬼気迫る形相に変貌したエルヴァの兵士達は猛攻を開始した。

これで多少は状況も良くなる、そう部隊長が考えたときだった。隠式を使い、部隊長の周囲を警戒する魔導士たち、もっともこのとき魔導士たちはキルヒア騎士団の魔導に集中しており警戒が疎かになっていたが、に気付かれずに接近してくる影がいた。

丁度部隊長の背後から迫る形となったそれは、気付いた護衛も振

り払って彼との距離を詰め、剣を振り下ろした。

顔を両断された指揮官は声すらあげられずに絶命。そして指揮官の命を奪った影……ヴァンはその場を退きつつ

「大将首、頂いたぞ！」

と常ならぬ大声で叫び、敵味方関係なくその事実を戦場全体に波及させていった。

それに慌てたのはエルヴァ軍、そしてキルヒア騎士団も同様だった。エルヴァ軍は突然の指揮系統の崩壊に、キルヒア騎士団は団長がいきなり戦場に現れたことである。

「この声、ヴァンか！？ 無事だったのか！」

「いたぞ、あそこだ……って一人かよ！？ 何やってんだあいつ！」

「と、ともかく助けるぞ。あいつの言うとおりだとしたら、今が合流するチャンスだ！」

一人で助けに来たらしいヴァンを迎えにくために、幾人かが混乱している敵中を突っ切る。そのせいで余計に混乱に拍車がかかり、少数であっても突破することができた。

彼等と合流したヴァンは、そのままレグスたちの下に戻る。レグスはヴァンに、一人で、その上こんな所まで来るとはどういうことかと詰め寄ろうとしたが、「話は後だ」と言ってヴァンが止めた。

「さっきここにくる途中で見た。……騎兵が来る」

彼の言葉に、ざわりと周りが揺れる。

「……何騎ほどだ？」

「二百。館の近くに駐留してた連中が動き始めていた。今はまだ動き始めてはいないようだが、あの様子だとすぐに来る」

「騎兵まで動かし始めたか……」

焦りがレグスの顔に浮かぶ。隣に控えていたブレイスも同様の顔をする。街中での戦いには適正も考えて出されていなかったようだが、郊外となれば使うのを躊躇う理由もないということか。

「こちらの騎兵は女子供の護衛につかせて、今はここにいない。そいつらがここを迂回して、まず先にあいつらを潰しにくるという可

能性もあるだろうが……」

「いや、それはないだろう。そもそも今回の件、目的はわしら全員の抹殺のはずだ。既にあいつらはここから離れとるし、今からでは追いつけんだろう。むしろわしらを潰すために動いたと見るのがここは正しい」

「だが、それはそれで厄介だ」

ヴァンが呟き、二人も押し黙る。騎兵の歩兵に対する優位は、レマン軍との戦を見ても明らかだ。加えて現在戦っているエルヴァ軍も、今は混乱しているが、増援がくれば態勢を立て直すだろう。

逃げるのであれば、今のうちではある。しかし騎兵の追撃にどれ程逃げ切れるのか。そして逃げたとしても、道を塞ぐように動かれば歩兵部隊も追いつがってくる。それではどうしようもない。

そこでヴァンが「……仕方ない、か」と言い、自分が囹になるといい始める。それも一人で。

そのままでは反論されると分かっていたのだろう。続けてヴァンはドライゼムが彼に執着していたことと、現に街中でエルヴァ軍を引き付けられ、そしてその戦闘を切り抜けてきたことの二つを挙げ、反論を封じ込めようとする。

「恐らく、エタルドの全軍にこの命令は行き渡っている。俺が引き付けられ皆が生き残る可能性も上がるはずだ」

「……」

「危険で無謀な策だということも分かってる。だがこれも団長の責任……」

途中まで話した、その時だった。

ゴツと、鈍い音が鳴る。

レグスが拳を固め、ヴァンを殴り飛ばしていた。

「レグ……ス!? 一体何を……」

「当たり前だ、阿呆。まったく……」

近づき、胸倉を掴んで引き起こす。レグスの顔には、今までヴァンが見たことも無い怒りが表れていた。

「街中で止められなかった連中も連中だが、それよりもっと許せんのはお前だ。責任、だと……？　なら聞くが、お前の言う責任とというのは何に対する責任だ？」

「ッ……そんなの、言わなくても分かるだろう！　俺が皆を危険に……」

「危険？　そんなもの、戦場で生きている限り付き合っているものだ。今回のも、それが単に大きくなったただけだ。それにだ、お前はどやってその責任を取ろうとした」

「……」

レグスの指摘に、ヴァンが目を見張る。

「長年の付き合いだ。大方お前の考えは分かる。さっきの案以外に、いざとなれば、自分の身を売ってでもわしらを助ける腹積もりだった……そうだろう？」

「……危険な作戦なんて今までいくらでも立ててきた。それでも生き残ってきたんだ。これぐらい、切り抜けてみせる！　それに今回の件は俺に責任があるんだし、これぐらいは……！」

「それにしたところで、切り抜ける気があれば、だろう。初めから自分の犠牲を前提にしていると、そもそも信用なんぞできん」

冷静に、あくまで冷静にレグスはヴァンの反論を潰していく。

「以前までのお前の作戦は、確かに危険があっただろうが、お前自身が生き残ろうとする意思が感じられた。ここまでの無謀は絶対にしなかっただろうよ。だが、今のお前はどうか？」

「……」

「責任がどのと言うが、今のお前がそれを言ったところで逃げているだけ、もしくは自分を不必要に追い詰めるための方便にしか聞こえん。普段のお前なら、こういうときはどうした。何が何でも生き残り、少しでも仲間を生き残らせようと指揮をし続ける……例え腰抜けといわれようと、それが団長としての役割だからだ」

「それ、は……」

「責任を感じるのとは分かる。だが、感じすぎて自棄になるなど断じ

て許さん。ましてや、自分を犠牲を前提にした行動など仲間に対する最も重い背信だと思え。……ブレイス」

「……ああ」

「頼まれてくれるか」

「……ふう、まあ仕方ないだろうな。このまま逃げられるかと思っただが、ままならんのが戦、か」

肩をすくめて言う。そしてようやく胸倉から手を放されたヴァンの側に歩み寄り、「行くぞ、団長」と声をかける。ヴァンは何かに感じたかのようにレグスを見、その顔を凝視した。

「レグス、お前……！」

「この状況なら、どの道誰かがやらなきゃならんというのは決まっていたことだ。大のために小を殺す……普段のお前なら、悩んでもこういった判断は下せただろう。仲間と合流する前に、頭を冷やして置けよ。そうできれば、お前も含めたキルヒア騎士団全員この生き残れんだろうしな」

顎にたくわえた髭を弄び、先のことに言及する。そのことに胸を突かれたか、ヴァンは顔を俯けた。

「それにどうしても責任を感じてしまうというのなら、仲間達に裁いてもらえ。自分で何もかも決める必要も無い。それで皆がお前をいらないというなら、その時は好きにしろ。それくらいしてこそ『責任』というものだ」

「……」

「……少し長話しすぎたな。ブレイス、必ず送り届けるよ」

「無論だ。お前も、できるなら生き残れよ。仲間達共々な」

「ああ」

ヴァンたちにレグスは背を向ける。彼の視線の先には、騎馬隊があげていると思しき砂埃が上がっていた。

ブレイスはヴァンを連れ、離れ始める。「レグス……！」というヴァンの声を聞きながら、レグスは得物の大剣を今一度握りしめた。自然、彼の周りには五十名弱の団員達が集まっている。皆レグス

の直属の部下達であり、気心の知れあつた仲間達だ。レグス同様、キルヒア騎士団の古株たちといつても良い彼等もまた、自分達に課せられた役割を理解していた。

全員が全員の目を見遣る。そこには死の恐怖もあつたけれど、それ以上に仲間達のために戦うという決意に満ちている。言葉は交わさずとも、彼等にはそれがわかつた。

だからこそ、レグスは惜しい。こんなに気心の知れた彼等を、それぞれの人生を布衣にして死地に追い込まなければならないとは。それが例え、必要なこととはいえ。

混乱していたエルヴァ軍歩兵部隊に、後続の騎兵部隊が活を入れ、指揮系統を取り戻そうとする。しかし、そうはさせない。仲間達、そして

（手が掛かる団長も、ドライゼム……貴様には渡さん……！）

レグスの体に力が漲り、同時に使うのを封印していた魔導を発動させた。

彼の体を術式が覆い、常以上の力が全身に迸る。

肉体強化の術式……それも、フォルが使っていたものと同種ではあるが、より強力な術式である。とはいえ、それも当然だ。フォルに肉体強化の術式の適正を見出し、教えたのはレグス本人なのだから。

久しぶりに使った魔導の感触と、自分の体に強化が行き渡っているのを確認してから、レグスは団員達に号令をかけた。

「さあ、始めるぞ……徹底的に暴れて、連中を引つ掻き回してやれ
！！」

「応……！」

応えて叫ぶ団員達。

（さて、正念場だ。面倒だが、踏ん張るとしようか……！）

足を踏ん張る。そして強化された肉体の能力をフルに使い、瞬時に敵兵との距離を詰めて大剣を振り回した。

数人がまとめて吹き飛ばされる。その光景に度肝を抜かれたエル

ヴァ軍の兵士達を、レグスに付き従う団員達が襲い掛かった。

敵魔導士部隊が、反撃に術式を展開し始める。こちらの魔導士は今後のために既に後退しており、遠距離から仕留められる可能性も考えて敵兵との距離を開かせないように気をつけながら前進していく。

巻き添えを承知で放ってくる可能性もあると考えたが、ならば一人でも多く屠る人数を多くするまで！

ともかく必死に動き回り、歩兵部隊を出来る限り攪乱しておく。指揮系統の回復を図ろうとするエルヴァ騎馬隊も、どうにか目障りに動くレグスたちを捉えようと騎兵ならではの機動力を活かして応戦する。

激しい戦いの中でふと、手が掛かる奴の元祖……キルヒアのことを思い出す。思えば、あいつも色々な事柄に首を突っ込んで、そして行く当ても無い人間を抱え込んで、色々と自分に迷惑をかけてくれたか。

（まったく、面倒だ……面倒だったらない）

敵兵を切り伏せつつ、レグスは心の内でばやく。義理の父子とはいえ、こうまで似たようなことをしてくれるものか。

強化した肉体で戦場を駆け回るうちに体から鈍い音が聞こえてくる。ミシリ、ミシリという、何かが軋むような音……彼の体の悲鳴だった。

（なんでこんな面倒背負って、戦わなきゃならんだか……）

老いが進むごとに、体が衰えていくのが自分でも分かっていた。同時にそれは、肉体強化の術式を使う負担に体が耐え切れなくなっていくという意味も持っている。だが、彼はそれを知った上で、この戦いに臨んでいた。

騎馬隊が突っ込んでくる。強化した肉体ならどうにか対応ができるとみて、レグスは馬の騎手に飛び掛る。そのまま蹴りをくれて叩き落す。奪った馬をそのまま仲間に分けてやり、次々に飛び掛っては落とし、飛び掛っては落としを繰り返す。

幾人かに騎馬が行き渡った時点で、ついに相手が痺れを切らしたのか。味方を巻き込んだの魔導による攻撃をしかけてくるようになった。

街中では既に行われていたらしいが、ここの指揮官が抑えてでもいたのだろうか？　とはいえ、これで一気に不利になったのは間違いなかった。

まず一人が直撃を受けて、吹き飛ぶ。そのまま街道沿いの木に激突し、もたれかかったまま動かなくなる。その団員の口が動き、すまねえ、という形を作るのがレグスは見えた。

確かあいつは、クロイスだったか。普段は生意気だったくせにとレグスが笑う。団員もレグスの笑みを見たのか、彼も苦笑を浮かべ、そのまま目を伏せた。

（それなのに、なんでわしはあいつらに付き合ってるんだろうなあ……）

何度と無く繰り返し、何度と無く同じ答えが自分に返ってくる問い。時間の無駄なのかもしれないが、これはこれで自分に対する確認になっていいものではないかと最近思う。

騎馬を駆る幾人かの仲間を率い、魔導士部隊に突撃をかけようとするも前を立ち直った歩兵部隊が塞ぎ、勢いをつけすぎた団員に槍が幾本も突きたてられる。最後の言葉も何も出来ずに仲間の命は消え、ただ狂騒のみが全てを覆っていく。

しかしそんなときでさえ、何かしらの声が聞こえたと思うのは幻想がすぎるだろうか。それとも、魔導士が理屈詰めで言ってくる魔力による残留思念にすぎない……？

（どちらでもいい、声が聞こえるのなら）

あいつの最後を見とれなかった、わしにもそんな機会が与えられるのなら。

時が移るに従い、また一人、また一人と仲間が命を落としていく。レグスの肉体もあちこちが限界をつげるようにミシミシとなり続け、そして傷は体の全てにつけられるまでになっている。

「おおおおおおおおおおおおお！！」

ミシリという音も気にせずレグスは大剣を振り回して、近づく何人もの兵士を吹き飛ばす。だが第二撃を放つまでの間隙について、数人が剣を振り下ろす。肩口、腋腹に食い込み、新たな血を大地に流した。

しかしレグスは立っている。震える足を無理やりに立たせて、なおも戦いの気迫をその身に宿している。

傷をつけた兵士達を、大剣を使うまでも無く殴り飛ばした。

「親父い！！」

「待つてろ、今……！！」

仲間が助けにこようとするが、元々戦力差がある。今まで戦ってきた分の疲れもちちらには出始め、動きが鈍っている。そうなれば、もう数の有利は覆しように無い。

すぐさま包囲され、そのまま命を絶たれてゆく。勢いが挫かれつつある今、全滅は時間の問題だった。

命の終わりが近づいている。それがはっきりと分かる。だが、不思議と心は落ち着いていた。気になるのは、こんな戦いにつき合わせてしまった仲間達のことと、そして手にかかる団長ら、離れた仲間達のこと……

（ああ、人生ままならんなあ……わしはこんな面倒なのは望んじやいなかったんだが……）

仲間がいるのも面倒だった。独り身でいるのが好きだった。それを無理やり人助けなんぞに連れ出しやがった、キルヒアの馬鹿。

こんな戦いの時代に阿呆な望みを持って、馬鹿をやって、だが本人が言うとおり、何人もの人間を救った。生きるための光を与えてやって……

（戦いしか出来ん人間のくせに、今の時代をどうにかしようと考えて……）

そして、志の半ばで死んだ。矛盾もなにもかもを飲み込んで前進していくあの姿は、多くの人間の心に残っている。それは当然、今

の団長にも。……あいつの息子にも。

若い故の弱さというのは、ヴァンにはある。しかしそれは誰も
が通っていく道だ。それを乗り越えれば、より強くなれる。今がま
さに、その時なのだろう。

今までも様々なものを乗り越えてきたあいつなら、今回のも越え
られるはずだ。皆に対する責任云々といっていたが、それにしたと
ころで

（結末なんぞ簡単に予測できる。まったく、下らん茶番にしかなら
んだろうに）

苦笑が浮かぶ。なんでそんなこともわからないんだかなあ……

大剣を振り回し、また鈍い音が体から鳴る。鈍くなっていたその
一撃は、もはや脅威でもなんでもない。難なくかわされ、再び食い
込んでくる剣の冷たい感触に力が抜けていく。止めとばかりに腹に
突きたてられた剣が、更に力を奪っていった。

もう、体が動かない。

（限界、か。まあ、よくもったところか）

振り返る。レグスが倒してきた敵の屍が、そこかしこに散らばっ
ていた。騎馬兵も多くその中に含まれており、追撃を防ぐ最低限の
役割は果たしたようだ。

意識が混濁していく。ごぼり、と血が口から溢れ、長年付き添っ
た相棒である大剣も手から滑り落ちた。

（意に沿わない面倒な人生だったが、まあ、いいか……）

ひどく優しい心になって、思う。全てが暗くなっていく。何もか
もが感覚をなくしていくなか、ふと、最後に誰かからの声を聞いた
ような気がした。

——息子を、ありがとう、と。

そして全てが、闇に落ちた。

第六章 “光”へ

ドライゼムはひどく苛立っていた。事件のあった日から翌日、彼は報告だけを待つ退屈な時間をまんじりと過ごしている。

（まさかこうも早く、奴らの存在がヴァンに漏れるとはな……）

破戒者たちからの念話を聞いたときには、流石のドライゼムも焦った。絶対的禁忌である破戒者との接触……今の段階では、絶対に露見を許してはならない事柄である。

すぐさまヴァンらとの連携を取ろうとしていた他の部隊に押しつぶせるような形で命令を下し、適当な名目で彼等を反逆者として追い込もうとした。が、まさか逃げられるとは。

（侮っていたわけではない。むしろ、だからこそこまで人員を投入したつもりだったが、それでもとは……）

しかもヴァンに注意を引き付けられたせいで、団員達も数多く見逃してしまう結果となってしまった。館にいた別の部隊については多少は戦力を削れたらしいが、それが一体なんになるというのか。

チ、と一つ舌打ちする。そのことを考えるとますます苛立ちが募っていく。

当然、隊長たちにはしかるべき処分をするよう下知はしておいた。破戒者たちの実験に付き合って領主館に詰めており、念話で事情を聞いた後すぐに命令を下せる状況にあつたのは、不幸中の幸いというべきだろうが……

（破戒者との接触も、確定的な証拠があるわけではない。レベル力とかいう魔導士がいようが、それもただの妄言で今なら済ませられる）

絶対的なタブーではあるが、そうであるがゆえに彼等の存在そのものを信じるものが少なくなってきた現代。存在を感じること、権力者でさえないのだから、周辺諸国に広めたとしても何の痛みも無い。証拠もない以上、せいぜい妄言と捉えられて終わりだ。

（まあ、だからといって不安要素を放っておくつもりも無い……）
いずれヴァンを服従させるつもりではいたのだ。いい機会とでも
思っておいた方が、まだマシだろう。団員たちはどうでもいいが、
服従させる役には立ってもらえるだろう。

指揮者のいなくなった人形兵もすぐに回収してある。回収した兵
士達も、実験材料として館の一区画で、慰安の名目で拘留している。
街の人間に対しても同様の措置をとり、後の不安は、当然キルヒア
騎士団のみ。

『……お待たせしました』

念話がかかってくる。

「遅かったな。……準備はどうだ」

『問題ありませぬ。この一ヶ月、存分に準備が出来ましたゆえ、調
整も万全。数も仰せの通り揃っております』

「分かった。今からそちらに行く」

部屋を出て、歩き始める。歩く廊下には人はおらず、全体で見て
も人の気配は僅かしかない。この区画は完全にドライゼムの私有ス
ペースである。勝手に立ち入るのは許されず、もし立ち入った場合
は極刑の適用もあるとふれていた。

『は。で、そちらの方はどうになりましたでしょうか？』

「こちらもどうにか態勢を整えられた。まったく、余計な仕事を増
やしてくれる。普通なら、貴様らも隊長どもと同じ目にあわせてや
ったものを」

『……度々の不始末、申し訳ありません』

「フン、まあいい。貴様らと手を結んだ以上、この手の問題は付き
まとうだろうからな。現状何一つ、貴様らのことを漏らすわけには
いかん……貴様らももっと用心することだ。今の段階であれば、切
り捨てるのもまだできるのだからな」

『は……』

半ば脅しともとれる言い方をして、ドライゼムは釘をさしておく。
「まあ、いずれ段階が進めばお前たちも多少は動きやすくなるだろ

う。その際には、戦力の確保以外の事柄にも貴様らに協力してもらう。今回の件を達成できれば、より早く段階を進められるだろうし、な」

『おお……有難きお言葉。この五百年、日陰に居ざるを得なかった我々に、ついに日が当たる場所へゆくことができようとは……』

涙ぐんだ思念が伝わってくる。彼等破戒者にとっての長年の大願、その成就が近いことに心を震わせているのだろう。とはいえ、ドライゼムにとっては単純に煩わしいだけだったが。

「ならば、見捨てられぬようより一層の働きをするがいい。なににより」

扉の前に立ったドライゼムは、乱暴に開け放つ。そこには軍勢を置くにも十分なスペースを持つ中庭が広がっている。そしてその中には二十名ほどの破戒者がおり、背後には

「今回の件を解決できなければ、それなりの覚悟をしてもらう必要がある……それも分かっているな？」

「無論です。ですがその心配は杞憂と言うもの。この力の前では、特に」

——千もの、人形兵がいた。

彼等を見つめる破戒者達の目には、『作品』を仕上げられたという満足が映る。そこには、犠牲になった人間を斟酌する感情は一切無い。ひたすらに、己の欲を満たしたという満足があるだけだった。その様を傍目に見ながら、ドライゼムは人形兵たちを観察する。

一切の動きをすることなく整列し、その体から迸る力を感じて、一つ頷いた。

「……なるほど、確かに自信があると言っただけはあるらしい」

「は……ですが、よろしいのですか？ 貴方様まで前線に出られるとは……」

「俺も気になる事柄があるといっただろう」

「——なるほど、不可解な感覚を持つと言われる、団長殿ですか」「そうだ。それにこの際だ。捕らえるのと同時に、あいつの屈辱、

怒りに、後悔に歪む顔も見てやるのも悪くない。——奴の目の前で仲間を皆殺しにすれば、さぞ良い顔が見れるだろう」

その想像に苛立ちも多少は晴れる。顔をゆがめ、邪気の溢れる笑みを顔に浮かばせる。話をしていた破戒者も、似たような笑みを浮かべた。

「それはそれは……中々良いご趣味でいらつしやる」

「人体実験で悦に入る、お前たちほどではないがな。捕らえて悦に入った後は、洗脳でもしてしまえば後は問題ないだろう。……輿の準備は」

「既に。幾人かは既に偵察に出ております。彼等の足を考えても、そう遠くは離れていないでしょう。今日の夜、もしくは明日の早朝には発見できるかと」

「……ふむ」

顎に手を当て、ドライゼムは何やら考え始める。その様子を怪訝に思った破戒者が「ドライゼム様？」と声をかける。

「考えていたのだが……一つ、搜索する場所を増やしてもらつ」

「は？ それは構いませぬが、一体どこを……」

「お前達が探しているのは、諸国へ繋がる道だったな。その可能性もあるにはあるが……」

ドライゼムは今までの戦いで挙げたキルヒア騎士団の戦功を思い出す。

彼等はすでに、多くの戦果を上げすぎている。例え周辺諸国に逃げようとしても、恨みはそう消せるものではない。警戒されて足止めをくらうか、下手をすれば迎撃されるのは目に見えている。

そんなことを読みきれないヴァンでもあるまい。ならば、より逃げ易いところは

「大陸を隔てる壁……ファレナ山も、探ってもらつ」

沈鬱した空気が広がっていた。

キルヒア騎士団の誰もが疲れた顔をして、その場にへたりこんでいる。エタルドに近い、ファレナ山の麓のとある一角。森が広がる中、そこら一帯が少しだけ開けた場所となっており、そこで彼等は少しの休息を入れていた。

『炎の森』という符丁の場所である。エタルドに来る前、傭兵団に何かあった際の、緊急の集合場所として設定しておいた場所だ。

傭兵という職業柄、依頼主からの裏切り、もしくは諸事情による団の離散と言ったことも警戒しなければならぬため、そういった有事のために、こういった場所を所々に彼等は設けていた。

「親父……」

ぼそりと、団員の誰かが呟く。その言葉に周囲が揺れ、身じろぎする。

後見人として団を引っ張ってきたレグス。彼が戻ってこないことは、それだけ大きな衝撃を彼等に与えていた。

しかし、無理もないとヴァンも思う。自分にしたところで、面倒面倒とことあるごとに口にしていた彼がいなくなつて、深い喪失感を覚えているのだから……

（こんな風に感じるのは、父さん以来か……）

あれからも何人もの仲間の逝く姿、そして逝った報告を受けてきているのに、こうも感じてしまうなんて……

しこりがまた身じろぎする。自分を許すな、もっと追い込めと囁き始める。しかし、レグスに言われた事を思い出して、どうにか耐えることができた。

（それが俺の責任、そして責務、か……）

改めて自分の役割を思い起こし、自戒する。あの時はただ責任をとらなければならないと思い、無謀なことをしてしまったが、それも今は大分落ち着いている。

心の中にレグスがいて、抑えてくれている……感傷的な考えだが、そう考えるのがしっくりくるように思えた。

（なら、今やるべきことは……）

彼から言われた、もう一つのことを思いだす。今まで休んできて、皆も多少は疲れがとれただろう。それに彼等も、傭兵として多くの仲間の死を経験している。

いつまでもここに留まっているわけにはいかないのも分かっているはずだし、これからどうしなければならぬのかを考えなければならぬのも分かるはずだ。

死者を思う時間も与えず、冷徹、といってしまうえばそれまでだ。

しかしそうだとしてもやらなければならないのが団長の務め……

（そうだろう、レグス……？）

心の中で呼びかけ、全員を一箇所に集めるよう伝えた。

団員六百人、非戦闘員も含めれば八百になる人数が、集まる。突然の召集に、団長は一体何をするのかと皆ざわめいている。

そんな中、ヴァンは彼等の前に出て、まず「今回の一件、本当にすまなかった」と言って頭を下げる。

「ドライゼムと破戒者の繋がり……それを見抜けるだけのピースは揃っていたというのに気付かず、巧く立ち回れず、反逆者と言う烙印を押された責任は、全て俺にある」

淡々という。一瞬ヴァンの言葉にレベッカが反応しかけたが、ヴァンはそれを視線で止めた。力を込めた視線に、渋々といった形で下がる。

「……」

「そんな人間が言うのもどうかと思うかもしれないが、しかしそれでも俺達は生き残らなければならない。奴らの追撃は熾烈を極めるだろうが、それでもだ」

ヴァンは皆を見回す。続けて「レグスを失って、悲しみに沈むのも分かる」と言う。その事実を改めて話すのは、ヴァンにとっても辛かったが、どうにか口調を変えずに言い切ることが出来た。

「だが、そんなだからこそ、先を見据えなければならない。そのためにも、皆には一つの決断をしてもらいたい」

「決断……？」

「決断っていったって、何のだよ？」

沈黙を続けていた団員達が、初めて疑問の声を出す。その疑問の声に、ヴァンは

「簡単だ、すぐに済む。――俺を、殺すかどうかのだ」

――こう、返した。

再度の沈黙。そして、その沈黙は大きなざわめきとなって爆発した。

「おい、ヴァン！？ 一体何を言い出しやがる！？」

「兄さん！？」

「ちよつと、何を言い出すの！？」

団員達、そしてフォルやレベツカも問い詰めようとする。しかしヴァンは、あくまで冷静に首を振って彼等を諫めた。

「皆を危険に晒し、そしてこんな結末を招いた俺の責任は、誰が見ても明らかだ。エルヴァ軍の騎士団としてやっていく未来を奪った俺に、皆にはその権利がある」

言ってから腰の剣を抜いて、地面に突き立てる。その隣に座って、首を差し出すようにかがんで見せた。

「一応、これ以後どう動くかについての考えもまとめてある。それに従うもいいし、無視してもいい。不甲斐無いにも程がある団長だが、最低限の役割は、とりあえず果たしたつもりだ」

「……」

「これで全ての罪が償えるとは思はない。恨みが晴れないというんだったら、翩り殺しにしてくれた方がいい。なんだったら、ドライゼムに突き出してくれた方がいいだろう。そうすれば少しは罪を軽減できるかもしれない。俺は、全てを受け入れるよ」

目を伏せ、「これで、言いたい事は全部だ」と最後に残し、口をつぐむ。もう何も言うことはない、ということなのだろう。が、そ

ここに

「一つ、確認をさせてください」

という声が上がった。今まで黙っていた、イルシュだった。ヴァンは目を開け、唇を一字に固めた彼女の姿を捉えた。

「あなたはエルヴァ軍での未来を奪ったといいました。ならば、逆に問います。……エルヴァ軍での未来とは何ですか？」

「……」

「言いたい事は理解できます。あのままであれば、戦争を終わらせるためにより強い影響力を持てるようになったでしょう。皆も俸禄を得て、今までのような状況に流されるような生活をしないで済んだでしょう。でも」

息を吸い込み、

「それは、破戒者によって壊されることが確定した未来でしかない
！！」

大声で叫んだ。

「レベツカさんの言うとおりなら、人形兵に私達だってされていたかもしれない。何も考えることが出来ず、ただ戦うことだけを強いられる。そんな尊厳も何もない、惨めな生き物にされていたかもしれない。そんな未来など、私は欲しくない！」

「……だが、巧く立ち回っていれば、皆をこんな状況には……」

「巧く立ち回って何ですか！？ レベツカさんに破戒者のことを知らされても、そのまま黙って、しかもドライゼムと繋がっているのを知ったにもかかわらず、何もせずに騎士団におさまったままにいることですか！？」

「……！！」

「確かに、こんな状況にならずに破戒者を倒す方法だってあったのかもしれない。ドライゼムを止められる方法も、そうでしょう。でも、例えそんな方法があつたとしても私は、あんなことを平気でする連中をそのままにしておくほうがよっぽど……」

ぐっ、と息を詰める仕草をする。イルシュは目を伏せ、彼等に対

する怒りに一文字に合わせた唇を震わせていた。

そして決然と顔を上げ、周りの団員達を見回す。

「私の考えは、聞いての通りです。確かに皆を危険に晒したのかもしれない。エルヴァでの未来を奪ったのかもしれない。でも、それでも私は、ヴァンと一緒にいたい」

「……」

「ヴァンがどれだけ皆のことを考えていたのか、それは団員全員が分かっているはずです。この状況を招いてしまった罪は重いのかもしれません。でも、だからといってその全てを捨てて、命を奪って恨みを晴らすのが、筋なのでしょうか？ もしそんな人間がいるとしたら……」

すっと立ち上がり、ヴァンを守るかのように前に立つ。そして剣を抜き、「まず、私を殺してからにしてください」と言い放った。

「……イルシュ、これは俺の問題……」

「それで、関係ないと続けるつもりですか？ ……ふざけないで下さい……！」

怒りのままに、イルシュが叫ぶ。

「全部の罪を被るみたいな言い方をして！ それをいうなら、ドライゼムと破戒者の関係を何一つ気付けなかった、私たちにだってその罪はあるはずです！ レグスにしたって、こんなことをさせるためにあなたを生き残らせたわけじゃないでしょう！？」

「……！ ……だが……」

「もういいです。私は私の意志を貫きます。……許せないという人間が居るなら、さっさと立てばいいでしょう！？ 早くしなさい！

その代わり、何が何でも負けませんから……！」

金切り声にも似た大音声が、薄闇の包む森に響く。

しばし、その声の余韻は辺りに残っていたが、それが止んだときくつくつという笑みが聞こえ始めた。声を出しているのは、サイアム。

「いや、参りました……あの控えめで通していたはずのあなたが、

こうまでなるとは……」

「サイアム、こんなときに何を……！」

「おっと、気を害されたのならすみません。ですが正直……なあ」
ぐるりと辺りを見回して、言う。

「言いたい事を全て言われてしまった、我々の立場はどうなるのかと」

「……え？」

予想外の返事に、呆けた声がイルシュの口から出る。するとサイアム以外の団員達も、続いて笑い始めた。

「いや、まったく……、つたく、こういうことというのは男だつてのが相場だろうに」

「何よ、それ。女を馬鹿にしてない？　むしろいえるのは女の方でしょ」

「イルシュに限っては、確実だな。やれやれ、親父が死んだ後だつてのに、ここまで気持ちよく啖呵切られたら、俺たちだつて言うしかねえじゃねえか」

「違うない。つか、もしかしたら親父以上にいいまとめ役になるかもしれないなあ」

全員に笑みが広がっていく。中にはむっつりとした顔をした人間がいたが、彼等は彼等で面白がっている気配が伝わってきた。

そんな中、フォルが先立って立ち上がる。

「兄さん、イルシュさんの言うとおりだよ。それに僕にとってのキルヒア騎士団の団長は、義父さんと兄さんしかいないんだ。そんなことは、もうこれからは言わないで」

「フォル……」

「というか、それ以前に皆、兄さんのことが好きなんだよ。ずっとみんなの事を気にかけて、守ってきた兄さんがね。そうじゃなきゃ、レグスだって命を懸けたりしてないと思う」

そこまで言って、一旦フォルは言葉を切る。

「いずれするつもりだったけど、これからのこともあるし……今が

いいか」

とヴァンに聞こえないくらい小さな声で言った後、腰に挿した自身の武器である戦斧を持つ。続けて片膝をつき、その柄を両手で捧げるように持ち上げた。

何事をするつもりなのかと見ていたヴァン達は、そこで彼の真意に気付く。

これは宣誓だ。この先の生涯の全てを主に捧げるといふ、戦士の宣誓。

「フォル!?」

突然の行動に、思わずヴァンは立ち上がる。しかし、フォルは気にした様子も見せずに続けた。

「言ったでしょ、いずれするつもりだったって。できれば落ち着いたときにしたかったけど……まあ仕方ないね。で、受け取ってくれ……違うな、受け取っていただけですか、我が君」

肅々とした態度で、返事を待つフォル。見ていた団員達も「おお」とざわめき始めた。「こんなときにやるとは、フォルもやるじゃねえか!」という歓声が上がる。

「ふむ……なら年長者として、負けておれんな」

「同じく。ブレイス殿」

今度はブレイスとサイアムも同じ様に武器を捧げる。

「おいおい、こりゃ俺たちもうかうかしてられねえぞ!」

「うし、こうなったらトコトンだ。俺も……!」

「おい、抜け駆けかよ!」

「えー、俺そこまでヴァンを認めてるわけじゃねーんだけど」

「ほー、だったらイルシュに挑んでくるか? 多分ズスタズタにされて終わりだろうけどな」

「おおっと、うそうそ。勝てる気がしねえし。……ま、仕方ねえか」

次から次へと武器を持ち、捧げる団員達。やがてそれは女子供にも伝わり、「あんた達ばかりずるい!」と言い出し始めて思い思いの品を持ち出して捧げてきた。

「みんな、な……」

何故だろう、涙が次から次へと溢れてくる。

こんなときなのに、皆が立ちなおったらずくに逃げなければならぬのに。

嬉しくて嬉しくて、涙が止まらない……

「……なんですか、これ。茶番もいいところじゃないですか」

白けたように言うのは、イルシュ。

「私が一番初めにヴァンを庇おうとしたのに、捧げるのは一番最後なんて……悪い冗談にも程があります」

「イル、シュ……」

「……まあ、これが皆の意思です。こんな結果になったのは不本意極まりないですけど、でも……」

硬い表情がとけ、笑顔になる。

「嬉しいものは、嬉しいですね。……では」

改めて、イルシュも武器を捧げた。

全ての団員が、揃ってヴァンに頭を垂れ、言葉を待っている。

感謝の言葉が沢山頭の中に浮かんできく。しかしそのどれを言うても今の気持ちを全て表せる気がせず、そして何もいえないほうがまずいのかとも思い始めて、結局たった一言。

「……受け、とる」

嗚咽を交えて、言うしかなかった。

既に闇は溶け、薄い光がファレナの森に差し込み始めていた……

「凄いのね……あの、ヴァンって言う人は」

移動の準備に全員が慌しく動く中、イルシュにレベツカが話しかけてきた。一瞬、街中で一緒に行動していたという事実が頭をよぎるが、苛立ちと言った感情が起こる前にどうにか封印し、「当然です」と返せた。

「普段から皆の事を一番に考えてるんですから。与えられる恩賞にしたって、全て均等に分けていますし」

「それに、指揮も堂に入っているし？」

「そうです。……なんですか、レベツカさん。ヴァンが指揮しているのを、見かけたことがあるんですか？」

新米のくせに、と言外に含めていう。それに気付いているのか、面白そうにくすぐすと笑ってから「ええ」と応えた。

「街中を逃げているときにね。私と同じくらいなのにつて、正直思ったわ。さっきの件にしたってそう。あんなの、並の人間に出来ることじゃないし」

私を受け入れたのもね、と最後に続ける。レベツカの件についてはあの後改めて討議し、結局ヴァンの時のようにお咎めなしという結論が下され、行動を共にして逃げる事が決められていた。

「街中では気にするなつて、ヴァンに言われたんだけどね。でも貴方達にとつて、私が疫病神であることには違いないんだし……むしろ、私のほうが殺されても文句は言えないって思つてただけ」

「……他だったら、そうかもしれない。でも私達は、キルヒア騎士団……もう騎士団でもなんでもないんですけど、慣れちゃいましたね……ですから。貴方ほどじゃないにせよ、色んなわけありの人が集まっているんです」

かくいう、私も。声に出さず、胸中で呟く。とある国の貴族……それもエルヴァに攻め滅ぼされた。それがイルシュのかかえるわけだった。

ほぼ無名と言つていいほど名前が知られておらず、国の上層部とのコネクションもない。その上領地らしい領地も持っていない、館一つだけがある名目貴族に等しかったとはいえ、国に連なる貴族であることには違いない。

齒向かった相手には容赦はしないドライゼムであつたから、いくら無名であつたとしても徹底的に潰しに掛かるだろう。国を占領したドライゼムは、王族、貴族問わずに徹底的に肅清した。

そんな肅清の嵐が吹き荒ぶ中、無名であつたことが幸いして手を伸ばされるのが遅れ、逃げる事ができた。

父も母も物心ついたころにはおらず、イルシュの方からすればなぜ存在しているのかも分からない家のために縛られているという考えしか持てなかったため、家を離れることに抵抗はない。むしろせいせいしたといつてもよかった。

サイアムを初めとする護衛や使用人などは父と母に恩があるらしく、彼等もつき従ってくれたことで馬車を調達し、逃げる事ができたが、しかしある程度まで逃げた後で困ったことが分かってしまう。

どう生活すればいいのか分からないのだ。サイアムたちも長年貴族の家で生活してきたためか、どうにも市井での勝手が分からずにおり、このままではどうしようもないというところまで来てしまう。お金も貴族での生活に則った使い方をしていたものだからすぐになくなり、いつそのこと、家から持ち出してきた宝石類を売ろうかと思っていた、そんなとき。「どうしたの？」と、ヴァンが声をかけてくれた。それが、彼との出会い。

そして、「困ってるなら、きなよ」と続けて、キルヒア達の下に導いてくれた。

（それからずっと、ヴァンのことを見てきました……）

彼はキルヒアに相談し、どうしても助けたいと願い出る。するとキルヒアはそういった品は足が付きやすいといって危険を指摘し、その上で馴染みの商人達と連絡を取り、生活費を工面してくれた。

しばらく生活できるだけのお金もたまり、このまま去ってもよかった。しかしなぜかそういう気にはなれず、恩を返すと言ってキルヒアたち、いや、ヴァンの元に残り続けていた。

傭兵団での生活も初めは慣れず、トラブルを起こしてばかりだったが、やがて時が経つに連れて、館の中で過ごしていた自分がどれだけ恵まれていたのか、自分がいかに小さい世界にいたのかを知ることになる。

外を見ることができず、小さい世界で腐るしかなかった頃とは違い、外の世界では否が応でもそのありようを見せ付けてくる。戦いしかり、人の死しかり、病、飢えしかり……

そんな現実においても、なお人に優しくあれるヴァンとキルヒアが、どれだけ眩しかったことか。

いつしか、ヴァンの力になりたいと思う自分がいることに気付く。その思いに気付けば、あとは早かった。

迷惑でなければと傭兵団に参加。貴族のたしなみとして剣の扱いには通じていたし、館の中で腐っている間中稽古をしていたこともあって、どうにかやっていけるだけの能力は備わっていた。

後は、ヴァンたちに突き従い、戦場を駆ける日々だ。

数多くの人の死にも立ち会ったし、自分も死を振りまいた。そんな中でもやはりヴァンの存在は、自分には輝いているように見え、できることならずと添い遂げたいと、自然に思うようになっていた。

（でも、私はキルヒアが亡くなってしまったとき、何も出来なかった……）

あの時見せた、ヴァンの嘆き。それからだった。ヴァンが人との深い関係を持つのを、避けるようになったのは。

その様子は今でもはつきりと思い出すことができる。正直、あのときの嘆きを見ていれば、ヴァンが自分を避けるようになったとしても仕方ないと頭では思えてしまうのだ。

しかし、感情はそうはいかない。断られた後で、エタルドでは勝手に視線がヴァンに移ってしまうし、物思いに沈むことだって多くなってしまった。

サイアムに言われるまでもなく、自分でそれらについては気付いていたのだが、それでもやめられず、ヴァンと話すのを避けていたのもある意味では自分のせいでもあるとイルシュは考えていた。

それで今までずっと奇行を繰り返し、募る思いを溜め込んできたのだが……

（もう、いいですよね）

そう、今は開き直ってしまっている。あんな公衆の目の前で、あんな啖呵を切ったのだ。あれでは好意を宣言しているも同然だ。今思えばなんて恥ずかしい真似をしたんだろうと思うと同時に、あんなことをしたんだから、もういいという考えも浮かんできてしまっている。

ヴァンの考えも分かる。しかし、自分はそれだけでは済ませたくない。どうにかしてでも、ヴァンと特別な関係になる。例えそれが、彼にとつての迷惑でも、完全に嫌われるのであれば、付き添っていきしていきたい。

こんな状況にもかかわらず、いや、こんな状況だからこそ自分の女性としての考えを自覚し、苦笑が漏れた。自分ではもっと、しっかりとした人間と思っていたんですが。

「……イルシュさん？ どうしたの、さっきからぼうつとして」

ふと、声をかけられる。どうやら考え事に、気を集中させすぎってしまったらしい。「いいえ、何でもありません」と返しておく。

今は準備に忙しく、彼と話をする暇もない。立場や状況は弁えているが、どうにももどかしい。

もし無事にこの状況を切り抜けられたら、その時は……少しだけそのときの情景を夢想してから、イルシュは作業の続きに入っていくのだった。

少しの話し合いの後、行動の指針は決まった。

このまま東に抜け、東域を目指す。それがヴァン達の出した結論だった。

もし西域の他の国々に逃れようとしても、自分達はエルヴァの軍としての挙げた軍功がある。それは他国から見れば侵略の手伝いに他ならず、しかも多大な損害を与えているという憎しみをもたれて

いるに違いなかった。事情を話すまでもいかず、むしろ足止めをされるか、最悪迎撃される可能性のほうが高いだろう。

騎竜も通れる広い道もどうか見つけられた。野生の魔獣の獣道だが、今はそれでも十分な僥倖といえる。非戦闘員を見捨てて逃げるなど、キルヒア騎士団の流儀ではあり得ないのだから。

まずは逃げ切ることが第一と考え、荷物や食料、武器も余分なものとは全て捨てる。捨てたものから逃げ道を絞り込まれるという可能性もあったが、それよりは今は速度を少しでも上げて距離を離すのを優先させるべきだった。

（人形兵たちのこともある……）

それに、今居る場所は以前戦ったエタルドのように人の目は自分達以外に無い山道だ。破戒者の本隊がではって来るのではないかという考えもあった。

（その時は、俺の感覚だけが感知できる手段になるか……）

今までの戦いを思い返し、心に刻む。離れた場所においてもやりとりができるというし、もしかしたら最悪の場合……

（……いや、そうならないように注意すればいいだけだ）

首を振って、余計な考えを払う。幾ら破戒者が強力とはいえ、東に逃げたことに気付くのが遅れる可能性だってある。あまりに不安になりすぎては、皆に不安を伝播してしまうだろう。

やがて準備が終わる。皆の顔を一つ一つ確認してから、「進軍」と号令をかける。

八百あまりの小さな軍勢は、ヴァンの導きに従って歩き始めた。

「……ドライゼム様、貴方の読みどおりです。ファレナ山の麓の一角に、野営の後を確認したと連絡がきました」

「やはり、か。くく、やはりお前は聡明だな、ヴァン。だが、聡明だからこそ動きも読める」

「あの隊形といい、貴方様のご慧眼、感服いたします。……では」

「ああ、こちらも予定通りだ。陣形を取りつつ、人形兵を進軍。こまめに連絡を取り合い、打ち合わせの通りに仕掛ける」

「ハ」

「さて、俺も行くとするか……」

ドライゼムは人形兵たちの持つ輿に座り、悠然と前進を命じた。

異常を感知したのは、出発して一日がたった午後のことだった。

ヴァンの頭にあの違和感が走り、「来るぞ!!」と叫ぶ。瞬時に全体に広がり、団員達は辺りを警戒し始めた。

緊張の時間が流れる。しかし、幾らたってもくる様子がない。

何だ？ ヴァンが読み違えたのか？ という空気が広がり始める。念のために魔導士たちに話しかけて確認をもらうも、当然感知できているはずはなかった。

そんなはずはない。ヴァンは心の中で返しつつ、感知することに全力を傾けていた。ここまでこの感覚が外れたことはないのだ。ならば、こちらも全幅の信頼を置くまでだ。

こちらの緊張がとけかけた、その瞬間。

「！ 上だ!!」

とヴァンが叫ぶ。直後、木の上から落下してくる複数の影！

「木の上から……!？」

フォルが驚きの声をあげる。しかし体は反応してくれており、斧で頭上からの一撃を受け止めた。

続々と木の上から人形兵が襲い掛かってくる。周囲の警戒を怠る前に、どうにか呼びかけられたため、奇襲を防ぐことが出来ていた。

しかし奇襲を防げたところで、人形兵の強さは変わるものではない。既にエタルドの街で戦った数、五十人が姿を表しており、手にした得物で形振り構わぬ攻撃をしてくる。

「陣形を崩すな！ 非戦闘員を守るのを最優先！ 魔導士隊も、無理が無い範囲で魔導の援護を！」

「おう！」

「了解！」

術式が展開し始め、戦場に輝く文字列が乱舞し始める。陣形を崩さぬまま、どうにか一対複数の形をとろうと動く。騎馬隊を本来任されている面々も、今は馬を下りて徒歩での戦いに参戦していた。戦いが始まってヴァンは、しかし指揮を取る傍ら、どこかおかしいと感じていた。

なぜ、この人数で攻めてきた？ 確か五十という数は、破戒者一人が操れる限界の数……個人差でいくらかのばらつきはあるが、大体そこらだとレベル力が言っていた。となると、この近くにいる破戒者は一人だけということになる。

しかし、この周辺にはヴァンたち以外の人目はない。破戒者が複数で行動し、人形兵を操ったところで問題はないはずだ。なのになぜ、一人で攻めてきた？

（ある程度場所を掴んだなら、離れている仲間知らせることだって奴らはできるはず。そして合流してから攻めてくればいい。なのに……）

と、そこまで考えて、自分の言葉に愕然とした。仲間？ 仲間がいるはず……なのに、ひとり……なぜひとり……時間稼ぎ、陽動！？ 確信が、ヴァンの脳裏に閃く。しかしその確信は、背筋を凍らせるに十分な冷たさを持っていた。

思わず人形兵を見る。先に見せた異常ともいえる肉体のポテンシャル。可能だと考えたヴァンは、「前進しろ！」と命を下した。戦っている最中だというのに、何をという顔を何人かが向けてくるが、それどころではない。

「ともかく、逃げるんだ！ このままだと、囲まれる！」

ヴァンの超感覚は、周りに蠢きつつある違和感を感じ始めていた。

「ほう、気付いたか。流石だな」

ヴァンたちが前進し始めたという報告を聞き、ドライゼムは嬉しそうに言う。

ドライゼムは昨日から、破戒者たちに人形兵を等間隔に配置し、その感覚を維持したまま探索するように指示していた。

この隊形をとることで、彼等の探知能力を満遍なく活かせる。そしてその破戒者の周囲には、同様の隊形をとった破戒者が散らばり、同じく周囲の探知をさせる。

ドライゼムが考案したこの隊形は見事に機能し、先の野営地の発見に繋がった。現在、ドライゼムを含めた軍勢は、破戒者と人形兵の身体能力を活かし、ヴァンたちを包囲すべく辺りに展開し始めている。

「優秀だなあ、ヴァン。お前は本当に優秀だ」

超感覚もそうだが、それを抜きにしても高い判断力、決断力が備わっている。

以前彼をそう評したが、その評を高く設定しなおす。そしてその命令に即座に対応する、彼の部隊も、やはり十分な実力を持っている。

（弱冠十八にしてこの能力……これから先、どれだけ伸びたことか）
戦に携わる人間として、その点は心に少し引かかる。率いる部隊にせよ、優秀な人材が多く居るのだろう。

（だが、仕方ない）

しかしそのひっかかりをあっさりと無視する。目的の達成のためだ。ヴァン以外は、皆殺しでも仕方ないのだ。

予定通りの行動をとるように破戒者に指示しなおす。こちらの思惑をすぐに見抜かれたことに動揺していたあたり、破戒者といってもこういった知識はないらしい。もしくは、こいつらに備わっていないだけか？ まあ、どうでもいいが。

「大丈夫だ。最初の予定通り行動しても、問題ない」

と言ってやる。いかに指揮官が優れていても、いくら優秀な人材を揃えていても、そして超常的な感覚を持っていたとしても……

「圧倒的な力には、敵わない」

再度、邪悪な笑みを浮かべた。

「くそ、本当に横からもきやがった！」

木々を飛び移り、飛び掛ってくる人形兵に悪態をつきながら団員達が応戦する。

「どうにか、こっちに来る前に……!!」

魔導士隊の一人が、暴爆の術式を使って木々をなぎ倒す。それで何人かは巻き込めたが、しかし血を流しつつ、手首をあり得ない方向に向けつつも、平然と立ち上がってこちらに向かってくる。

「こ、の、化け物共……!!」

冷や汗を流しつつ、しかし魔導の術式を展開し続ける。

「これなら、どう!？」

レベツカが炎壁の魔導を使う。オルクスの時のように、持続してダメージを与えるつもりだ。

まともに喰らい、炎が人形兵の全身をつつんだ。だが、洗脳され、意識を奪われた人形兵にとっては自分の体など気にするものでもない。肉を爛れさせ、満足に剣を振ることもできないままに突進してくる。

「破戒者、どもめ……どこまで人をコケにすれば……!!」

怒りに顔をゆがめるレベツカ。悔し涙さえ浮かべて、魔導を再度発動させた。

「一体何人の破戒者が動いてやがるんだ!？」

「もう四百以上、人形兵が来てやがるぞ!」

息を荒くして、団員達が叫んだ。

「くそ、このまま本当に包囲されたら……！！」

フォルが戦斧を振りまわして人形兵をなぎ倒す。

「終わり、だろうな……」

ブレイスの槍捌きも、疲労の色が見え始めている。

「俺も加わる、諦めるな！」

後方に控えて指揮をとっていたサイアムが、大剣を片手に戦列に加わる。

「貴方達、などに……！」

凜とした顔に、押さえ切れない怒りを滲ませて細剣を突き立てる。

「お前達は後方に下がれ！ 一旦休みをとってから、また戦列に加わるんだ！」

次々に現れる人形兵にも怯まず、前線に立ち、しかしレグスの教えどおり生き残るという決意のもとに戦い続けるヴァン。

だれもが死力を尽くし、戦っていた。だが敵は絶え間なく現れ続ける。ついには前から人形兵が現れるようになり、戦いは死闘の体をなし始めた。

どうにか態勢を立て直そうとヴァンは奔走する。

しかし、一瞬の間隙をついて破戒者が戦場を突っ切り

「が……！！？」

バシン、という音が、戦場に響いた。

「ヴァン……！」

イルシュがすかさず彼の前に立ちふさがり、怒りのままに細剣を突き刺す。喉笛を貫ぬかれて苦しんでいる隙に他の団員達が一齐に攻撃をしかけてどうにか倒す。だが……

「ヴァン、ヴァン！？ しっかりして下さい……！」

兜を放り捨て、イルシュが駆け寄ってゆさぶる。

しかし反応は薄い。

よほどの強さの電流を流し込まれたのか、痙攣したままだ。声も出せないらしい。

「くそ……これを狙ってたつてのか……！」

「まずい、ヴァンがいないと、全体の指揮が……！」
混乱しかける団員達。そこに、更なる追撃が来た。

これまでに以上の人形兵たちの群れが、ヴァン達の背後に現れたのだ。

そしてその中におり、悠然と人形兵が担ぐ輿に乗ってヴァンたちが戦う様をさも楽しげに見ているのは……！

「ドライゼム！……！」

キルヒア騎士団の怒りが、一つの名を形作った。

「よくここまで破戒者に、人形兵どもに抗えたものだ」

ある種の感慨を持って、ドライゼムは呟く。

「だが、ここまでだ。皆殺しにはするが、健闘したことに敬意を払い、実験材料にするのはやめてやろう」

あくまで残念そうに、しかし口には残虐な笑みを浮かべ、この先を楽しもうとする考えを隠そうともしていない。

彼は、ゆっくりと手をあげ……

「やれ」

無慈悲に、振り下ろした。

頭がぼやけ、よく働かない。何だ、一体何が起きた？

ようやく浮かび上がり、まだ混濁しつつある意識の中でヴァンは目覚め、何とか状況を把握しようとする。そうだ、俺はいきなり現れた破戒者に……

そこまで考えて、突然電流のように今までの状況が頭に走った。焦りが心を焦がす。こうしている場合ではない。早く立たなければ。あれからどれだけ経っている？ 仲間達は？ イルシュは、フ

オルは、サイラムは、ブレイスは！？

どうにか体を動かそうと、力をこめる。しかし無常にも、体は動かない。ただ一つ、周囲の状況を伝える目だけが動く。

そこにあつた光景は……地獄だった。

大切な仲間達が、今まで以上の数の人形兵に蹂躪されている。やめると叫ぼうとしても、口が動かない。ただ虚しい喘ぎが漏れるだけ。

「……ヴァン」

ふと、声が聞こえる。抱きかかえられ、上体を起こされる。そうしてくれたのは、イルシュだった。

しかしいつもの凜とした表情ではなく、悲しみと、怒りと、悔しさがない交ぜになった表情をしている。声にも張りが無く、口調もまるで、ただ一人の儚い少女のように弱々しかった。

「ごめん、なさい……多分、いえ、確実に、私達は全滅する……」
なぜそんなことをいう。そう言おうとしても、相変らず口は動いてくれない。

「あの男に、ドライゼムに貴方を渡すくらいなら……そうも考えたけれど、結局出来なかった……」

涙が、彼女の瞳に滲む。胸をかきむしられるような感情を覚え、どうにもならない自分の体を引き裂いてやりたいくらいの怒りが湧いた。

「……今は皆が、守ってくれてるの。応えてくれるかどうかは分からないけど、どうせならやつちまえて……ふふ、こんなときに気を使わなくてもいいのにね……」

顔が近づいてくる。「ごめん、なさい」という声の後で、ふわりと、唇に柔らかい感触が広がった。

そつと、顔が離れていく。不思議なくらい穏やかになった顔に、ヴァンは胸を貫かれるようだった。

「こんなとき、こんな場所でなんか、したくなかった。でも、今逃したら、もう機会もない……ごめんなさい、本当に、ごめんなさい」

……私の勝手に。守りきれなくて……！」

しかしその口から溢れてくるのは、まとまらない言葉と、謝罪の言葉だけ。

そんなことはない。守れなかったのは俺の方だ。皆も、レグスを守れなかったのに、何で俺を責めない……！！

イルシュはそつとヴァンを横たえた後、立ち上がる。涙をぬぐった後には、いつもの凜とした顔に戻っていたが、今はその顔があまりにも悲しかった。

なぜ。という声がヴァンの内から響く。

なぜ、俺は何も出来ない。なぜ、俺は皆を救えない。なぜ、なぜ、なぜ……！！

ドライゼムの姿が映る。満面に笑みをたたえて戦場を見下ろし、何もかもを蹂躪することを目的とする、傲慢そのものといった姿。

怒りが爆発しそうなまでに高まっていく。目に見える全てが歪んで見えるほどに、強烈な感情が体に満ちていく。

諦めない、諦めてたまるものか。お前の目的は、俺らしいな。俺が屈辱に震える姿でも、見たいんだろう。誰がそんな姿を見せてやるものか。仲間を殺し、全てを奪い去って、俺が絶望し、心の底から屈して服従する……

（誰が、するものか……！！）

絶対に屈しない。以前の俺なら、恐らく屈していたことだろう。だが、今は違う。例え全てを奪われ、絶望しても、昨日のみんなの姿が俺に力を与えてくれる。頼りない俺に剣を捧げてくれた、皆の姿が。

もしかしたら、俺の思い込みかもしれない。今戦っている皆は、俺に対して憎しみを向けているのかもしれない。でも、それでも、俺は、俺は……！！

——抗い続けてやる……！！

世界に声なき声が響く。そして——空気が変わった。

その瞬間は、全ての人間が知覚していた。

「……なんだ、これは……？」

呆けたような顔をさらし、近くに控えていた破戒者があたりを緩慢な動作で見回す。

何も変わってはいない……表面上は。しかし、確実に先程までとは違う。

何かが起ころうとしている、それはこの場にいた全員が分かっていた。だが、それなら一体何が起ころうとしている？

自然、戦いの音が止まっていた。まるで、時でも止まってしまっただかのように、誰も動かない——いや、動けない。

そんな中で、一つだけ……動いているものがあつた。

「ヴァ、ン……？」

戸惑った声が近くで……いや、遠くに居るはずなのに、聞こえる。ゆっくりとした動きで起き上がったヴァンは、ありえるはずの無い事象を当たり前のように捉えていた。

さつき彼女は、最後の戦いをするために突撃していったはずだった。しかし、今のヴァンには、それがまるで近くの出来事のように感じられる。

思えば、それは戦場の全てがそんな風に感じられた。距離としては遠いはずなのに、まるで近くにいるような、そんな感覚がずっとさつきからしている。

ふと、仲間の一人が倒れ付しているのが見えた。このままでは、命を落としてしまう。そう思ったヴァンは、ただ一言、『——直れ』

と言った。

「な!？」

驚きの声が、その仲間の周辺に満ちる。距離が遠く、聞こえるはずの無いヴァンの声。それが響いたと思えば、実際に傷が治っていないではないか!？

「ち、治癒術式!？ そんな、専門家じゃなければできない、高等魔導のはずだぞ! なんでヴァンが……!？」

レベツカが叫ぶ。ヴァンの知識の中にも、同様の情報が見つかるしかし、そんな奇跡でさえ、今のヴァンには苦でもなかった。それよりも、もっと重要なことがある……

『——皆、直れ』

言葉を一つ足して、再度呟く。

怪我をしていた仲間達の傷が塞がり始め、更にはもう助かる見込みの無いとすら思えるような怪我をした者でさえも、一様に直り始めていく!

「な、なんだ!？ 一体何が起きてんだ!？」

「さっきからヴァンの声が響いてるけど、どうなってんだ!？」

「お、落ち着け! とにかく気をしっかりさせろ!！」

混乱が広まっていく。しかしそれは、破戒者たちもだ。ドライゼムですら輿から立ち上がり、この異常事態に対処しきれないでいるそんな中、ただ一人、この異常事態の解を見つけている人間が居た——レベツカ。

「ま、さか……表れたっていうの?」

大きくもない彼女の言葉が、全ての人間に伝播する。

「……『世界を繋ぐ者』……!!」

それはより一層のざわめきと混乱を、全ての人間にもたらした。

——五百年前。突如として表れた天王ゼノン。

彼はありとあらゆる才を有し、その才を正しく使って“闇”の時

代を終わらせ、後にアウグストウスと称えられた。だがもう一つ、付け加えておかなければならない事柄がある。

それが『世界を繋ぐ者』。魔導を介せず、その名の通り世界と繋がり、直接操作できる人間。

魔導を介さずに直接操作する力は凄まじく、彼の一言に『世界が従う』のだ。そう、こんな風に……！

『——火よ、起これ』

破戒者の一人が気づくが、もう遅い。彼が呟いた途端、火が起こつて人形兵を包み込み始めた。しかも、まだ終わらない。

『——水よ、砕けろ』

今度は宙から鉄砲水が現れ、再度襲い掛かるうとしていた人形兵たちを押し流した。

『——風よ、吹き荒れろ』

別の一団に、上からの突風が叩きつけられる。まるで重石でものつているかのような、あり得ない重圧に人形兵が膝をついていく。

『——土よ、裂けろ』

地が引き裂け、地割れが人形兵を飲み込む。端をどうにか掴んで助かっている者もいたが、それもすぐに再度の地割れが起こって地の底へ落ちていった。

ありえるはずの無い、それも魔導を発動させても居ない、にもかかわらず、ここまでの力を見せ付ける。

そう、それこそ伝説の再臨であるかのように！

「アウグストウス……」

誰かが呟く。それは隣の仲間にも伝わり、彼もまた呟く。次第にキルヒア騎士団の、全ての団員達に伝わる。伝わっていく！

「アウグストウス……！」

「アウグストウスだ……！！」

「蘇ったんだ、この時代に……！！」

「アウグストウス……！！」

「アウグストス!!!!!!!!!!」

歓声が、野山を突き抜けた。

終章 再臨

辺りに満ちる歓声を、ヴァンはどこか遠い声で聞いていた。

正直、『世界を繋ぐ者』といわれても、ピンとこない。それが正直な感想だった。

しかし、この力が目覚めたことには本当に感謝していた。

（あの地獄から、仲間を助け出せた……）

それが出来たことには、ほっとしている。

ふと、思う。全てが近くにいるように感じ、そして何もかも出来そうなほどの万能感を感じる中、今まで幾度も自分を助けてくれたあの感覚も、自分がその、『世界を繋ぐ者』だったせいなのだろうか。そういえば、語りかけてきたような感触もあった……

——至ってしまったか……

そこで突然、声が聞こえた。しかも声が聞こえた直後、世界の全てが止まったように動かなくなる。異常な世界の中で、ただその声だけが聞こえていた。

知っている誰でもない声。だが、その声を聞いた途端ヴァンは（何で、キルヒアを思い浮かべた……？）

——恐れる事はない。ただ、語りかけているだけだ

心を見透かしたかのように続ける声。しかし、なぜか恐れも、不安も感じない。

力強くもあるが優しくもある。聞いているだけで、守られていると感じさせる、温かさを持った声……

——君のことは見ていた。世界の深淵、そこから、私と同じ気配

を感じていた

（私と同じ？ 一体どういう……え……！？）

驚愕が、体を突き抜ける。まさか、まさか、この声は……！

——察しの通りだ。私の名はゼノン……かつて、アウグストウスと呼ばれた者だ

言葉が、出せない。一体どういうことなのか。見ていたって、俺の事を？

——私は、告げるためにここに来た。君に課せられた使命を

（使命……？）

——そうだ。世界の重さを受け止めながら、絶望せずに歩んでゆける者。君の叫びは世界を動かし、こうして私に対話する機会を与えた

——私も君と同じく、世界より選ばれた。これより先、かつての私のように、世界に歪みを起こす者たちと戦い続けるだろう

——それは果てしなく長く、困難な道だ。しかしそれを受け止める者を、生きとし生けるものは選べない。世界が全てを断じていく——君も、君に連なるものも、君に仇なすものでさえ、君を中心として起こる運命の渦からは逃れられない

——運命の渦は、優しい君の心を引き裂いていくだろう。君を幾度と無く傷つけることだろう。それが私には辛い。何も出来ずに居る私に言える資格はないというのに

嘆きを乗せた声が、幾度も響く。

不吉さを孕んだ予言ではある。しかし、まったくと言っていいほ

ど、不快さは無かった。この声のせいなのだろうか。

改めて、予言を自身の中で噛み砕いてみる。

自分を中心として起こる、運命の渦……それが自分を巻き込むのか。そしてそれが、俺を傷つけるのか。

ふと、先程の情景が頭に浮かぶ。

この力が目覚めなければ、仲間達は皆殺しにされていたことだろう。これと似たような事柄が、起こるといつのか。……けど、俺は……

（抗います）

自然と、この言葉が出て来た。運命の渦に、全てに対して、抗ってみせる。

絶望するかもしれない。悲しみに沈んでしまいかもしれない。でも、そんな俺にも優しさをくれた人がいて、そして今度は、強さを与えてくれる人たちが居た。

——進むと言うのか。あのような悲劇を目のあたりにして。どこまでも堕ち得る、人の冷酷さを目の前にして

（それは、貴方もそうだったはず……違いますか）

伝承に伝わる“闇”の時代。その惨状は、聞いているだけでも身震いのするほど凄惨さを秘めていた。

その時代に生き、“光”のために戦ったゼノン王は、どれほどの嘆きと絶望を乗り越えてきたのか……想像すら出来ない。

（貴方ほどの強さはないかもしれないし、俺は弱いから、また誰かに助けてもらうかもしれません。でも、俺は……俺には、優しくしてくれた人たちの思いが残っている）

だから、立ち上げられる。絶望に抗う力を、与えてくれる。

——そう、か……
——君は、強いな……

静止した世界に、ひびが走る。やがてひびは大きくなり、世界の全てに走り始めた。

——君と話せて、よかった
——君の想いが、優しさが、強さが伝わってくるのを感じる
——ならば、私が言えるのは一つだけ……

これからの時代に行くヴァンに、遙かな過去を生きたアウグストウスは、祝福を与えるかのように告げた。

——君に世界が、優しくあらんことを

そして、静止した世界は……崩壊した。

仲間達の歓声が聞こえる。

（アウグストウス、か……実感がまったくないんだけど、な）
自分にあるのは、ただ『世界を繋ぐ者』であるという一点だけ。
“闇”を払うほどの働きをしたわけでもなければ、大陸を覆うほどの国を治めたわけでもない。比べることさえおがましく感じてしまう。

ただ……それでも仲間達が、そう言ってくれるのであれば
（今は、それでよしとしよう）

一つ頷く。
体は動く。既に雷を食らった影響は、抜けているようだ。
一歩、踏み出す。また一歩。一歩づつ、一歩づつ踏み出して……

駆け始める！

「ヒ……！！？」

「ア、アウグストウス……アウグストウス！！」

「また、お前は現れるというのか！！ 我らの前に……！！」

先程までと逆転し、恐慌寸前にまで破戒者たちは陥る。

「うるたえるな！！」

ドライゼムの叱咤が、そんな彼等を現実へ呼び戻した。

「例え相手が『世界を繋ぐ者』であろうと、この状況は変えられん。いや、変えられてなるものか！ 貴様ら全員の力を振り絞れ！ 奴を、ヴァンを止める……！！」

しかし彼からは余裕の表情は既に無く、明らかに焦っていると分かる声音だった。

だが、一軍を率いる彼の統率力は確かなもので、叱咤を受けてようやく破戒者たちが立て直し始める。

「どういつカラクリか知らんが、世界に働きかける力という意味では魔導と同じだ！ とにかく全力で干渉し、奴の攻撃を防げ！ 人形兵はいくらか捨てても構わん……！！」

彼の命を受けた破戒者たちは、ヴァンの封じ込めに全力を傾けた。
が

「俺たちを！」

「忘れんじゃねえ……！！」

力強い声がヴァンを後押しする。キルヒア騎士団！

「ハハ、とんでもねえな、オイ……！！」

「さっきまで劣勢だったとは思えねえぞ……？」

ヴァンが起こす魔導ともつかない現象に戸惑いつつも笑い、彼の道を塞いでくる人形兵たちを押し出していく。傷ついてもヴァンの力が彼等を包み、回復していた。

「行きな、ヴァン……！！」

「やっちゃえ……！！」

更に戦っていた人間だけでなく、殺戮に晒されていた非戦闘員、

女子供達も声を上げ始めた。

騎士団の全ての人間が、それぞれの形で反攻にでる！

「いけ、ヴァン！」

ブレイスが辺りを薙ぎ払い、

「『世界を繋ぐ者』……見せて、その力を！」

レベツカの魔導が戦場を照らす。

「兄さんの邪魔は、させない！」

フォルの戦斧が敵を吹き飛ばし、

「終わらせろ、ヴァン！」

サイアムが敵に立ちふさがった。

そして、

「ヴァン……行って……！」

イルシュが、熱を持った声で後ろを押した。

全ての声に応えて、ヴァンは行く！

破戒者でさえ、もはや今の彼の敵ではなかった。

「貴様あ……！！！」

一息に辿り着いた、ドライゼムが乗る輿。そこに足をかけ、剣を突きの姿勢で構える。対して輿から立ち上がったドライゼムは、得物の戦槌を振り上げた。

駆け上がるヴァンと、振り下ろすドライゼム。

互いの得物が交差し……戦いの、決着がつく。

「が、は……！！！」

血を吐き出したのは、ドライゼム。彼の胸には、ヴァンの剣が突きたてられている。

今までに無い歓声が、キルヒア騎士団の喉から迸った。

ドライゼムの亡骸を担ぎ、破戒者たちが撤退していく。ドライゼムが欠けた彼等に、もはや戦える意思は残っていなかった。

彼等のなした所業を考えれば逃がさずに倒しておきたいところで

はあつたが、人形兵を切り捨て、撤退に全力を注がれたとなれば仕方が無い。

それよりも今は、この歓声をかけてくれる彼等を、そして……
ちらりと、イルシュを見る。視線が合わさった途端、顔を赤くしてそっぽをむいてしまった。

あの時は、素直に自分の感情を表してくれたのに。

少し残念に思うも、これがイルシュなのだろうと思ひ直す。いつか本当に、答えを返さなければならぬなとも考えて、再び仲間達に向き直った。

再び上がる歓声。だれもが生き残れたことを喜び、そしてヴァンを祝福していた。

その声は次第に一つとなり、ファレナの森を突きぬけ、空まで届かんばかりになる。

今一度、彼等は叫んだ。

——アウグストウス、と

新たな伝説の、幕が開く……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034ba/>

AUGUSTUS

2012年1月2日15時50分発行